ISSN 1348-4184 ・ 第 21 号 ・ 2022 年 3 月

東北人類学論壇

東北大学大学院文学研究科 文化人類学研究室

論文

陳 珏勳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
人と神輿の移動にみる植民地期台湾における日本神社の祭り－台湾神社の「祭七王」を事例として
李 欣晨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
私は「東方工場人」である－中国における政策移民 3 世代のライフストーリー

萌芽論文

ガン ウェンスオ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
マナーを競う－将棋の文化人類学的研究
末谷 夏津樹・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
終活を支える人々－宮城県の終活カウンセラーを事例に
杉山 沙也香・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
骨董市の売買における不確実性－仙台古民具骨董青空市を事例として
柳瀬 文乃・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
「推し」の人類学的研究－「オタク」のインタビュー調査から

東北人類学論壇

Tohoku Anthropological Exchange

第２１号

2022 年 3 月

目　次

論　文

人と神輿の移動にみる植民地期台湾における日本神社の祭りー台湾神社の「祭七王」を事例として
・・・・・・・・・・・・・・・・・・陳　珏勳　1

私は「東方工場人」であるー中国における政策移民3世代のライフストーリー
・・・・・・・・・・・・・・・・・・李　欣晨　28

萌芽論文

マナーを競うー将棋の文化人類学的研究
・・・・・・・・・・・・・・ガン　ウェンスオ　48

終活を支える人々ー宮城県の終活カウンセラーを事例に
・・・・・・・・・・・・・・・末谷　夏津樹　68

骨董市の売買における不確実性ー仙台古民具骨董青空市を事例として
・・・・・・・・・・・・・・・・杉山　沙也香　85

「推し」の人類学的研究ー「オタク」のインタビュー調査から
・・・・・・・・・・・・・・・・柳瀬　文乃　107

人と神輿の移動にみる植民地期台湾における日本神社の祭り
—台湾神社の「祭七王」を事例として

陳　珏勳

1. はじめに

1895 年から日本の植民地となった台湾には、日本政府による統治ゆえに、1945 年まで数多くの「内地人」(日本人)が島都台北に移住していた。植民政策を背景とする社会変動の中、台湾における地域社会の日常生活は大きく変化するなか、「在台日本人」の社会と宗教文化はどのように形成されてきたか。本稿の目的は、日本人の居住人口の割合が最も高い台北を対象とし、台湾神社の「祭七王」例祭を事例として、内地から移民して来た日本人の社会組織と宗教文化の祭礼を含む外地における日常生活の移植、及びそれらが台湾社会へ与えた影響を明らかにすることである。

台湾における日本植民地期の経験や歴史記憶に関する人類学的な研究は数多く見られ、主に戒厳令解除(1987 年)以降に行われてきた(五十嵐・三尾編 2006; 植野・三尾編 2011)。特にこの十数年の間に、植民地期社会の一断面を分析し、生活の実相を明らかにし、植民地期とその後の時代を生きた台湾の人々の視点から関する研究(所澤・林編 2016; 三尾ほか編 2016; 植野 2018; Mio 2021)の蓄積が進んできたが、これまでのところ、在台日本人を対象にした研究はなお不足している。日本人移住者は半世紀の間、台湾社会の一部分を構成していた。内地から外地への移動と共に彼／彼女らはいかなる宗教文化を台湾に移植し、かつそれは現地の台湾文化と相互作用の中でどのように変容してきたか。従来、そうした実態の解明が十分に進められてきたとは言い難い。近年、島都台北に生きた日本人や台湾人の日記、口述資料・私文書などの収集、新聞記事・雑誌のデジタル化やネットワーク化が可能になったことは研究の進展を促しているが、未だに植民地時代における海外神社[1]の祭りに関する研究は極めて少

[1]「海外神社」は戦前、(1)「外地」としての性格を持つ、台湾、樺太、朝鮮、南洋諸島に建てられたもの、(2)「占領地」としての性格を持つ、中華民国や東南アジア、満州などに建てられたもの、(3)いかなる意味においても日本の施政権が及ばなかった、ハワイ、南北アメリカなどに建てられたもの、の三種類に分類できる。なお、(1)と(2)を「狭義の海外神社」、

ない。

これまで台湾に建てられた神社に関連する研究は、主に植民地主義との視点や概念と共に論じられてきており、焦点の違いによって以下の三つに分けることができる。第一が、宗主国の日本から植民地主義によって導入された神社建築形式を明らかにする研究である(青井 1999a、1999b、2005; 陳 2007)。第二が、植民地時代の宗教制度や皇民化政策の実態を解明する研究である(横森 1982; 陳 1992; 蔡 1995; 本康 2003)。第三が、戦後、海外神社の跡地から見た景観の持続と変容に関する研究である(津田 2012、2014; 中島 2013; 金子 2013)。しかし、先行諸研究では、現地の日本人にとって、台湾神社がどのような意味を持っていたか、神社の祭礼はどのように運営されたか、在台日本人の社会と祭りの運営の関係はいかなるものであったかについては、ほとんど分析されてこなかった。それゆえ、本稿ではまず台湾神社の創建と在台日本人の地域社会の形成との関係性を概観し、続いて植民地期の台北に建てられた台湾神社を事例として、例祭の期間中に行われる余興と在台日本人の地域社会団体の運営組織との繋がりを記述する。そして内地人と本島人(台湾人)の間の「共生」の有り様と神社との関係性から、在台日本人の宗教生活様態について検討し、島都台北の生活文化の実態と変容過程について明らかにしたい。

2. 台湾神社の創建と在台日本人地域社会構造の形成

(1) 台湾神社の創建

神社の計画や創建と、大祭である台湾神社祭の行われた過程についての詳細を伝える資料に、植民期に台湾で発行されていた『台湾日日新報』がある。同紙は、1898 年 5 月 6 日に創刊され、台湾総督府の「御用新聞」としての一面を持っていたが、在台日本人の社会容態を知るうえでは有用な資料であると考えられる。また本稿では、在台日本人と台湾人の日記･私文書、植民地に居住した台湾人へのインタビューなどから得られる情報を補足しながら考察を進めた。

台湾に建てられた最初の神社は鄭成功を祀る開山神社であり、その後、1900 年 9 月 18 日内務省告示第 81 号によって植民地「総鎮守」たることを目的として、明治 34 年

(3)を含めた場合を「広義の海外神社」とする(中島 2000: 61; 小笠原 2005: 6)。

(1901 年)10 月 27 日に剣潭山に官幣大社台湾神社(現在の円山大飯店[2]の地)が創建された(台湾総督府文教局社会課 1940: 3)。台湾において規模と社格的に神社序列の頂点に立つ存在であった。台湾神社の創建については、青井哲人が最も網羅的かつ的確にその特徴を指摘している。そのため、ここでは、青井の文書に基づいて台湾神社の創建の特徴を整理する(青井 1999a、1999b)。それはすなわち、第一に、台湾神社の創建は、国家的な創建神社としては初期に属し、鎮祭された期間も植民地として最も長期にわたった例の一つであること、第二に、神社造営事業の一つとして、台北市街地とをつなぐ勅使街道は城内・城外をつなぐ神社への参拝経路であり、植民地の台北市街を象徴する街路であったこと、第三に、1901 年 10 月の鎮座から 1945 年までの約 44 年間に、それぞれ異なる目的から境内の拡張が 3 回なされていることである。

台湾神社の祭神は、開拓の三神とされていた大国魂命･大己貴命･少彦名命の三柱一座、そして北白川宮能久親王[3]の一座の神々であった。台湾神社は東京帝国大学伊東忠太教授の設計により、155 万 9000 坪の敷地面積と基隆河の架橋を含め総工費 35 万の大工事であり、造営は基本的に国庫からの支出が前提とされ、創建や造替などの重要事業には内地の政府及び技術者・有識者が関与した(青井 1999b: 285; 金子 2012: 204)。なお、実際の支出状況を見ると、台湾神社の造営は 1901 年度総督府直営の全営繕事業の約一割から二割相当を占めるという、異常とも思える高い割合を示しており、総督府にとって大事業であったことが分かる。植民地の首府である台北における台湾神社は、植民地の国家的創建神社として最初の事例であり、その後の植民地や地方都市に対して一種の範例としての意味を待ったことが考えられる(青井 1999a: 237-238)。神社工事は神社境内の建築と基隆河の架橋、及び台北城内とこの橋とを結ぶ勅使街道の部分であった。境内の予定地の整備工事は、1899 年に着手され、翌年の 5 月 28 日より始まり、1901 年 10 月 21 日に竣工している。境内の造営物は、三井物産会社の請負による本殿、拝殿、祝詞屋(神明造)、社務所、神饌所、神庫、祭器庫、手水屋、鳥居などであった(台湾協会 1901: 28-31)。そして台湾神社の昭和造替計画は昭和 10 年代になって、造替・遷座の計画が持ち上がった。台湾神社の経年劣化による損傷と境内地の狭隘を理由に昭和造替計画は皇紀二千六百年記念事業として 4 ヶ年計画

[2] 台北における有名なホテルである。
[3] 近衛師団長北白川宮能久親王は、1895年に台湾平定のために台湾に渡り、台南城を目指したが、途中マラリアを患い、同年10月28日に台南にて没した(金子 2013: 149)。

で実施すること、神域拡張のために周辺の要地を買収し、遷座・改築工事を行うことが決定された。なお、改築を期に社号を台湾神宮に改称し、天照大神と明治天皇を増祀するとされ、昭和 19 年には新社殿が建てられたが、遷座直前に航空機事故により焼失するなどの経緯をたどり、日本の敗戦とともに廃絶された(津田 2012: 23)。

(2) 在台日本人地域社会構造の形成

台湾神社の造営計画は、植民地都市としての台北市街の整備･改編と一体のものであった。台北の都市計画においては、満州などのように広大な開発余地のある地域における都市計画とは異なり、すでに台湾の中心地としての機能が整備され、清代からの伝統的形態を確立していた地域に対する計画であった。清代台北都市形態の特徴は、艋舺、大稲埕と城内の三地域(図 2-1)が明確な地域差を呈していた[4]。

艋舺は国内交易に特化した商業地域及び住宅地区、大稲埕は国際港を擁する商業地域と外国人の居留地を含む上層階級の住宅地区、城内は台北府設置によって行政中枢機能の集積地域であった(葉 1994: 40)。なお、台北盆地では、清代まで台湾先住民の平埔族が集落を営んでおり、その後、漢民族が開墾し、大加蠟堡地方において集落を形成した。さらに、移民が貿易を行う商業地域を形成し、清政府は行政庁舎として 1880 年に台北城の政治中心の「台北府衙」を建設し、同時期にその周辺の街路を整備した。また、台北城の築城は 1881 年に起工、城壁は整った方形をなしていた。

台北知府であった陳星聚の監督のもと、主な文廟・城隍廟･考棚などの施設と共に、城内の道路系統の建設が進行・完成した。城内の建設は、地方商人の献金によって進められた。街路は直線を基調とし、南北軸が主流となっている。艋舺の郊商である洪祥雲・李清琳が城内の府後街で商店を建て、その後、大稲埕の茶商も府直街と府前街に屋敷を建設した(伊能 1903: 16)。府直街･府前街･府後街は台北府衙の近傍であり、政治的な役割をもつ街路であった。また、石坊街及び西門街と北門街・文武街の完成

[4] 艋舺(今の萬華)の名は先住民族の言葉で「獨木舟」が原義である。屈尺などの台湾先住民族が舟を渓流に下し、この地に物を交換するために来ていたことから、艋舺の地名が付けられた。清代になり、艋舺は物資の集散地として淡水河の対岸貿易が行われ、台南、鹿港と並んで、「一府、二鹿、三艋舺」と称せられるほど繁栄した。大稲埕は、漢族が移住してきて初めて水田を開いた際、一大埕(稲を干すために設けられた土地)となり、稲熟の秋は埕上に籾が曝せたことから、大稲埕と呼ばれるようになった。城内は艋舺と大稲埕との中間にあって、清代沈葆楨の奏議により台北府がこの地に設置され、その後漸次人口が集まり、市街を形成するに至った(台北市役所 1940: 193-194)。

と共に艋舺・大稻埕・城内の三市街が連結された(黄・鳴海 1996)。

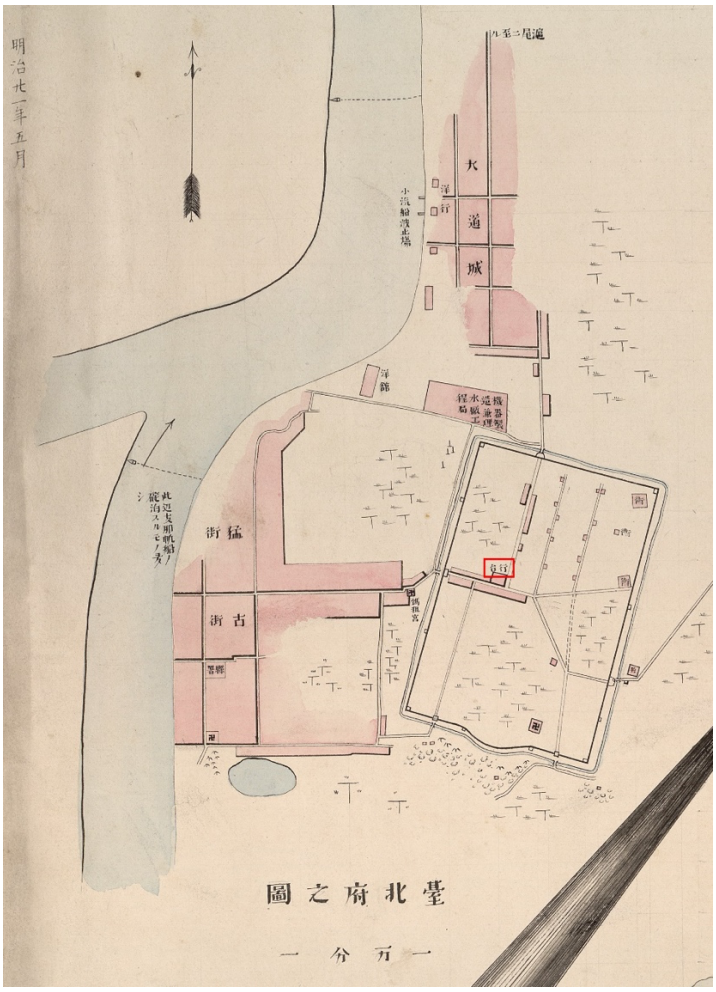


図 2-1: 1888 年台北府の図

出所: 中央研究院地図与遥測影像数位典蔵計画ホームページ(2013)

1895 年当時、艋舺・大稻埕·城内より形成された「台北三市街」では、チフス、ペストなどの悪疫が常に流行し、市街地の衛生状態は極めて劣悪であった。1896 年に奄美島司として台湾を視察した笹森儀助は、基隆到着後の感想をこう述べている。「上陸スレバ臭気鼻ヲ突ク飲食胸ニ支テ消化ヲ害スルノ感アリ是ノ模様ニテハ長ク台湾ノ飯ヲ食スルニ堪エス兎ニ角此臭気ニ堪エルノ工夫ハ第一ト考ヘ･･･」(笹森 1896: 22)。高温多湿の台湾の臭気は当時の在台日本人にとって、大きな違和感や抵抗感を与えるも

のであったことがわかる。理由として、台湾の伝統社会では、火葬を祖先の身体を損ねる風俗ととらえ、土葬するのが一般的だったことが挙げられよう。その際に、風水思想に基づく吉日や吉地を選定することから、「停柩」(埋葬の延期)の風習が広く行われており、そのために死体の腐敗による悪臭が発生していたことも一因であった(胎中 2003: 84-88)。1899 年に渡台した三好徳三郎[5]は当時の台湾衛生状況について次のように述べている。「其当時、ペスト、マラリアが大流行にて、実に人心恐々であった。又其頃は至る処、土匪の暴起あり。銃声を聞き、又海陸及通信上すべて一大不便を感じたる」(中央研究院台湾史研究所 2015)。

悪疫の他、時おり土匪などの襲来の状況があって、日本人が次々と病で倒れていたことが描写されている。初期渡台日本住民の中では、「水土不服病者即死」という俗説が流布していた。当時の内務省衛生局長、後に台湾総督府の民政長官となった後藤新平は台湾の衛生顧問を兼務した。後藤は 1896 年に台湾の衛生情況を視察し、上下水道の普及を提唱し、イギリス人の内務省雇技師バルトンを台湾の水道事業担当者に推薦した。バルトンは濱野彌四郎を助手として 1896 年 8 月に渡台し、台北各市街の衛生情況を調査し、水道工事の計画と設計を進めていた(台湾総督府民政部土木局 1918: 3-4)。その主眼は衛生状況と居住環境の改善であった。また、城内街路及びその周辺の整備が計画され、新たに建設する街路系統は格子状の区画となるよう開発されていた。

一方、家屋改築計画に基づき、1913－1914 年に城内の府前街・府中街・府後街・文武街の改築が実施された。3 階建ての煉瓦造りの建築が立ち並び、洋風建築の街並みに一新され(葉 1994: 43)、台北の景観は、前述のように変化した。1895 年当時の台北城内で最も賑わっていた町は北門通りと府前通りであったが、北門通りの中には北門街、撫台街と西門街の三つから成り立っている。その後、日本からの移住者が増加し、城内の土地や家屋を買い込んだことから、市区改正の政策と共に、地価が高騰していった。

1895 年から征台治平を目的とする軍政統治が始まった頃は台湾の情勢はまだ不安定で、日本人官軍隊と共に酒保名目で日本からの商人が台湾に渡り、主に台北城内の

[5] 三好徳三郎(1873-1939)は、1899 年に渡台し、辻利の台北支店を開設した。その後、在台日本人の社会や台湾政財界にも大きな影響を与えた日本人のひとりであった(田中 1940: 61)。

北門通りと府前通りで店舗を開いた。多くの官僚以外に、民間人も多数渡台したが、抗日・反日の行動が各地で起こっていたことから、その治安状況を考慮して、家族は呼び寄せず、単身で台湾に渡った人が多かった。

台湾総督府の移民政策により、台湾への移住者は台北で様々な民間団体を結成し、社会的ネットワークを構成した。その中で、台北の在台日本人の自治組織の構築過程が創出され、そして改編・運営されていった。1896 年 4 月、民政を実施すると、来台する日本人は次第に増加し続け、統治初期、商工業者により「商工会」が結成され、その後、「台北商業会」、「府県人会」、「衛生組合」などの団体組織が、様々な事象の発生に応じて、次々と結成された。そして、チフス、ペストなどの患者発生蔓延を防止するため、1896 年 11 月 6 日に台北県知事橋口文蔵は「衛生組合規則」を制定し、県令第 27 号(台湾總督府 1896)をもって発布した(下記に引用)。

第一条　台北市街ノ公衆衛生ヲ普及せシムル為メ、衛生組合ヲ設置スヘシ
第二条　衛生組合事務所ハ城内大稲埕艋舺ノ三市街ニ設置ス可シ
第三条　衛生上ニ関シ監督官庁ノ命令又ハ注意ヲ受ケタルトキハ速ニ実行ス可シ
第四条　各組合ニ委員長一名委員若干名ヲ置キ衛生上ニ関スル諸般ノ事務ヲ処弁スベシ
第五条　委員長ハ組合ニ於テ選定届出認可ヲ受ケルヘシ
第六条　衛生上ニ要スル一切ノ経費ハ各組合ノ負担トス
第七条　各組合ニ於テ規約ヲ設当庁へ届出認可ヲ受ケヘシ

衛生組合規則の発布により、城内、大稲埕と艋舺の地域で、それぞれの「城内衛生会」、「大稲埕衛生会」と「艋舺衛生会」が設立された。そして、自由渡航が認められ、日本人人口が漸次増加した。これに伴い、1898 年から、衛生会の団体組織は衰退し、官民中間組織として、各「町内事務所」の組織が台北県庁の認可を得ていった。以後、町内規約は委員により起草され、設置されていった。以下、1904 年 6 月に起草された「西門外街組合」の町内規約全文を紹介する(台湾總督府 1904)。

西門外街組合規約

第一条　本組合ヲ西門外街町内組合ト称ス

第二条　本組合ハ西門外街一町目二町目三町目居住者ヲ以テ組織ス

第三条　本組合ハ町内一般ノ公益及居住者ノ親睦ヲ図ルヲ以テ目的トス

第四条　本組合ノ事務所ヲ当分ノ内西門外街一町目八十四番戸ニ設置ス

第五条　本組合ニ左ノ役員ヲ置ク

一組長　一名

一副組長　一名

一評議員　四十名

第六条　役員ノ任期ハ一箇年トス　其年十二月ヨリ起リ翌年十一月ニ至ル

第七条　組長ハ町内一切ノ事務ヲ処理シ副組長ハ組長ヲ補佐シ組長差支ノ節ハ之ニ代リテ事務ヲ処辨ス評議員ハ重要ナル事項ニ関シ評決ス

第八条　評議員会ハ組長カ必要ト認ムルトキ又ハ評議員二名以上ノ請求アルトキ之ヲ開ク

第九条　本組合ハ春秋二季大会ヲ開ク

第十条　年度ノ収支決算ハ大会ニ於テ報告シ其承認ヲ受クヘシ

1904 年当時、西門外街組合組長は弁護士の松村鶴吉郎、副組長は蓑和藤次郎、評議員の一人は仙台出身実業家の荒井泰治[6]であった。なお、西門外街組合の他に、城内の府前街にも三好徳三郎が主唱したことで町内団体が設置された。その目的は、町内居住者の親睦を計り、且つ衛生、公共、其の他冠婚葬祭などに相互いに世話することであった。

三好徳三郎の回顧録によれば、「其頃、台北に内地人組合が組織されていたが、評判がよくなかった。又どの町内を見ても、何分各府県の者が雑居しているので、隣り近所の者でも親密でなかった。この町内へ来て見ると、各町名毎に小団体が出来ていた。

6 荒井泰治(1861-1927)は仙台藩士の家に生まれ、1899年にフランス系商社であるサミュエル商会の台北支店長として台湾に渡って実業家の地位を確立し、台湾の成功者と称された。また、貴族院議員に選出され、政界へも進出した(吉田静堂 1932: 232-235)。1912年に荒井泰治は寄金三万円を提供し、東北帝國大学附属図書館に「狩野文庫」が寄贈された。

小生は何かの機会に各区分的の小団体を相同せんと考へていた。ソコで会名に付、小生は当時の台北庁長佐藤友熊、台湾日日新報社主筆木下新三郎の両氏に相談した。其結果、町内小団体が大同団結したのである故、大同会と命名する事に決定した」(原文ママ)(中央研究院台湾史研究所 2015)。

その後、1905 年に各街や町ごとに、表 2-1 のように 9 団体の日本人町内事務所が設けられた。日本における民俗学では、「町」が、1. 元々水田の一枚一枚をセマチとかナガマチとかいうことから、区画された水田を意味したが、これが市街地の区画名称へ転化した、あるいは、2. 市立のある祭りの古語がマチであり、またマツリとマチはマドウなどと同系の「密着する」という語義であることから、常設の市立の場所としての市街をマチとよび始めたと考えられている(福田・宮田 2004: 235)。

「遠くの親戚より近くの他人」というように、近隣とのつきあいは大変重視されており、町内会の存在は地縁的な自治組織として不可欠であった。町内会は欧米諸国の都市ではその例を見ないものであり、日本の都市でのみ組織された。その前身としては、徳川時代に存在していた五人組名主、地主会、年番制度、若衆会等の制度が挙げられる。

表 2-1：日本人町内事務所

三市街所属	団体名	範囲	代表者氏名
城内	大同会	石坊街、文武街	三好徳三郎
城内	府前会	府前街	岡田敬五郎
城内	府後会	府後街	松本真輔
城内	北門会	北門街	村田孝光
城内	直友会	府直街	鍵山今朝吉
艋舺	西門外街	西門外街	松村鶴吉郎
艋舺	新起公会	新起街	本島崔次
艋舺	艋舺団	艋舺旧街	藤川房次郎

大稻埕	大稻埕公会	建昌街	中村啓次郎

出所: 台湾日日新報漢文版(1905 年 12 月 27 日)をもとに筆者作成。

なお、町内会創立の動機は、戦争、関東大震災、市域拡張、衛生組合設置規程の制定などの社会的重大事件の勃発を契機として、町内会事務の必要に応じて結成されたものであった(東京市役所 1934: 1-4)。しかしながら、伝統や文化と共に歴史を歩んできた日本の都市の町内会の形成と植民地都市の場合は様々な点で異なっていた。各都市にそれぞれの特性があり、形成の様相をもとに、1. 日本の植民地支配とともにまったく新たに都市が形成される場合、2. 在来社会の既存の都市の上に重なり合って、植民地都市が形成されていく場合、3. 既存の大都市の近郊に日本が新市街を建設する場合、と三つに分類されている(橋谷 1993)。島都台北の場合はその中の第二類に属しており、伝統的な城壁都市の上に付け加える形で建設された。台北の在台日本人が町内会を結成した契機をさかのぼると、植民地統治の開始時期から、衛生組合が設置され、そして、日本人の増加と共に、前述のように各町会事務所が次々と設けられた。

なお、島都台北は、台湾全体の開発が進むに従って、特別官衙・法院・専売局並びに各学校が置かれ、統治の中心地および商業の中枢地としての地位を占めている関係上、他の地方の都市と比して、格段に大きく発展した。台北三市街の三区域は各々特色がある。城内の範囲には、主として日本人の居住者が多く、行政･経済上の諸機関や文化施設が建設された。大稻埕と艋舺には主に台湾人の居住者が多い。大稻埕は全市が商業地域で、米・茶の取引の中心であった。艋舺は市中最古の市街である。そして、1920 年 7 月に、台湾地方官々制改正と共に、律令で台湾市制が公布されたので、台北市制が実施され、市役所は樺山町に設置され、市政の運用を開始した。1921 年 4 月町名改正が行われ、台北市を六十四町と郊外十部落(大安、下内埔、六張犁、西新庄子、中庄子、中崙、下埤頭、朱厝崙、上埤頭、大直)に区画した。

市制実施後、「台北市」が出現し、艋舺・大稻埕・城内より形成された「台北三市街」の中、城内に属する町はほとんど日本人のみが居住する状態であり、各町会が組織されて町内の公共的事件を扱い、台北市と直接に交渉を持つこととなり、日本人に関する行政事項を補助しつつあった(田中 1931: 503-506)。なお、町民相互間の親睦と改善発達を計るために設けられたのは各町の「公会」であり、会長その他の幹部役員は町

民によって選挙され、町内の公共事務を処理することになった(荒川 1930: 183-189)。下表は 1930 年から 1935 年の台北日本人の公会に関する資料である。公会は、地域の自治機関の性質を持った。なお、一つの町には一つの公会が原則とされていたが、ときには複数の町に一つの公会が組織され、衛生及び其他諸般の公共利害問題に対して協同一致して当たり、居住者同士の親睦を図った。

表 2-2: 台北日本人の公会

公会名	範囲	会長氏名	町の数
大同会	栄町	谷口巌	1
府後会	表町、明石町、北門町	鈴木重嶽	3
本町会	本町	吉鹿善次郎	1
京和会	京町、大和町	土屋理喜治	2
城東会	東門町	竹林徳松	1
南門公会	佐久間町、児玉町、千歳町、新栄町、錦町、福住町、古亭町、川端町、龍口町、馬場町、南門町	簑和藤治郎	11
西門会	西門町、壽町、末広町、築地町、濱町	三巻俊夫	5
新起公会	新起町	大栗巌	1
若竹会	若竹町	平田藤太郎	1
八甲会	八甲町、老松町	谷山愛太郎	2
新富会	新富町、堀江町、緑町	飯田清	3
元園会	元園町	河村徹	1
大成会	大正町、御成町、三橋町	近藤満夫	3

大稲埕公会	建成町、上奎府町、下奎府町	鼓包美	3
町会数総計			38

出所: 荒川(1930)、金高(1935)をもとに筆者作成。

以上は、1904 年から 1935 年かけて台北三市街における日本人の官民中間機関「町内事務所」と「公会」設置の由来である。まとめると、第一に、島都台北の開発と共に日本人移民が増加し、日本人地域団体と社会的なネットワークが構築され、その拡大とともに「町内事務所」の数も増加したことが分かる。第二に、1921 年 4 月町名改正が行われ、台北市は 64 町と郊外 10 部落に区画せられたが、公会の組織は主に城内、艋舺と大稲埕の日本人の居住地域にのみ設置されたということができる。

3. 神輿を担ぐ—台湾神社祭の準備工作とその運営組織

台湾神社のお祭り日　　太鼓はドンドン鳴っている
今年は豊年良い年だ　　蓬莱米を供えましょう
神輿を担いでエッサーサ　　太鼓を叩いてエッサーサ

台湾神社のお祭り日

植民地時代に作られた「台湾神社のお祭り日」という曲7は、毎年 10 月 28 日の神社例祭の時、歌われていた。前章で述べたように、1901 年 10 月 21 日に台湾神社が竣工した。続く 27 日に鎮座祭が行われ、28 日には「例祭」が挙行された。台湾神社の例祭は 1901 年から 1944 年まで 43 年間続いて行われ、植民地で行われた例祭としては最も長期にわたったものの一つである。なお、台湾人からは、「祭七王」(「七王の祭り」の意)と呼ばれるようになった(台湾総督府 1932: 205)。鎮座祭の前に、宮地厳夫敕使と共に北白川宮能久親王妃も渡台参拝し、祭礼と神事の儀式は粛然と執り行われた。例祭の 2 ヶ月前に、台北三市街の民間人が祭礼に関する事項を討議し、官民

7 そのメロディーは、いまだに台湾民間における廟のお祭りが行われる時期に、陣頭の音楽として使われている(謝 2019: 511)。

決議の為に、台湾神社祭典委員会が開催された。主に予算と例祭の前の諸般の準備工作について、討議した。

台湾神社祭事委員は祭事係・委員長付・会計係・植樹係・余興係の各係を設けて、鎮座祭と例祭の準備に当たった。当時の台北県知事村上義雄は、委員長として推戴された。下表は祭礼委員の成員及び準備工作の内容である。

表 3-1: 台湾神社祭礼委員及び準備工作の内容

	係長	準備工作の内容
委員長	村上義雄 (台北縣知事)	祭事の運営に責任を負うこと
委員長附属委員	竹島慶四郎等 21 名 (総督府台北県職員)	委員長に附属し各委員との連絡を保つこと
祭事係	山下秀實 (台湾商工銀行取締役)	神前に奉進する供物、緑門、建設、点灯その他の装飾に関すること
会計係	柳生一義 (台湾銀行副頭取)	祭事に関する全ての費用と募金の管理すること
餘興係	山田海三 (台北組合常議会議長)	花火、角力、舞台の建設、其の他余興に関すること
植樹係	荒井泰治 (台湾儲蓄銀行頭取)	剣潭新街道の片側に樹木を植付けること

出所: 台湾總督府(1901)、台湾協會(1901)をもとに筆者作成。

表 3-1 に示すように、各係長の山下秀實、柳生一義、山田海三、荒井泰治は当時の台北において社会的に高い地位にある紳士紳商かつ多方面で活動する実業家であり、政治的に影響力を持っている在台日本人であった。

10 月 28 日には「例祭」が行われ、台湾神社の拝殿で奉幣使が祝詞を奏上し、玉串奉奠してから、祭礼委員会と参列員が順次進み玉串と物品を献納した。式後 2 日の参

列者は、台北から社頭まで、ほとんど人と車で埋め尽くされ、2 日間の参拝者数は約 6 万 5 千余人であった(台湾神社社務所 1935: 54)。なお、台湾神社の祭礼と余興としての催し物については、金子展也(2012)が最も詳しく網羅的にその特徴を述べているので、その特徴を以下のように整理する。第一に、台湾神社の例祭では、1917 年までは「表祭り」と「陰祭り」が隔年で行われた。その後、第七代明石元二郎総督の死去や大正天皇の病気の悪化、大正天皇の諒闇及び関東大震災や鎮座 25 周年、鎮座 35 周年などの影響により、表祭りと陰祭りの区別がなくなってしまった。第二に、1907 年から御旅所が新公園内で新しく設けられると共に、例祭は「宵宮」と「本祭」とに分けられるようになった。催し物の開催場所も当時の円山公園から新公園に移された。1936 年には、台北公会堂が新築され、それ以来催し物は公会堂と新公園内に分かれて開催するようになった。第三に、催し物は城内の日本人町だけが参加するものではなく、艋舺と大稻埕の台湾人住民による廟会の陣頭である「蜈蚣閣」や「詩意閣」などの台湾風の屋台も例祭を賑わした。しかし、大正の終わりごろから、台湾風の屋台は姿を消し、日本風の神輿のみが見られるようになった。

以上のように、金子(2012)は台湾神社の例祭の特徴について明らかにし、社会環境の変動や自然的、政治的影響などによって変化が引き起こされたことを示唆している。しかし、祭りに参入する在台日本人の動きや町内の運営組織に関することは触れてない。この観点から、以下、植民地台北における日本人社会と台湾神社祭との相互関係の諸相について考察する。1901 年から行われていた台湾神社祭は、在台日本人たちが積極的に参加する行事となり、台湾人社会に影響を与えた。なお、新田によれば、植民地都市に存在した海外神社には、氏子タイプと神宮タイプの二形態があり、台湾神社は神宮タイプに相当する(新田 1997)。台湾神社祭の運営組織は次のようであった(表 3-2)。氏子を持っていない台湾神社であるが、神社で行われる儀式は台湾総督府に直属し、台北県庁及び台北弁務署の業務となり、台湾神社祭典委員会が組織された。その後、台北市制が実施され、祭の運営は台北市の業務に移行した。なお、前章で述べたように、1905 年にはすでに 9 団体の日本人町内事務所が設けられ、1930 年になって 14 の公会が設置されていた。例祭の時には、余興の内容について、住民から編成された各町が決議し、それぞれの余興の運営はこの町を中心に行われていた。加えて、台湾人の街では台湾風の山車が街中を練り歩いた。一方、祭の全体組織として台湾神

社祭典委員会が重要な役割を担い、祭事係・設備係・会計係・余興係の各係は各町から選出された代表によって構成され、運営に責任を負った。

表3-2: 台湾神社祭の運営組織

	全体組織	各別組織	代表
1901-1903年	台湾神社祭典委員会	各街事務所	各街代表
1904-1921年	台湾神社祭典委員会	町内事務所	組合長
1922-1944年	台湾神社祭典実行委員会	町内公会	会長

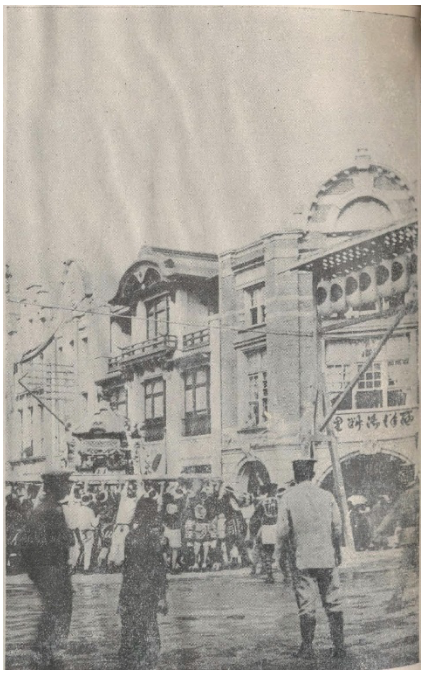
出所: 台湾日日新報(1901-1944)に基づき筆者制作。

日本人地域団体の中、栄町、京町と本町などは城内の中心地に位置し、台湾総督府の近隣にある街であり、台北で一番賑やかな町であった。特に栄町は台北の銀座と言われるほど商人が多かった街であり、公会の大同会はこの町に属していた(橋本 1926)。長期に渡って会長を勤めた三好徳三郎は「台湾の民間総督」と称され、民間の有力者となり、歴代の総督、軍司令官、長官にも相談役として信頼された。三好は台湾神社鎮座祭に日本人総代の一人として参列し、例祭の運営方向に大きな影響力を持っていた。三好は回顧録では以下のように述べている(中央研究院台湾史研究所 2015)。

> 明治四十年十月二十七、八日の台湾神社祭典に付、餘興、其他に関し小生一切を引受け実行せり。其理由は台北各街團体中央部の設立されて以来初めての祭典であつた。当時、恰も小生は大同會會長として各街團体中央部の年番幹事を勤めていた。台北市武徳殿の広場に御旅所を作り、二十七日はよい祭を行い、各種の餘興などは皆此御旅所に集合し奉納する事とし、二十八日も同様にして、仝日午後三時よりは御旅所に安置して居る御輿を台湾神社渡御する事とし、其際は加藤委員長始め幹部の者及各町の代表委員正装にて供奉する事となった。内地人、本嶋人ハ共に各町團体にて色々奇抜なる餘興を案出し、何れも一度御旅所に来り、神社に奉納して後市内各所を練り廻つたものである。

以上の記事によると、1907年には台湾神社例祭のやり方を変え、催し物の開催場所を円山公園から新公園に移し、宵祭と本祭に分けたのは三好の考えた原案によるものであったことがわかる。なお、台湾神社の例祭に、初めて神輿の「渡御」が出されたのは1905年であり、大同会が新調し、27日に神社の境内に置かれ、28日の本祭の日には大同会の祭礼委員が担いで町内まで帰った(台湾日日新報 1905)。神輿は従来大同会が所有していたが、1909年から中央に寄附されたことにより、台北全体の神輿になった(図3-1)。そして、神社例祭の際には祭礼副委員長･祭事係長･年番幹事･各団体2名ずつの委員、及び祭事係委員の半数が共に、台湾神社から敕使街道を経由し、新公園の御旅所まで神輿を担いでいた(台湾日日新報 1909)。このようなことから見ると、祭りの運営に関しては、三好と大同会が重要な役割を担っていたことが分かる。

図 3-1: 台北市街における大同会の神輿渡御



出所: 台湾日日写真画報口絵写真(1916)

なお、台北の日本人地域団体の住民は日本の各地からの移民者であり、それぞれ各自出身地の祭りの経験を持っていた。それゆえ、明治と大正時期の台湾神社祭におい

て、各団体が出した余興の屋台や踊りは、各町民の出身地の風俗が反映されたものとなった。例えば、新起公会と大稲埕公会はダンジリを曳き、府後会は二輪加芝居を行い、北門会は獅子舞とヒョットコ踊地囃子屋台を行った。しかし、大正の終り頃になると、各町は神輿を内地より取り寄せるようになった。神輿が屋台や山車に取って替った理由としては、以下の理由が考えられる。第一に、1911年、台湾全島は有史以来の大暴風雨に遭って新店渓が氾濫し、台北の城内や大稲埕方面は浸水し、家屋は多大な被害を出した。同時に、多数のダンジリや山車なども暴風雨により壊されてしまった。第二に、祭りの際、市中の電灯と電話線を引き込まないように、各団体の山車や屋台は17尺以下と制限され、各街へ通過するときも十分に注意された。にもかかわらず、祭礼の期間中、屋台が電線･電柱と接触し、転倒･破損したことがしばしば報道されている(台湾日日新報 1907)。それゆえ、屋台より低く移動しやすい神輿を導入しようという動きが起こり、大正の終り頃、各町の住民は次々と内地から神輿[8]を購入し、祭の風景は一変したのであった。

4. 見物人としての台湾人の目線

台湾の人々は、1901 年より台湾神社祭の風景を目にすることとなり、異文化のカルチャーショックを受け入れていった。日本人の多く在住している城内の町のみ賑やかであり、大稲埕と艋舺の台湾人は蜈蚣閣や詩意閣など台湾風の山車を曳き出し、その他の地域に住む台湾人は、主に見物人として祭りに参入したに過ぎない(台湾日日新報 1905)。柳田国男によると、祭礼とは祭の一種であり、風流と見物人が存在するものであるという。また、中世以来の都市文化の力が影響していたために、そうした祭礼が生まれたともいわれる(柳田 1998: 378-392)。日本の祭礼の定義から見ると、台湾神社祭の特色としては、日本人が担ぐ神輿の渡御、屋台や山車行列の風流、そして、見物人としての台湾人の存在が不可欠であった。以下、『水竹居主人日記』と『黄旺成先生日記』の記事[9]を事例として、日本の植民地時代に生きた黄旺成と張麗俊が記載した台

[8] 現在、植民地時代に残されたわずかな神輿は、主に関西系の神輿に属している。その特徴は蕨手が屋根の下から伸びていることである。

[9] 『黄旺成日記』と『水竹居主人日記』は、日本植民地の台湾で生きた人々の日記であり、中央研究院台湾史研究所により刊行された。近年来、台湾では日記のような私的文書の価

湾神社祭について説明し、加えて、神社の祭に参加したことのある台湾人に対して行った聞き取り調査結果を参照しながら、台湾人にとって台湾神社の祭りにはどんな意味があったかを明らかにしたい。

(1) 『水竹居主人日記』に記載された台湾神社の祭り

張麗俊(1863-1941)は保正として保甲制の責任者を務めた台中の豊原における有力者であった。張麗俊が書いた『水竹居主人日記』は 1906 年から 1937 年まであり、その漢文日記の記事を通じ、植民地台湾に生きる台湾人側の考え方や生活様態の変化が見出せる。

初めて台湾神社の祭りに関する記事が書かれたのは 1906 年 10 月 28 日の記事であった。「晴天、……區長及諸保正到公園神社行遙拜式祭典」(晴れ、……区長と各保正は公園へ行き、神社で遥拝式が行われた)と記されている。そして、1907 年 10 月 28 日には、「晴天、往墩、到役場、十時仝支廳管内區長、保正往公園、會合支廳派出所警官、在台灣神社前行遙拜式」(晴れ、墩へ行き、役場に到着、十時に支庁管内区長、保正は公園へ行き、支庁派出所警官と合流し、台湾神社の前で遥拝式が行われた)とある。この二つの記事によると、10 月 28 日は台北の台湾神社の祭り日であるが、台中でも遥拝式が行われたことが分かる。

そして、1926 年 10 月 28 日の記事には、「晴天……是日台灣神社大節日、乃北白川宮能久親王之忌辰也。今年其大妃殿下被上山總督邀請渡臺祭親王、故今日凡有神社之地方甚然盛鬧、兼歡迎大妃也」とあり、大意を訳すると「1926 年において台湾神社の祭り日には、北白川宮能久親王妃が渡台し、台湾神社に参拝し、そして、台湾神社祭の余興にも観覧したから、各地の神社は賑やかであった。」となる。

続いて、1934 年 10 月 28 日の記事には、「晴天、欲仝天壽往台中玩内台人合迎神社並城隍也。城隍例年元是六月十五恭迎、因今年欲合神社、故延期至今也。自午前六時起至午后三時止、無論列車、自動車、摩托車俱告滿員、紅男綠女接踵挨肩」(晴れ、天寿と共に台中へ行き、内地人は台湾人と共に神社及び城隍を迎えた。例年の城隍祭は 6 月 15 日に行われたが、今年は神社祭と同時に行われるので、今日まで延期した。午前 6 時から午後 3 時までで、列車、自動車やバイクは満員、老若男女で混みあって

値が見直され、生活史や社会史の資料として利用され、庶民の生活文化を研究されることが多くなってきた(中央研究院台湾史研究所 2000、2008)。

いる)。

以上の記事によると、台湾人にとって、祭りの日は賑やかな風景を見る日であったといえよう。特に 1934 年の神社祭り日は、地域の城隍祭りと共に行われた祭りであり、大勢の人や物による活気で一層賑やかだったと推察される。

(2) 『黄旺成先生日記』に記載された台湾神社の祭り

黄旺成(1888-1978)は、台湾総督府国語学校を卒業、新竹公学校の教師を勤めた人物である。『黄旺成先生日記』の記載された年代は 1912 年から 1973 年までであったが、ここでは刊行された植民地台湾の時期 1912-1934 年までの漢文記事に記されたことを説明する。

黄旺成の日記には、1916 年 10 月 28 日に、台湾神社祭について書かれている。「本日為台灣神社祭日、因雨在講堂遙拜式」(本日は台湾神社の祭日、雨のために、講堂で遥拝式が行われた)。張麗俊の日記と同じく台湾神社祭り日には、新竹でも遙拜式が行われていたことがわかる。続いて、1919 年 10 月 28 日には「十時……電喚大張來、仝出城南橋、看神社祭典餘興之種々行列」(十時……電話で張さんを呼び出し、一緒に城南橋へ行き、神社祭典の余興と行列を観覧する)。

1922 年 10 月 28 日には「本日為台灣神社祭典公學校前有台中州大運動會、午後往觀……夜公園中大放彰化煙火觀覽之人環列成堵、廣大之公園亦為之挨肩接踵難於進行」(本日は台湾神社祭、公学校の前では台中州大運動会が行われていたので、午後には見に行った……夜の公園で彰化花火大会が開催され、足の踏み場もないほど混んでいて、公園内は歩き難い)。1931 年 10 月 28 日には「神社大祭典、看神社的神輿通過……與元璧訪雅軒、一同出散步至神社、夜玉與兒子等全出旭町看彰化煙火(神社大祭典、神輿の通過を観賞……元璧と一緒に雅軒を訪ねて、神社まで散歩し、夜玉と息子たちと共に旭町を出て、彰化花火大会を見る)」。1934 年 10 月 28 日には「看神社祭行列於其店口」(店の前で神社祭の行列を見る)。

以上の記事によると、黄旺成とその家族は祭りの日、街や公園の近くに行き、神輿や余興の各種行列、花火大会を見ていた。そして、公学校では運動会が開催され、大勢の人が集まったようである。

(3) 参加者の語り

神社の祭に参加したことのあるO氏(女性、90歳代)は台南にて台湾神社の祭りのこ

とを次のように回想し語る。「女学校に在学しているころ、祭りの前の日から、朝会の後で、学生の皆は台湾神社の祭りの歌を一日二回、練習していました。祭りの日に、お神輿を担ぐのは男の人だけであり、女は道端で旗を持って皆と並んで、国旗を振って一緒に歌を歌います。屋台では台湾の果物、特産の愛玉氷や仙草氷が出され、一般の人が買って食べます」。

植民地時代の台湾において、約 4 分の 1 の地域神社が台北の台湾神社から分祀され、北白川宮能久親王を祀っているものである。それゆえ、毎年 10 月 28 日例祭の日には、台北だけではなく、台湾全島各地で行われる祭典が数日前から新聞で取り上げられ、台湾の人々に知らせられていた。当日は催し物が盛んであり、神輿が担がれ、相撲大会･野球大会、音楽、手踊りなどの余興があり、賑やかな祭り風景がよく見られたようだ。

また近年、台北の京町で写真店を開店した鄧南光[10]という写真家がネガのまま保存していた約 1 万枚の写真が発見された。そこには、植民地台湾の庶民的な生活や町の景色が記録されていた。その中には、1940 年代台湾神社の祭日に関する写真も何十枚かあり、祭りの風景が残されていた。写真を見ると、神社の祭りには各町、各戸は提灯に飾られ、大人神輿と子供神輿が御旅所に安置されていた。その後、各町の担ぎ手は、時間ごとに半纏･足袋を身につけ、囃子のリズムに合わせ、神輿を担ぎ出し、神社へ渡御し、そして町内まで練り廻した。鄧南光の写真記録によると、当時の台湾神社の祭日には、すでに屋台や山車がなくなり、町内神輿が祭りの主役として担ぎ出されていたことが分かる(王 2020)。

以上、植民地の台湾人が書いた日記と、同時代に生活経験のある人への聞き取り調査結果から、台湾人にとって神社の祭りのイメージは「活気ある」で、「賑やかで華々しい」ものであったことが分かる。また、台湾人が主に外側から祭りの観客として参加し、異文化の祭りを見物したこともわかった。1895 年から 1945 年まで植民地台湾で生活した日本人の人数は約 40 万人であり、半世紀の間に定住者が増加し、加えて 2 世、3 世の「湾生」が誕生することにより、移住者の 1 世は台湾の土地で台湾社会成員の一部分を構成し、台湾は「ふるさと」となった[11]。台湾神社が鎮座していた 44 年

---

10 鄧南光(1907-1971)は新竹の出身。日本の法政大学への留学を経て台湾に戻り、「台湾総督府登録写真家」に選出され、台湾で写真を学んだ先駆者の一人だった(陳 2017)。

11 1930年代から、台湾の雑誌で、在台日本人の「故郷」に関する記事がしばしば現れ、台

という時間は、日本内地の神社の歴史と比べるとはるかに短い。しかし、台湾神社は半世紀を経て土地を守る神となり、在台日本人にとって、全島の総鎮守となり、かつ氏神のように認識された。

5. おわりに

1895 年から日本の統治下に置かれた台湾では、50 年の間、日本人が移住することにより、台北の都市空間は拡張し、市域の範囲が大きく拡大した。本稿では、日本植民地時代の台北における在台日本人の社会と宗教文化がどのように形成されたのかについて論じてきた。ここで改めてまとめるならば、まず、6 回の近代都市計画が導入されたことにより、台湾神社と台北の市街の建設が進められ、近代都市大台北の発展と共に在台日本人の居住地域が次々と整備され、在台日本人の社会が成立していった。次に、植民地で新しく創立された台湾神社は、台北における日本人の信仰の中心となり、人生の通過儀礼を通して地域住民の生活全般的に深く関わった。そして、海を渡った移民にとって、各町内を飾り付け、山車を曳き、神輿を担ぎ上げ、神社の境内に入り参拝するという台湾神社祭は年に一度の娯楽であり、神に対する神事祭礼でもあった。なお、日本から搬送・移動されてきた神輿は、元は日本の宗教儀式で使われる物だったが、半世紀にかけて次々と新調されることで、異文化圏の台湾において地元神社を象徴する存在となった。

台北の都市構造について、葉(2001: 40)は「異なる文化がお互いに出合い、ぶつかり、絡み合う社会空間、異文化同士の接触が起こる〈コンタクト・ゾーン〉であり、そこには複雑な関係が断続的に存在する」と論じた。特に台北に生活する日本人にとって、1 年に 1 度の台湾神社祭は、日常と非日常の中で、在台日本人としての連帯と結束を強める宗教的営為としての機能もはたした一方、台湾人にとっては、非日常の異文化を体験する機会であったと言える。しかし、神社の営みは、最終的には日本人の引揚により終止符が打たれた(管 2004: 13)。海外神社は戦後、跡地として残されたが、国家神道の観念と神社の祭礼は台湾で存続できなかった。

北は第二のふるさととか、湾生にとって、故郷の意味について議論した人もいた。特に湾生である西川満、立石鉄臣などは「台湾が心のふるさと」と考えていたと見られ、彼らの手によって多くの台湾民俗が保存された(王 2019)。

一方、台湾社会では、1980 年代後半から戒厳令の解除や野党の結成など、民主化が進行するに伴って「台湾本土化」の意識が台頭し、言論の自由の進展とそれに伴う日本植民時期の歴史文化への探求が展開された。現在は、いくつかの台湾の神社の残存施設が「宗教遺産」として保護され、歴史文化の展示場として再建されている。林(2015: 31)によれば、「この十数年来、台湾社会および学術界の日本統治期に対する見方は、政治社会の成熟そして異文化の受容とともに変化した」。今後は、新しい社会的・文化的な集体記憶が生まれる可能性もある。

なお、今後の課題としては、日本植民地時代から残された祭りの記憶が、台日交流の発展や観光化の流れを受けて再創出されたり、地域において再発展していくかどうかを注視していきたいと考える。

引用文献

『台湾日日新報(1901-1944 年)』台北: 台湾日日新報社。

『台湾日日新報漢文版(1905 年 12 月 27 日)』台北: 台湾日日新報社。

青井哲人

1999a 「台灣神社の造営と日本統治初期における台北の都市改編」『日本建築学会計画系論文集』518: 237-244。

1999b 「日本殖民地期における台灣神社境内の形成・変容過程」『日本建築学会計画系論文集』521: 285-292。

2005 『植民地神社と帝國日本』東京: 吉川弘文館。

荒川久

1930 『島都評判記』台北: 世相研究通信部。

陳玲蓉

1992 『日據時期神道統治下的台灣宗教政策』台北: 自立晚報。

陳鸞鳳

2007 『日治時期臺灣地區神社的空間特性』台北: 学富文化事業有限公司。

陳徳馨

2017 「光明與真情的瞬間:鄧南光與台湾攝影雑誌(1963-1971)」『藝術學研究』

20: 93-154。

中央研究院台湾史研究所

2000　「水竹居主人日記」台湾日記知識庫

<https://archives.ith.sinica.edu.tw>より、2021 年 12 月 12 日取得。

中央研究院台湾史研究所

2008　「黄旺成先生日記」台湾日記知識庫

<https://archives.ith.sinica.edu.tw>より、2021 年 11 月 1 日取得。

中央研究院台湾史研究所

2015　「三好徳三郎回憶録」台湾日記知識庫

<https://archives.ith.sinica.edu.tw>より、2021 年 11 月 5 日取得。

中央研究院

2013　「地図与遥測影像数位典蔵計画」ホームページ

<http://gis.rchss.sinica.edu.tw/mapdap/?p=4376&lang=zh-tw>より、2021 年 12 月 1 日取得。

福田アジオ・宮田登

2004　『日本民俗学概論』東京: 吉川弘文館。

橋本白水

1926　『島の都』台北: 南国出版協会。

橋谷弘

1993　「植民地都市」『近代日本の軌跡　都市と民衆』東京: 吉川弘文館。

伊能嘉矩

1903　「臺灣築城沿革考」『臺灣慣習記事』3(6): 13-22。

五十嵐真子・三尾裕子編

2006　『戦後台湾における〈日本〉— 植民地経験の連続・変貌・利用』東京: 風響社。

金子展也

2012　「台湾神社の創建と祭典時の催し物の変容」『年報　非文字資料研究』8: 203-219。

2013　「台湾神社　今なお残る遺跡の数々と新事実」『年報　非文字資料研究』9:

149-157。

金高佐平

1935 『大台北民間職員別職員録』台北: 台北民間職員別職員録発行所。

黄永融・鳴海邦碩

1996 「清末における台北城の形態計画の理念に関する考察」『都市計画論文集』31: 259-264。

林承緯

2015 「保護 展示そして再建」『人文学報』108: 21-34。

本康宏史

2003 「台湾神社の創建と統治政策」『台湾の近代と日本』名古屋: 中京大学社会科学研究所。

三尾裕子･遠藤央･植野弘子編

2016 『帝国日本の記憶 台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』東京: 風響社。

Mio, Yuko eds.

2021 *Memories of the Japanese Empire: Comparison of the Colonial and Decolonisation Experiences in Taiwan and Nan'yo-gunto*. London: Routledge.

中島三千男

2000 「海外神社」研究序説」『歴史評論』602: 45-63。

2013 『海外神社跡地の景観変容—さまざまな現在』東京: 御茶の水書房。

新田光子

1997 『大連神社史』東京: おうふう。

小笠原省三

2005 『海外の神社並にブラジル在住同胞の教育と宗教』東京: ゆまに書房。

王恵珍

2019 「記憶所繫之處: 戦後初期在台日僑的文化活動與記憶政治」『台湾文学学報』35: 35-64。

王佐栄

2020　『彩繪鄧南光 還原瑰麗的色彩 1924-1950』台北: 蒼璧出版。

笹森儀助

1896　『台灣視察論　台灣視察日記』笹森儀助。

蔡錦堂

1995　『日本帝國主義下台湾の宗教政策』東京: 同成社。

謝国興

2019　『臺灣史論叢: 進香・醮・祭與社會文化變遷』台北: 台大出版中心。

菅浩二

2004　『日本統治下の海外神社』東京: 弘文堂。

所澤潤・林初梅編

2016　『台湾なかの日本記憶: 戦後の「再会」による新たなイメージの構築』東京: 三元社。

東京市役所

1934　『東京市町内会の調査』東京: 東京市役所。

台北市役所

1934　『台北市政二十年史』台北: 台北市役所。

台湾協会

1901　「雑報」『台湾協会会報』6(37): 23-24。

台湾協会

1901　「雑報」『台湾協会会報』6(38): 27-33。

台湾日日写真画報社

1916　『台湾日日写真画報』台北: 台湾日日写真画報社。

台湾神社社務所

1935　『台湾神社誌』台北: 台湾神社社務所。

台湾總督府

1896　「台北縣縣令第二十七號衛生組合規則」1896 年乙種永久保存第 19 巻『台湾總督府檔案』(国史館台湾文献館)。

1901　「台湾神社祭典二関スル一件(元臺北縣)」1901 年永久保存第 139 巻『台湾總

督府檔案』(国史館台湾文献館)。

台湾總督府

1904 「西門外街町内組合規約」1904 年 15 年保存追加第 9 巻『台湾總督府檔案』(国史館台湾文献館)。

台湾総督府

1932 『台日大辞典下巻』台北: 台湾総督府。

台湾総督府民政部土木局

1918 『台湾水道誌』台北: 台湾総督府民政部土木局。

台湾総督府文教局社会課

1940 『台湾における神社及び宗教』台北: 台湾総督府文教局社会課。

田中一二

1931 『台北市史』台北: 台湾通信社。

1940 『三好徳三郎』台北: 三好徳三郎編纂所。

胎中千鶴

2003 「植民地台湾の死体と火葬をめぐる状況」『史苑』63(2): 83-109。

津田良樹

2012 「台湾神社から台湾神宮へ—台湾神社昭和造替の経過とその結果の検討」『年報 非文字資料研究』8: 1-29。

2014 「台湾神宮の消長と地下神殿の諸相」海外神社跡地から見た景観の持続と変容研究班編『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』pp.23-35、神奈川: 神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター。

植野弘子・三尾裕子編

2011 『台湾における〈植民地〉経験—日本認識の生成・変容・断絶』東京:風響社。

植野弘子

2018 「《特集》モノと人の移動にみる帝國日本—記憶・近代・境域」『白山人類学』21: 5-14。

柳田国男

1998 『柳田国男全集』東京: 筑摩書房。

葉倩瑋

1994　「日本植民地時代における台北の都市計画—統治政策と都市空間構造の変化」『経済地理学年報』40(3): 38-55。

2001　「植民地主義と都市空間—台北における権力と都市形成」『都市･空間･権力』東京: 大明堂。

横森久美

1982　「台湾における神社—皇民化政策との関連において」『台湾近現代史研究(三)』東京: 緑蔭書房。

吉田静堂

1932　『台湾古今財界人の横顔』台北: 経済春秋社。

東北人類学論壇 Tohoku Anthropological Exchange 21: 28-47(2022)

私は「東方工場人」である
―中国における政策移民 3 世代のライフストーリー

李　欣晨

1. はじめに

本稿の目的は、中国政府の政策によって移動を余儀なくされた人々、すなわち政策移民に着目し、発達した沿海地域から未発達の内陸地域、都市から農村へのいわゆる「逆移動」は当事者たちにどのような生活経験をもたらし、その自己認識をいかに形作ってきたのかについて考察しようとするものである。具体的には、1960 年代から 1980 年代まで政府の政策によって貴州省都匀市に移動させられた東方工作機械工場(以下東方工場と略称する)の 3 世代に焦点を絞り、彼らが移住先でいかに社会生活を営み、世代ごとの自己認識にどのような変化が生起したのかを明らかにする。

筆者は東方工場の第 3 世代であり、沿海部での生活歴を持つ第 1 世代・第 2 世代と異なって移動先の都匀市で生まれ育った。生まれた時から家族とともに郊外に位置する工場の家族居住区で暮らしていたため、周りにいたのは工場の職員及びその家族だけであった。小学校 2 年生の時、市内への転校を契機に家族居住区を離れて地元民と接触しはじめたが、相手に近づけば近づくほど、自分の内にある異質性を強く意識するようになった。その際に、自分と同じような環境の変化を経験した祖父母と父母の世代も、こうした異質性による葛藤や不安を抱いただろうことに思い至った。また、彼らは長年の移住生活を経て、自己をどのように位置づけているかということも考えるようになった。こうした問題意識に基づき、本稿では東方工場のある家族 3 世代を対象に、政府によって課せられた移動経験が当事者たちの認識の形成とその変容にいかに働きかけているかについて考察したいと考えている。

2. 問題の背景

一つの国を単位として考えれば、国境線を境に国外と国内に分けられるのが一般的

である。けれども中国の場合、国内の地域を細分化しようとすれば、行政、地理、文化、民族など様々な指標に基づき、分け方が異なってくる。そのため、国内移民の研究に際しては、行政区画に従って省を境に省間と省内に分けて行われているものが多い。省内の移動は主に農村から都市への出稼ぎ労働者によるものであり、人口構成や移動パターンはより単一的である。ゆえに、省間の移民は中国の国内移民を考察するにあたって主な対象とされており、省内移民に対する研究もたいていその中に組み入れられて進められる(兪 2008)。

省間を移動する際には、地理的境界が経済的・社会的・文化的分断を生むことにより、「内なる他者」(川口・堀江 2020: 9)のような志向性が顕著に現れ、地元民と移動者は互いの差異を意識しがちである。とりわけ他者性が最も強く意識されるのは、東西の境界に起因する諸点、すなわち中国の東部沿海地域対西部内陸地域、都市対農村という構造的な格差に基づく違いである。よって東部沿海から西部内陸、都市から農村への逆移動は、生活レベルの低下、経済収入の減少、就労機会の縮小(孫 2020)、家族との長時間の分離などに結びつけられ、経済的・社会的・文化的優位性の喪失をもたらす。ゆえに、省を越える移動は国内移動ではあるものの、こうしたマイナスの諸点を考慮に入れれば、容易に決定が下されるわけではない。

中国の国内移民研究は、国際移民研究の移動理論を参考にしてなされたものが多い。具体的には人口の自由な移動が前提条件として設定され、農村から都市に流入する農村労働者が主な研究対象とされている(李 2005)。一方、計画経済時代における人口移動は、経済的格差の縮小が意図されたこと、政府の関与で進められたこと、真逆の移動方向およびパターンで行われたことで、研究対象から外されがちであった。だがこれらの特殊性があるからこそ、具体的な研究・分析が必要だとも言える。特に政策移民の場合、政治的要素がその移動に大きく作用していた。中華人民共和国成立後、中央政府は最も広範な人民の根本的利益を代表すべき存在と見なされることで(柯 2002)、その政策も正当化されて個人にとって逆らいがたいものとなった。政府の介入により、個人は政策に従って移動を余儀なくされ、自身の意思よりも集団への服従を強調されるという強制性を帯びるようになった。

移民の意思について考えれば、非自発的移民を受動的と能動的に区分することができる(嵇 2014: 20)。受動的・非自発的移民として挙げられるのは、ダム、空港などの

プロジェクト建設によって移動を余儀なくされた人々のことである。政府の参与によって移動を強いられたがゆえに、実行を妨げるような行為は許されず、移動しないという選択肢は与えられていなかった。それに対して能動的・非自発的移民は、個人で移動の判断を下した点が多いにもかかわらず、その端緒としては政治・宗教・民族などの要因に起因し、不本意でありながらも、身の安全や今後の発展を図るために移動した人々である。本研究で取り上げる政策移民は、その強制性からみれば非自発的移民の類に入るが、移動の決定に個人の意思が含まれていないとは言いがたい。よって、ここでは彼らを能動的・非自発的移民と捉えて考察を進めることにする。

自発的・非自発的移民を問わず、これまで生きてきた国・地域から別の場所に移動すると、他者との接触によって自身の異質性が意識されはじめる。自らのアイデンティティを問う機会が増え、葛藤や不安が生起することもありうる(植松 2015: 7-8)。特に中国の国内移動に際しては、多様な要素が絡んで他者性が喚起されやすいため、自己の位置づけに大きな影響を与えがちである。また、人が故郷を離れて別の場所に住む場合、距離が遠く、かつ離れている期間が長いほど、帰属意識が薄まると一般的には考えられている(三宅 2018: 128)。

第 1 世代の国際移民を例にすると、長期間現地生活を過ごした後も、血縁や地縁集団から得た安心感で社会的ネットワークを外に開こうとしない。そのため、元来の自己認識は緩やかに変容しながら維持されている(丸川 2005; 李 2011; 黒木 2016)。第 2 世代になると、「周囲から押し付けられるアイデンティティと彼ら自身が思い描くものとのギャップからくる葛藤を抱えている」(倉田 2018: 42)ため、周囲の環境と身近な人々と接触しながら、認識を再構築することで自己の位置づけを調整している。第 3 世代の場合、故郷に対するイメージはすでに「間接的な経験」に基づくものとなる(市川 2009; 上水流 2012; 上田 2018)。第 1 世代と第 2 世代から押し付けられた認識は、現地化が進むことによって薄められ、否定的に捉えられる傾向まで現れている。

中国の国内移動において自己認識の変容に焦点を絞った研究は少なく、政策移民のような移民集団に着目し、その世代にわたって現れた傾向を研究したものはさらに限られている。「個々の家族や個人の個別的経験の襞に分け入ってゆくこと」(瀬川 2018: v)は、彼らが置かれる個別的で特殊な状況を解明するための重要な方法であり、そうした人々の思考様式や行動規範を把握することが期待できる。

以上の点を鑑みて、本稿では貴州省へのいわば逆移動を余儀なくされた東方工場の一家を取り上げ、3 世代にわたるライフストーリーを記述・分析する。それに基づいて各世代の自己認識にどのような特徴が示され、世代ごとにいかなる変化が現れるのかを明確にしてゆく。

3. 調査地と調査対象

(1) 貴州省都匀市

1949 年、中華人民共和国成立後、戦争で八方破れになった国の経済を回復させるため、国民経済発展第 1 次五カ年計画[1]の提出により、社会主義工業化が発展目標として確立された。これ以来工業が急速な発展を遂げ、特に重工業は基礎産業となり、経済の回復を支えていた。「中国の重工業の発展は常に国防建設や軍事上の要請と結びついたものであった」(呉 2002: 62)が、その背景にはソ連とアメリカの対立による冷戦構造がある。特に 1960 年代に入ると、中国は厳しい国際環境に直面し、戦争の脅威にさらされた[2]。毛沢東をはじめとした第 1 代指導者層らは、国の工業基礎を戦争から守ると同時に、地域の均衡的な発展を図ろうとした。ゆえに、重工業に関わる多数の生産機関や研究機関を敵に狙われやすい沿海から内陸に移転させ、内陸において工業基地を建設することを決意した。

貴州省は歴史的に見ると、少数民族が集まって居住する「南蛮」の地として周縁化されながら、官吏の左遷・犯人の流刑・軍人の屯田[3]・荒地の開墾などで中央政権の統治下に収められてきた。近・現代に入った後も、歴史的偏見を払拭することができず、

---

[1] 五カ年計画とは、「国民経済・社会の発展目標とそれを達成するための制度改革、各産業の生産指標、資金・財・労働力の配分、重点プロジェクトの建設、蓄積と消費の比率などを織り込んだ中期計画である。社会主義国では毎年の経済運営は年度計画に基づいて行われるが、その大枠と目標は中長期計画によって決められる」(石原 1999: 322)。

[2] 北側では中国とソ連の友好関係が 1960 年に破裂してから、ソ連による軍事的脅威が増大し、西南側では中国とインドの国境線をめぐる衝突も収まることなく拡大した。南側ではベトナム戦争での戦火が中国の辺境まで広がったのに加え、東南側では台湾の国民党政府とはたびたび小規模な武力衝突が発生した。

[3] 屯田とは兵士などを遠隔の地に土着させ、平時は農業に、非常の時は戦争に従事させる制度である。中国の場合、新領土や国有地に兵士や農民を導入して耕作させる制度として、漢代に始まって明清に至る。

他地域の人々から距離を置かれた。また、工業がほぼなく、農業・牧畜業を主な収入源としていたことで、沿海地域よりも社会発展は大幅に遅れていた。しかし、雲貴高原に位置して山地が多く交通も不便なため、「分散、靠山、隠蔽」(山近くに分散させ隠蔽する)(高 2004: 200)という移転の基本方針に合致し、工業基地の建設のために安全な場所を提供しうるという条件を備えていた。よって、産業・経済的には立地条件が悪いにもかかわらず、統治強化・均衡発展・安全重視の多重目的を満たすための最善の場所として、政策移民の重点的移入地域とされた。

1960 年代から 1980 年代まで、貴州省は沿海から移転してきた数多くの移民を迎えた。都匀市[4]は省の南に位置し、移入人口の増加で県から市に昇格し、黔南プイ族ミャオ族自治州の州都にまで発展した。新中国の成立直後、地元の住民は山に囲まれた地理的環境の影響で外部から遠ざけられ、旧来の生産様式を維持し、自給自足の生活を送っていた。ところが工業化を促進しつつ地域間のバランスも重視された計画経済の時代に入ると、農業と牧畜業だけで経済を支えることは認められなくなった。政府の政策によって大規模な移民が沿海部から都匀市にやってくると、地元民は彼らを偏見の目で見ながら接触しはじめた。両者の他者意識が喚起されて衝突が起こることもあったが、互いに影響を及ぼし合いつつ関係性は変化していった。

(2) 東方工場

計画経済体制のもとで、政府は資源に対する全面的な管理に乗り出し、それを実現させるシステムとして単位(danwei)制度を構築した(劉 2000)。単位とは、都市部において人々が所属する職場組織のことであり、同時に「揺り籠から墓場までの生涯にわたる社会福祉システムと、仕事、家庭、近所、社会的存在、政治的メンバーシップを含む関係のネットワークでもある」(Yeh 2015: 60)。都市で生活する個人は、単位への所属により、資源を入手するルートが確保された一方、国家管理の末端組織に組み入れられた。

単位は機能ごとに行政単位、事業単位、企業単位と区分された[5]が、個人の社会生活

---

[4] 貴州省は 6 地級市、3 自治州が設置されている。その行政区画は、省＞地級市／自治州＞市＞県＞郷＞村という階層となり、地級市と自治州が同じ行政ランクである。都匀市の場合、自治州よりランクが低い市政府が設置される一方、黔南プイ族ミャオ族自治州の州都でもあることで、州政府も同時に設置される。二重の政府機関を有するが、行政的ランキングに基づいて州政府が市政府の上位にある。

[5] 政府文書において、管理の機能を果たす行政機関が「行政単位」、サービス機能を果た

の必要を満たすために様々な施策を講じ、それを極力内部で処理できることが企図された(田辺 1986: 191)。企業単位である工場は、政府によって定められた生産指標を達成することが最優先とされたため、生産施設を主として構成された。同時に、職員を工業生産に従事させるため、彼ら及びその家族の衣食住問題を解決する附属施設[6]も設置されることになった。こうした利便性を図ったことで、附属施設はたいてい工場の周辺に設けられ、職員及びその家族を主なサービス対象とし、部外者を歓迎しない姿勢を取っていた。施設の完備につれて家族居住区まで形成し、排他的な性質を強めていった。

単位の内部において行政組織のほか、共産党委員会という政治組織が必ず設置された。行政組織への監督を務め、党の統治を集団全体にまで浸透させる任務が課された(Chan 2015)。政治組織による監督と行政組織による運営で支えられた単位は、二重構造で安定性が保たれたため、その成員に深い影響力が及んでいた。政策移民はこのような単位に所属したことで、政治・行政組織による全面的な管理体制から離脱しがたくなる。さらに、集団的移住によって主に家族居住区で暮らすことになり、人間関係も同僚・近所に限られがちで、工場以外の人を他者視する傾向が強く見られた。逆に言うと、単位という制度的基盤が崩されないかぎり、閉鎖的生活環境・排他的人間関係は変更できないのである(張 2020: 212-215)。

東方工場の場合、その建設は 1965 年山東省の済南市にある済南第二工作機械工場(以下済南二場と略称する)が上級の主管部門に命じられて開始された。工場用地は都匀市の中心部から約 6 キロの場所に選定され、平地でバスも通るために交通が比較的便利であった。職員宿舎をはじめとした附属施設は、工場用地から約 2.5 キロの場所に整備され、その後に家族居住区に発展した。1980 年代、改革開放政策[7]の実施にともなって市場経済体制が導入され、東方工場は市場の激しい競争に巻き込まれた結果、1990 年代から経営不振で赤字状態が続いていた。危機状態から工場を救い出すため

す学校、病院、研究所が「事業単位」、生産機能を果たす工場、商店が「企業単位」と称される(劉 2000: 22)。

[6] 託児所、幼稚園、学校(小・中・高・専門学校・短大まで含まれるものがある)、食堂、売店、共同浴場、病院など、集団生活に便利さを提供する施設である。

[7] 1978 年 12 月に開催された中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議で提出、その後開始された中国国内経済改革および対外開放政策のことである。その実施により、計画経済体制から市場経済体制への転換がはじまった。

に、人員削減、賃金減額、組織調整などさまざまな手段も講じられたが、失敗に終わって 2005 年に破産に至った。それによって家族居住区も市の管理下に置かれ、工場との関係が断ち切られたが、まだ多くの職員及びその家族が住み続けている。一方、2007 年に政府の斡旋を通して東方工場は貴州省の大手国有企業に買収され、一時的な隆盛を迎えた。ところが、2015 年に民営企業の経営者に再び買収された。そして売買されてから 3 年も経たないうちに、もとの工場用地から新しい工業園区へ移転するように促された。

図 3-1: 山東省と貴州省の地理的位置(筆者作成)

4. 3 世代のライフストーリー

建設、破産、買収、再買収を経た東方工場は、50 余年の歴史をもって職員及びその家族に深い影響を与えている。沿海部から来た第 1 世代から地元で生まれた第 3 世代までが、東方工場との関係によって繋がれている。

本稿の事例として取り上げるのは、そうした東方工場の単位移住で家族揃って済南市から都匀市に移動し、暮らし続ける一家の 3 世代である。第 1 世代の王強[8]と第 2 世代の王梅は、元済南二場の職員とその子弟である。第 3 世代の周鵬は、家族居住区で生活した点に 2 世代と共通性がありながら、子弟の母と地元の父の間に生まれた子として異質性も有する。次節からは筆者が 2020 年 12 月から 2021 年 8 月にかけて行ったフィールドワークで得たデータに基づき、彼らのライフストーリーを記述しながら、移住生活によるその自己認識の形成・変化への影響を検討していく。図 4-1 は、3 世代を含む王強の家の系譜である。

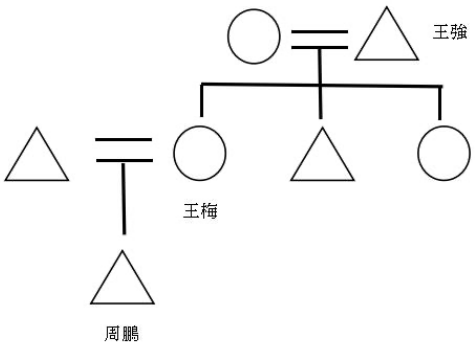


図 4-1: 王強の家の系譜(筆者作成)

(1) 第 1 世代

王強は 1938 年に山東省臨清県[9]の農村で長男として生まれた。父方の祖父母、父母、妹 2 人と弟 2 人で村に住んでいた本人の話によると、飢えること、物乞いすることなく暮らせたので、家の経済状況はあまり悪くなかったという。中学卒業後、就職を考えた際、叔父からの手紙で、仕事先の済南二場が職員を募集していることを知らされた。王強は応募し採用されたため、村から済南市に移動したが、済南二場の宿舎に入居することができなかったため、叔父の家で寄宿生活を送っていた。臨清県にいる妻と結婚した後も寄宿生活を続けていたが、妻が妊娠して王梅を産むと、ついに工場か

8 本稿に登場する人物の氏名はすべて仮名である。
9 戸籍に記されたのが河北省邢台市臨西県である。しかし、臨西県が 1965 年に山東省臨清県より分割設置され、河北省に移管されたこと、本人が山東省の生まれ育ちと主張したことから、本稿においては移管された以前の行政区画に従い臨清県と記す。

ら入居許可が下りたために、王強及びその家族は済南二場の家族居住区で暮らせるようになった。

1964 年、戦争に備えるという政府の呼びかけに応じるため、済南二場の一部を内陸に移転することが決定された。分工場が開設できるような人員を確保するため、済南二場において党委書記をはじめとした政治組織は、「支援内地建設」(内陸の建設を支援しよう)というスローガンを掲げ、職員に対して大規模な動員をかけた。その際、妻に正式な仕事がなかったため、王強は 1 人で家計を支えていたうえに、実家の両親にも送金していた。家の厳しい経済的状況を考慮した結果、彼は内陸への移住を工場に申請して許可された。1966 年、王強は家族を連れて、同じく選ばれた人々及びその家族とともに特別列車に乗って済南市から都匀市に赴いた。都匀市に到着した後、東方工場の第 1 工場に割り当てられ、倉庫の管理員として 1995 年の退職まで働き続けていた。移住してから、2 人の子どもが誕生したことで、3 人家族から 5 人家族になった。成員の増加で 3 回も転居したが、家族居住区から離れたことなく、現在でも妻とともに家族居住区に住んでいる。退職後は妻とともに孫の面倒を見ることで、一時は忙しい生活を送っていた。現在では年を取ったために、毎朝 9 時ごろの食材購入と午後 3 時ごろに友人と雑談するためにしか家を出ない。

工場に物理的・心理的な壁が築かれたことで、周辺村落との相互接触は最小限に抑えられ、機械文明と焼畑農業の対極がなされるように見えた。家族居住区で暮らす職員及びその家族は、工場に築かれた包括的システムで守られながら、周辺村落と経済的・文化的格差が拡大しつつあった。しかしながら、各自の生活需要を満たすために、農産物の売買をはじめとした長期的互恵関係も構築された。こうした互恵関係を介して、東方工場の人と周辺村落の人は少しずつ相手の言語や文化が理解できるようになった。とはいえ、些細なことで誤解が生じかねないし、喧嘩や衝突が激化したことさえある。例えば王強に深い印象を残したのは、1980 年代に水道をめぐって発生した周辺村落とのトラブルである。「『山東人』をここから追い払おう」とまで言われ、数人の工場職員が負傷で入院した大事件であった。衝突発生後、市政府の調停を通して水道の問題は解決されたが、東方工場とその村落の人々は長い間、互いに嫌悪感を持っていた。

こうした経緯のために、王強のような第 1 世代は、地元民に対してネガティブなイ

メージを抱く人が多く、彼らとの交流も非常に限られている。第 1 世代の人間関係は主に単位の中で暮らす人々から成っている。彼らはよそ者として破りかねない危険性を回避するため、単位の築かれた壁から出ようとしなかった。特に周辺村落との衝突で「われわれ山東人」と「彼ら地元民」という自他認識はさらに強化され、単位への依存度がますます助長されるようになった。

(2) 第 2 世代

王梅は 1964 年に山東省の済南市で生まれた。1 人目の娘として可愛がられたので、実家の祖父母に預けられることなく、両親とともに都匀市に移住して東方工場の家族居住区で成長した。両親と家族居住区で暮らしはじめてから、すぐその生活環境に慣れたし、仲のよい友達も何人かできた。幼稚園から高校まで家族居住区の学校に通い続けたことで、幼馴染みでありながらクラスメートになった友達と楽しい学校時代を過ごした。当時工場は労働者の数と質を確保し、職員子女の就職問題を解決するため、工場用地の空き地で専門学校を開設した。職員子女を主な募集対象として人材の育成を行ったが、成績が優秀な外部の人の入学も許可した。卒業生がすべて工場の各部門に配属されたことで、専門学校は第 2 世代にとって悪くない選択肢になった。王梅も例外なく工場の専門学校に進学したが、3 年間の学習を経て父と同じく第 1 工場に割り当てられ、退職まで働き続けた。

婚姻を考える年齢になると、第 2 世代の多くは「知根知底(zhigenzhidi)」(素性をよく知っている)という考え方から、山東省から来た子弟を結婚相手にする傾向が強かった。だが、王梅は、都匀市で生まれ育った湖南省ルーツの同僚の男性と結婚した。結婚後、工場による宿舎への入居を許可されたため、夫婦ともに家族居住区で暮らしていた。しかしながら、1990 年代からの経済悪化につれて、工場の学校は次第に規模縮小が進められて小学校しか残されないことになった。王梅の息子である周鵬は、それを契機に市内の中学校に転校した。家族居住区が市内から約 6 キロ離れ、バスの本数も少なかったため、子どもに苦労させたくない王梅は、市内で住宅を購入しようと考えはじめた。そして息子が中学 2 年生になった時、ついに市内での住宅購入を決意した。2005 年、市内への転居で一時的に家族居住区を離れたが、退職後には戻って家族居住区のサービスセンターで勤務している。

周辺村落と距離を保とうとした東方工場(家族居住区も含まれる)は、山東省から来

た職員及びその子女が絶対多数を占めていたうえに、単位での生活によって外部からの影響も限られたことで言語や生活習慣、人的構成といった面において、いわば山東省的な雰囲気が漂っていた。しかし東方工場は、1980 年代から市場経済の波にさらされるようになり、今まで築いてきた壁を破らなければ、激しい競争に勝ち残れなくなった。そこで、次第に自ら閉じた扉を地元社会に開き、地元民採用の拡大を図ったし、周辺村落の子どもの学校入学も許可した。そうした接触の増加にともない、第 2 世代においては次第に地元民との交流・往来が増えるようになり、人間関係も単位以外に拡がっていった。王梅の例に見るように、第 2 世代は幼いころから家族居住区で暮らしており、より単一的な環境のもとで「山東人」としての認識が形成された。しかし、市場経済化にともなって地元社会との接触が増え、単位への依存度が低くなっていったことに加えて、地元民との関係も構築していくにしたがって、第 1 世代のような自他認識もそれほど強くなくなっていった。

(3) 第 3 世代

周鵬は王梅の一人息子であり、1991 年に都匀市で生まれた。夫婦共働きで子育てをする時間が限られていたとはいえ、王梅は息子を市内の姑に預けることに賛成しなかった。その際、すでに退職した王強夫婦が孫の面倒を見る時間を持てるようになったことで、周鵬はそのまま母側の祖父母に預けられ、幼稚園まで彼らとともに暮らしていた。幼少年期の周鵬にとっては、親族の他は接触できる人が相変わらず家族居住区に住む人々に限られており、生活環境もあまり変わっていなかった。一方、地元民とのコミュニケーションは主に工場の学校に入学した周辺村落の子どもに限られていたが、工場学校の規模縮小にともなって市内の中学に転入することになった。地元民が 60%以上を占める市内学校への転学は、マジョリティからマイノリティに変わることを意味し、彼に違和感を抱かせた。よそ者として扱われないように、周鵬は地元の方言を話したり、地元のクラスメートと頻繁に交流したりしたことで適応を試みた。一方、家族と東方工場の人にのみ山東方言を話し、家族居住区の友達と交流しなくなったことで、「山東人」としての特徴をそのまま維持できなくなった。大学への進学を契機に彼は都匀市を離れ、陝西省の西安市で 4 年間を過ごした。だが、6 人の同級生で住む学生寮において、彼以外の 5 人は全て貴州省の出身であり、都匀市出身の人が 3 人もいた。そのため、貴州省的環境、さらにいえば都匀市的環境から離れたとは言い

がたい。大学 4 年生になると、周鵬はさらなる学歴を得ようと大学院の試験を受けたが、残念ながら不合格であった。その後、卒業して西安市から都匀市に戻り、市内の私営企業で就職した。

家族居住区から都匀市内へ、都匀市から西安市へ、西安市から都匀市にという転々とした生活により、周鵬の人間関係は工場、市さらに省の範囲を超えるように拡がっていき、家族居住区に住む人々との関係が少しずつ疎遠になった。それに対して、今の職場では地元民が大多数を占めていることで、都匀的環境に慣れ親しんでいる。その使用言語や生活習慣は、両親からの影響を受けたうえ、地元民との接触が増加したことで、現地化が進んでいる。まとめてみれば、周鵬は家族居住区で幼少年期を過ごしたことにより、工場と関連づけられて「山東人」としての認識が強化されたが、都匀市内への転学でマジョリティとしての優位性を失い、周囲からの目線が気になって葛藤や不安を抱いた。それゆえ、地元民に受け入れられるように振る舞ったが、家族とのコミュニケーションでは山東方言を使い続け、山東省の食習慣も維持している。自己調整で双方に適応できている点を鑑みると、第 1・2 世代に比べて単位との関係性が薄くなっている。

5.自己認識

計画経済体制のもとで、政府は人口の自発的移動、特に農村人口の都市流入を制限するために戸籍管理制度を設けた。それに基づいて都市部の人々は移動する際、住所などの変更を登記することが義務づけられた。市場経済体制への転換により、戸籍管理制度の改革を経て規制が少しずつ緩和されるが、人口の移動に際しては依然として制約の役割を果たしている。登記項目としては氏名、性別、民族、生年月日、出生地、本籍地、住所、学歴、婚姻状況などが挙げられる。とりわけ出生地と本籍地は厳密に区別され[10]、国内移動歴を持つ人であれば、両項目が異なるのが特徴的である。そのため、出身地について聞かれると、出生地と理解する人もいれば、本籍地と理解する人

[10] 出生地は本人が生まれた場所で、本籍地は生まれた時の祖父の居住地とされる。とりわけ本籍地の場合、特別な状況がない限り、父側の祖父の居住地とされる。また、祖父の居住地が確定されないと、父の本籍地とされる；父の本籍地が確定されないと、本人の出生地とされる。

もいる。

一方、単位は市場経済体制の導入で制度的基盤を失ったが、成員への影響力は維持されている。それは計画経済時代、単位によっては職員及びその家族の身分が保証され、社会的存在として認知されることになった(田辺 1986:186-187)ことで、「単位人」の認識が生み出されてきたからである。政策移民の場合、沿海から内陸への移住経験を共有したことで、帰属意識がさらに高められた。また、何十年も単位のもとで集団生活を送ったので、単位を中心にした人間関係が形成されていた。ゆえに、市場経済化にともなって単位は崩壊しつつあるものの、成員を集める社会集団としての機能をは保たれ続けている。こうした戸籍管理制度と単位制度による二重の影響のもとで、政策移民は自らの帰属に対してどのように返答するのだろうか。そして、それは世代によってどのように異なるのだろうか。

(1) 「東方工場人」である第 1 世代

自分のことをずっと「山東人」だと思っている。それは本籍だから、変わるはずがない。でも、実家には戻れないから、今は「都匀人」とも言える。子どももここで定住しているし、半分の人生もここで過ごすし。もうここに来たので、安心して暮らせばいい。戻りたい、山東省の方がいいと言っていると、ここで安心して暮らすことはできないだろう。そして農村の実家に戻ろうとしても、自分たちの土地も住む場所もなくなったので、戻れないよ。両親がいたら、話は別になるけど。両親がいた時、7、8 年か 10 何年に 1 回ぐらい実家に戻ったが、頻度はそれほど高くなかった。両親が亡くなって、私も退職してから、20 年も戻っていない。家族そろって来た以上、ここでの生活を営まなきゃ。でも「山東人」に比べたら、やはり「東方工場人」という身分がしっくりくる。山東省でただ十年暮らしただけだ。入学から就職までちょうど 10 年間だけど、ここではもう何十年も暮らし続けてきた。東方工場以外にほかのところで働いたことがないから、「東方工場人」だとしか言えない。子どもも「山東人」より、「東方工場人」がしっくりくるに違いない。彼らは山東省の実家で暮らした時間が短くて、記憶も薄い。東方工場で生活して、東方工場から出て、東方工場によって育成されたから、どこに行っても、自分が「東方工場人」だと主張すべきだ(王強;2021 年 3 月 4 日)。

第 1 世代の王強は出生地と本籍地は同じ場所であるが、本籍地意識が強く、出身地を本籍地だと理解している。単位移住で山東省的な環境が守られ、方言や習慣については移住先のローカルな影響もわずかな程度にすぎないため、「山東人」としての自己意識を依然として強く持っている。しかし、山東省を離れて都匀市に移動し、長い現地生活を送ったことで、移住先への肯定感が高くなり、故郷に戻ろうとも考えていない。その代わりに、家族揃って移住してきた以上、移住先での生活を営むべきという現地適応の志向が顕著に現れ、自己を地元民として位置づけることにも違和感がなくなっている。それは山東省の実家に残った親族との長期間の分離、肉親の他界にともなう関係の希薄化にも起因するといえる。

一方、移動前の山東省における生活は移動後のそれに比べてそれほど長くない。移動後は都匀市で暮らしているため、「都匀人」という意識が育まれてもよかったはずだが、単位の閉鎖的環境に居続けるために都匀市より東方工場で暮らしていると単位を強く意識し、「単位人」の認識が出身地認識を上回っている。また彼らは内陸建設を支援するために沿海部から移住してきたので、一種の身分的優越感を抱き、自集団以外の他者、特に地元民と接触する気もあまりない。単位への依存度が高いと同時に、排他的人間関係の中で帰属意識も強くなることで、工場を家とする集団性が生まれ、「単位人」認識の強化につながっている。さらに、「東方工場人」としての認識は自分の世代のみならず、同じ経験を共有した子女にも継承されるはずだと考えている。

(2) 第 2 世代にとっての誇り高い「東方工場人」

> 出身について聞かれたら、きっと「山東人」と答える。山東省は故郷で、それに特別な感情を抱いているから。自分の生活環境や都市の発展の潜在力に対する関心からいえば、都匀市を第二の故郷と見なすが、故郷としてはまだ何かが欠けている。都匀市の発展に関心があるけど、生粋の都匀育ちという考え方はない。ここで成長したけど、自分を「都匀人」と位置づけていないし、都匀を故郷とは見なしていない。自分では自分が「都匀人」とは言わない、「山東人」だから。ここで生活し、家もここにあるけど、家と故郷は別のもので、同列に論じるべきではない。
>
> 東方はもう一つのシンボルになり、ここで働いたことがある人に影響を与え続

けている。私たちからみれば、「東方工場人」はとても誇り高い身分を示している。移動した人でも、自分を「東方工場人」と称する。私もやはり出身地の「山東人」より、「東方工場人」がしっくりくる。山東省から来たけど、ずっと東方工場で成長し、学校から就職、結婚まで東方という環境で生活している。第 1 世代は、実家に情があるかもしれないし、ここに来てから「東方工場人」の身分が付与されたため、「東方工場人」より「山東人」の方がもっとしっくりくるだろう(王梅；2021 年 3 月 15 日)。

第 2 世代の王梅は第 1 世代と同じく出身地を本籍地と理解したが、「山東人」としての認識をより強く主張した。実際に済南市での生活時間が短く、都匀市で成長して自分の家庭を持ったとはいえ、都匀市を単に第二の故郷と位置づけている。単位制度の崩壊につれてその人間関係は単位以外に拡がっていくし、地元で生まれ育った夫とも結婚したため、「都匀人」としての認識が優越するようになると予想された。しかしながら、むしろ両集団の相違を彼女は意識し、家と故郷を別するような認識をしている。その対応策によって「山東人」としての認識はさらに強調され、「都匀人」への認識形成を妨げることになっている。

彼女の世代になると、東方工場は地元職員の雇用増加などで人員構成の多様化を促した。そのうえ、家族居住区も地元職員及びその家族の入居、周辺村落との関係構築などによって、地元の方言や生活習慣が持ち込まれていた。そういう変化が現れたとはいうものの、単位としての東方工場の破産と家族居住区の移管までは数十年あり、第 2 世代の人生の半分を占めるほどである。それは王梅のような第 2 世代が工場で仕事をして、かつ家族居住区で生活するという生活様式を何十年も続けたことを意味している。そのために、王強の推測どおり、単位による影響は強く、「単位人」としての認識を明確に主張している。

しかしながら、第 1 世代の父の自己認識について、王梅と王強の考え方には世代間の認識差が出てくる。王梅からみれば、父のような第 1 世代が「東方工場人」として自らを位置づけるようになったのは、東方工場が成立してからのことである。それ以前は「山東人」として育てられて「落葉帰根(luoyeguigen)」(人間は落ち葉が根元に帰るように死んだら故郷に帰る)という伝統的思考様式に基づき、「山東人」の認識が非

常に強かったと王梅は述べた。ところが自身を「東方工場人」と位置づけた王強の自己認識は娘とは異なり、世代間に存在する認識の差が浮き彫りになっている。

(3)「東方工場人」の子弟としての第 3 世代

出身地について聞かれたら、都匀と答える。自分は故郷が都匀市で、「都匀人」に決まっている。誰に聞かれても、「都匀人」と答える。もし「そうには見えない」と問い詰められたら、都匀市で生まれ育ったけど、家には北方人の方が多く、北方人の祖父母によって育てられたと説明を加える。西安市ではそう言われたことが多いけど、地元ではあまりない。しかし、自分は実のところは北方人で、南方に生活する北方人だとも思っている。「都匀人」だけど、「東方工場人」の子弟という方がもっとしっくりくると思う。

広くいえば「都匀人」だけど、ちょっと自分から遠く離れる感じがする。東方工場が都匀市にあるので、具体的に「東方工場人」の子弟といえば、もっと実感がわく。そして祖父母の世代も親の世代もきっと同じ理由で、「都匀人」より「東方工場人」の方がしっくりくるだろう。もちろん東方工場に対する感情は、祖父母と親による影響が大きい。その影響がなければ、「東方工場人」の子弟としての認識は形成されにくかっただろう(周鵬；2021 年 4 月 24 日)。

第 3 世代の周鵬は都匀市で生まれ育ち、山東省で暮らしたことがない。さらに、本籍地が父側の祖父の居住地とされるという戸籍管理制度に基づき、彼の戸籍に登記された本籍地は母側の山東省ではなく、父側の湖南省である。ところが本人の話からも伺えるように、周鵬は出身地を出生地と理解し、そこには地元民の出生地認識が明確に示されている。一方、家族居住区での幼少年期の経歴と王強夫婦との生活により、自己認識の中には「山東人」としての種が撒かれた。第 2 世代の王梅は単位的環境を離れたことがなく、マジョリティとして優位性が確保されたため、本籍地への帰属感が強化された。しかし、周鵬は都匀市内への転学と転居を通して、マジョリティからマイノリティへの地位転換を体験した。そこで、現地社会への同一化を図ることで、不安や葛藤を解消してきた。ぶつかり合う自己認識は優位にある「都匀人」に統合されながら、幼少年期の生活歴による「山東人」としての自己意識も窺える。

彼は王梅と王強のように、出身地認識と「単位人」認識を矛盾したものとして捉えることなく、広い範囲と狭い範囲から説明を試みている。東方工場が都匀市に位置することで、広範には「都匀人」であるが、範囲を絞ると「東方工場人」になるというように、視点を伸縮させることで両認識を捉えている。この点から世代間の「単位人」認識に対する捉え方の違いが読み取れる。周鵬は東方工場で仕事をしたことがないので、「東方工場人」としての認識がない。しかしながら、家族居住区での生活歴によって東方工場と関わっているうえに、ほとんどが東方工場で就職した家族による影響も受け続けることで、工場への感情に共感を覚えている。それゆえ、直接的な「単位人」認識より、祖父母と父母の世代への継承意識で自身を「東方工場人」の子弟として位置づけている。さらに、第 1 世代と第 2 世代の自己認識については、彼の語りに見るように、「単位人」としての認識が上位にある。

6. おわりに

本稿では貴州省への逆移動を余儀なくされた政策移民に着目し、東方工場の 3 世代を主な対象として、単位移住によって各々どのような環境に置かれたか、自己認識が環境の変化によっていかに形作られたかについて考察してきた。

本稿で明らかになったのは、まず 3 世代の自己認識は出身地認識と「単位人」認識という 2 つの部分によって構成されているということである。それを踏まえて政策移民の自己認識は、現在の居住地からの影響を受けながらも、主として以前の居住地と長期間働いた職場から形成されていたと言える。次に「単位人」認識は政策移民の社会生活を根底から支えている。なぜかというと、彼らは政府の政策によって自由な選択ができず、内陸への移転を余儀なくされたうえに、工場と家族居住区に囲い込まれて地元社会と隔てられたため、単位への帰属意識が高められたからである。また、単位によって身分が付与され、生活も保障されたことで、それとの関係を常に意識し維持しようとしたことも作用している。

総じていえば、政策移民である東方工場の人々は単位ごと移住させられたことで、閉じられた場での生活を余儀なくされた。職場の同僚が隣人でもあり、仕事も生活も工場と密接に絡み合ったため(Chan 2015: 96)、閉じられた世界で生活を送ってきた。

時間の経過と社会の変動に伴い、外部との接触が少しずつ増えるが、地元社会より単位に築かれた世界から生を享受している部分が大きい。そうした傾向は、彼らの自己形成にも大きな影響を及ぼしている。つまり、東方工場の政策移民にあっては、その自己認識は世代間での変化が見られるが、常に単位と結びつけられた認識と語りに帰されているのである。

引用文献

Chan Anita.

2015　"Chinese Danwei Reforms: Convergence with the Japanese Model?", In Xiaobo Lü and Elizabeth J. Perry eds., *DANWEI: the changing Chinese workplace in historical and comparative perspective*, pp.91-113, New York: Routledge.

高伯文

2004　『中国共産党区域経済思想研究』北京: 共党史出版社。

市川哲

2009　「新たな移民母村の誕生——パプアニューギニア華人のトランスナショナルな社会空間」『国立民族博物館研究報告』33(4): 551-598。

石原享一

1999　「五カ年計画」天児慧・石原享一・朱建栄・辻康吾・菱田雅晴・村田雄二郎編『現代中国事典』pp.322-324、東京: 岩波書店。

嵇雷

2014　『非自願移民社会学研究』武漢: 湖北人民出版社。

上水流久彦

2012　「台湾の本土化後にみる外省人意識」沼崎一郎・佐藤幸人編『交錯する台湾社会』pp.139-174、千葉: アジア経済研究所。

川口幸大・堀江未央

2020　「国内移動をいま論じる意味　中国と日本」川口幸大・堀江未央編『中国の国内移動－内なる他者との邂逅』pp.1-21、京都: 京都大学学術出版会。

柯明星

2002 「論中国水庫移民工程後期扶持政策」唐伝利・施国慶編『移民与社会発展国際研討会論文集』pp.75-79、南京: 河海大学出版社。

倉田尚美

2018 「移動する青年のことばとアイデンティティ」川上郁雄・三宅和子・岩﨑典子編『移動とことば』pp.39-62、東京: くろしお出版 。

黒木雅子

2016 「日系アメリカ人のアイデンティティ変容—エスニシティ、ジェンダー、国家を超えて— 」『人間文化研究』36: 79-95。

李路路

2005 「中国における人口移動に関する研究」『社会学雑誌』22: 51-57。

李明歓

2011 『国際移民政策研究』廈門: 廈門大学出版社。

劉建軍

2000 『単位中国—社会調控体系重構中的個人、組織与国家』天津: 天津人民出版社。

丸川哲史

2005 「台湾ニューシネマにおける「外省人」のポジション」『愛知大学現代中国学会中国』21: 167-184。

三宅和子

2018 「国際結婚家庭 2 世代の『移動』と『選択』ー母から娘の 50 余年間の軌跡をたどる」川上郁雄・三宅和子・岩﨑典子編『移動とことば』pp.126-148、東京: くろしお出版 。

瀬川昌久

2018 「はしがき」瀬川昌久編『越境者の人類学ー家族誌・個人誌からのアプローチー』pp.iv-viii、東京: 古今書院。

孫潔

2020 「移りゆく『辺境』イメージー上海から雲南への『支辺』移民の語りを通して」川口幸大・堀江未央編『中国の国内移動ー内なる他者との邂逅』pp.266-294、京都: 京都大学学術出版会。

田辺義明

1986　「現代中国の社会構造—社会学的接近の試み—」庄司興吉編『世界社会の構造と動態—新しい社会科学をめざして』pp.185-214、東京: 法政大学出版局。

上田潤子

2018　「ある中国残留孤児の系譜—一世から四世までのインタビュー」川上郁雄・三宅和子・岩﨑典子編『移動とことば』pp.149-170、東京: くろしお出版。

植松晃子

2015　『異文化接触における民族アイデンティティの役割—自我アイデンティティとの関連から』東京: 風間書房。

呉暁林

2002　『毛沢東時代の工業化戦略—三戦建設の政治経済学』東京: 御茶の水書房。

Yeh. Wen-hsin

2015　“Republican Origins of the Danwei:The Case of Shanghai's Bank of China.” In Xiaobo Lü and Elizabeth J. Perry eds., *DANWEI: the changing Chinese workplace in historical and comparative perspective*, pp.60-88, New York: Routledge.

兪路

2008　『新時期中国国内移民分布研究』上海: 上海三聯書店。

張勇

2020　「区隔与融合：三線建設内遷移民的文化適応及変遷」『江海学刊』01: 206-216.

東北人類学論壇 Tohoku Anthropological Exchange 21: 48-66(2022)

萌芽論文

マナーを競う
—将棋の文化人類学的研究

ガン　ウェンスオ

1. はじめに

将棋とは、王将(または玉将)、飛車、角行、金将、銀将、桂馬、香車、歩兵という 8 種類の駒を使用し、相手の「王将」という駒を捕まえることを目的とする、2 人で勝敗を競うゲームであり、日本的な礼儀作法や武士道の価値観を反映した頭脳ゲームであると言われている。しかし、日本の将棋は単なる勝敗を競うゲームではない。対局者の間や対局者の周りの人の間では、勝敗自体とは直接関係のないふるまいが見られる。これらのふるまいを本稿では「将棋のマナー」と称する。では、将棋のマナーとはどのようなものであり、どのように守られているのだろうか。本研究は、参与観察とメディア調査といった方法に基づいてこの問題について議論をするものである。

「マナー」とは何かについて、様々な議論がなされてきた。マナーの類義語として、「エチケット」「礼儀」「作法」などがある。マナーとエチケットは西洋の概念であるのに対し、礼儀・作法は日本の概念であるが、両方は「基本的に違いがない」(佐々木 2012: 26)という意見がある一方で、「マナーと作法はオーバーラップするところが多いが、完全に同じではない」(加野編 2014: 10)という主張もある。また、日本の礼儀作法(礼法)は「体の機能と物の機能を理解」し、ある礼法をする理由を理解することが重要であり、この点がマナーとエチケットとは異なると述べている(小笠原 2007: 11)。このように、従来の研究では礼儀と作法およびマナーとエチケットに対してその異同や日本・西洋の文脈からいくつかの見解がある。では、将棋のマナーをどのように考えるべきだろう。

将棋のマナーは、日本特有な礼法としてだけではなく、スポーツマンシップや贈与などの側面も見られる。そのため、本稿では「礼儀」や「作法」といった用語を避け、

「マナー」という用語に統一し、ガッツポーズをしないことや、対局の始まりと終わりの挨拶、負けるとき「負けました」と言うこと、実力と年齢といった上下関係による「王将」と「玉将」の使い分けと先手と後手を決めるための「振り駒」、駒の並べ方など、将棋のゲームの勝負とは直接関係のないふるまいを指す。ただし、事例の中ではインフォーマントが用いた「礼儀」や「作法」といった用語が現れる場合は「マナー」に変換せずにそのまま引用する。

とりわけ、将棋のマナーの中で対局者の上下関係がかかわってくるものが多い。こうした上下関係が重要視されている社会は、日本では「タテ社会」(中根 1967)と扱われてきた。では、将棋で見られるこのような上下関係は「タテ社会」を体現したものだろうか。本稿では、人々が将棋のマナーを遵守している様子を記述することで、将棋のアマチュアとプロの世界(以下ではそれぞれをアマチュア界とプロ棋界と記す)における上下関係について考察する。その際、中根千枝の「タテ社会」の概念を応用しつつも、タテ社会とは一次元的なものではなく、三次元的なものであると批判的に捉えたい。

2. タテ社会

日本の歴史をさかのぼってみれば、日本社会は古代から武士社会が終わるまでの封建時代において、上下関係が賤民から天皇にいたるまでの階級制(カスト)が見られた(沼田 1979: 174)。また、明治時代からは士農工商の社会階層がなくなったとは言え、階層的習慣はなくならず、新たな形として、つまり、政治、宗教、軍隊、産業といった領域で、日本社会に浸透してきた(ベネディクト 1972: 110)。現在においても、そのような上下関係は企業内部や大学の部活などで名残は確認できるが、かつてのような社会的秩序と全く同様だとは言えない(沼田 1979: 175)。

現代の日本社会における上下関係について、中根は「タテ社会」という用語を用いた。すなわち、ある社会は、「資格」と「場」という二つの要素のどちらかを優先することによって構成されている(中根 1967: 27-28)。「資格」とは、個人の属性のことを指し、学歴や、地位、職業、資本家といった後天的に獲得する要素と、性別、年齢といった生まれつきの要素に分けられるのに対し、「場」は会社、所属機関のような一定

の枠のある地域または範囲のことを指す(中根 1967: 26-27)。日本社会は「資格」ではなく、「場」を優先して強調する集団であると、中根は主張している(中根 1967: 29-30)。

このような「場」を重視している単一社会としての集団には、「タテ」の序列が強い(中根 1967: 70)。日本社会は成員を同列におかれないというタテの序列が強い(中根 1967: 71)。つまり、ある集団において成員は「親分・子分」、または「先輩・後輩」の関係によって結ばれ、上下関係で差が決まる(中根 1967: 70-71)。例えば、日本の会社や学校の部活といった集団が単一社会であり、そこで見られる先輩・後輩の上下関係がこのタテ序列のシステムに当たるだろう。

このタテ社会の概念を評価しつつも批判的に検討したのが米山である。米山によると、日本の社会にはタテの序列は確かに存在してはいるが、ほとんど大学や大企業などのようなエリートが集まる集団の方がよりよく確認できると主張し、ヨコ社会における上下関係も見られる(米山 1976: 71,73)。ある組織のヨコ関係にある成員の中でも実力によって、必ず上下の差が生まれるというために、上司と部下というタテの序列の他にも、ヨコ関係にある成員の間でも実力によって、上に立つ「リーダー」という者が自然に発生するのである(米山 1976: 75-76)。

将棋の対局において、上座と下座、王将と玉将の使用者を決めるために、対局者の間の上下関係が重要となり、対局者の間で再確認される。しかし、将棋においてマナーに基づいたこれらの上下関係は、中根の論じた、先輩・後輩のような序列のみ、つまり、一次元的なものにとどまらず、米山が指摘した実力による上下関係も見て取れる。すなわち、上座と王将の使用者を決めるときに対局者の実力が重要であることや、勝敗によって対局者が守るマナーが変わってくることなども合わせれば三次元的であると言える。では、このような三次元的な上下関係をどのように理解することができるだろうか。

以上の問いを明らかにするそのために、本稿では将棋の世界をプロの世界(プロ棋界)とアマチュアの世界(アマチュア界)に分けて、将棋のマナーの事例を挙げて検証する。プロ棋界の上下関係を検証するために、プロ棋士のタイトル戦の生放送に対する調査と、雑誌・新聞の記事の研究を行った。また、アマチュア界における将棋のマナーから見る上下関係を検証するために、仙台における錦町将棋倶楽部と杜の熊さん将

棋教室で参与観察を行った。プロ棋界とアマチュア界に分けて考察を行う理由としては、上下関係が顕著に見られるプロ棋界に加えて、アマチュア界においても上下関係が重要視されているのかを検討したいためである。

以上の方法で得た事例をもとに、本稿では、中根(1967)のタテ社会の一元的な理論と米山(1976)の二次元的な指摘を踏まえ、将棋には三次元的なタテ序列が存在すること、またこの三次元的なタテ序列は将棋のマナーを通して見えてくるものであることを最終的に主張する。

3. プロ棋界における将棋のマナー

本章ではプロ棋士のタイトル戦を記述し、新聞・雑誌記事が記述した事例を挙げ、プロ棋界で守られているマナーを分析する。プロ棋士とは将棋を指すことを職業としている人々である。アマチュアと違い、プロ棋士は公式な将棋大会(公式戦)で対局することで、プロ棋士を統制する団体である日本将棋連盟から対局料がもらえる。本稿ではプロの将棋の世界を「プロ棋界」と称する。

プロ棋士が所属する日本将棋連盟は日本の将棋文化を発展させることを目的としている組織である。その中で、全てのプロ棋士が成員であり、日本将棋連盟に一方的に所属している。プロ棋界では、先輩・後輩のシステムが存在し、誰が先輩なのか、誰が後輩なのかは棋士番号(プロ棋士になった際に与えられる番号)によって決められ、棋士は棋士になった時から不変の地位を与えられている。

また、プロ世界において、棋士たちの実力の序列関係を決める制度が存在している。棋士の実力をランキングで示す、順位戦の五つのクラスがそれに当たる。勝てば上のクラスに上がり、負ければ下のクラスに下がるというこの順位戦のランキング・システムは棋士の間の実力の差を示し、上下関係を作っている。

さらに、プロ棋界には昇段制度もある。この制度は先輩・後輩の序列関係と実力の序列関係の両方を同時に表す曖昧なものである。アマチュアと異なり、プロ棋士の段位は棋士個人の記録を示す制度である。棋士の昇段制度は棋士個人が公式戦で何勝を取った(通常は負けた回数を無視し、100 勝や 150 勝などのように決める)か、または何回タイトルを獲得したのかなどの条件がある。そのため、棋士として活躍する期間

が長ければ長いほど、勝った回数やタイトルに挑戦する機会、獲得する機会も多くなるため、段位を通して棋士たちの経験がわかり、先輩・後輩の関係もある程度知ることができる。しかし、それと同時に、タイトルを獲得することや勝数を重ねることは簡単にできることではないため、この昇段制度はある程度棋士の間の実力を比較するものにもなる。

さて、以上のような背景にあるプロ棋界において、プロ棋士はどのように対局をしているのか、またどのようなマナーが守られているのだろうか。以下では、プロ棋士のタイトル戦とプロ棋界における上下関係のマナーという二つの項目を立てて見てみたい。

(1) プロ棋士のタイトル戦

アマチュアとプロ棋士の最も大きな区別は、新聞社などがスポンサーになる、トーナメント式の八つの公式棋戦に参加できるかどうかということである(公益財団法人日本将棋連盟 n.d)。公式棋戦で勝ち越して優勝すると、棋士は賞金を入手し、さらに最後の対局(タイトル戦)で勝つとタイトルを獲得することができる。本項では AbemaTV というライブストリーミング形式インターネットテレビサービスである将棋番組で観戦できるプロのタイトル戦について記述する。

①聞き手と解説の役割

AbemaTV で見られるタイトル戦の生放送では、視聴者のために局面に説明を加える役割を担う「聞き手」と「解説」の二人がいる。聞き手と解説は大盤の右と左の両側に立つ。視聴者に向かって左に立つのは聞き手であり、主に女流棋士が担当する。それに対して、視聴者に向かって右に立つ男性棋士のことは解説と呼ぶ。解説の役割は主に局面の解説と次の一手の予想や可能性を紹介することである。他方で、聞き手の役割は解説に話題を提供し、解説との会話をスムーズにできるように努めることである。

どのタイトル戦かは関係なく、一つの対局には通常、聞き手と解説(本稿では聞き手と解説を合わせて言うとき、番組の出演者という言葉を用いる)が 2 人ずつおり、30 分から 2 時間が経つと出演者が交代する形で番組を送る。また、ここで注目すべきは、出演者が交代するときに、必ずしも聞き手と解説のコンビネーションが必須ではないということである。解説が 2 人いる場合もあり、その場合は「ダブル解説」と言う。

ダブル解説の場合において、段位がより低い棋士はいつも視聴者に向かって左(聞き手と同じ位置)に立つのに対して、段位がより高い棋士は視聴者に向かって右に立つ。

②対局前日の検分

対局日の前日に、対局者はあらかじめ対局場に着き、室内の温度と明るさの調節と、次の日の対局で使用する将棋盤と駒を実際に並べ、欠陥がないか確認する作業を行う。検分はまずスーツ姿の両対局者が対局室に入室することから始まる。タイトルの持ち主はドアから遠い方の席(上座)に着き、挑戦者(タイトル戦の前のトーナメント戦で勝ち続けて最後にタイトルの持ち主に挑戦する権利を持つ棋士)はドアに近い方の席(下座)に着く。

対局者が着席した後、立会人は、「それでは、検分を行います」と言う。立会人は、棋士の対局中で問題が起きた時に対応し対局のスムーズな進行を確保したり、新聞社の関係者に局面の解説を行ったりする役割を担っている。立会人の合図を受けた対局者は互いに一礼をし、上座の棋士が駒を駒箱から出して王将(または玉将)とランダムの駒を二つぐらい並べる。その後、将棋の駒と将棋盤の確認が終了し、対局者は部屋の照明と温度の調整について関係者と話し合う。

話し合いが終わった後、タイトルの持ち主は駒を駒箱の中にしまい、駒箱を将棋盤の真ん中に置く。駒の片付けの作業が終了した後、対局者は再び互いに対して一礼をし、検分を終わらせる。

③対局の様子

対局日当日、対局開始の 10 分前に、挑戦者は和服姿で入場し、下座にき、タイトルの持ち主の入場を待つ。続いて、和服姿のタイトルの持ち主 1 分か 2 分ぐらい遅く入場し、上座につく。タイトルの持ち主が席に着いた後、対局者は互いに一礼をし、駒を並べはじめる。

午前 9 時になると、立会人は「それでは、定刻になりましたので、○○の先手で対局をよろしくお願いします」と言う。それを聞いた対局者たちは「よろしくお願いします」と言い、互いに対して一礼し、対局を始める。

2 日制の対局は 1 日目の夕方で一時的に中断する。その時、封じ手いう儀式が行われる。封じ手とは、公平さを保つために、2 日制の対局において、1 日目の対局を一時的に中止させ、次の日に再開させる場合、手番を握っている対局者の一方が対局を中

止した後から再開までの時間帯を利用して次に指したい手を考えるという有利な状態を避けるために行われる作法である。封じ手は2日目の朝、対局が再開する前に開封される。

対局は2日目の夕方に終了する。勝ち負けが見えてくる終盤に入ると、自分が負けると知った対局者は「形作り」をしはじめる。形作りとは勝ちのない局面においてプロ棋士が投了する前によくすることであり、「観客にいい勝負だったと思ってもらうための最後の指し方」(アライコウ 2019: 186)である。形作りをした後、負ける方の対局者は相手に頭を下げて「負けました」と言い、投了をする。対局が終了した後、対局者は感想戦を行う。

(2) プロ棋界における上下関係のマナー

プロ棋界では、上下関係は実力と、日本将棋連盟に所属している組織の中にある先輩・後輩の関係で決まる。プロ棋士の実力は特有の段位システムで決まる。実力を確認する場合、まずタイトルをいくつ獲得しているのかから判断し、その後、段位の高さが判断の要素になる。実力が相当する場合、棋士番号というものが重要になってくる。棋士番号は、誰が先にプロ棋士になったのか、その順番を示す番号であり、プロ棋士になった時に皆獲得する番号である。その番号によって、誰が先輩なのか、誰が後輩なのかが決まる。つまり、棋士番号の数字が小さければ小さいほど先輩にあたるのである。

プロ棋界におけるこうした上下関係は将棋のマナーで見られる。以下はプロ棋界で見られる後輩が先輩より高い昼食を注文しない事例(事例 1)、段位の低い棋士は段位の高い棋士より早く入室する事例(事例 2)、対局室の検分で後輩棋士が先輩棋士に合わせる(事例 3)事例である。

事例 1:

昼食対決と言えば、6月8日に東京・将棋会館で行われた第91期棋聖戦五番勝負の第1局が注目された。藤井聡太七段がタイトル戦に初めて登場した記念すべき日だ。藤井七段はこの日、980円のカツカレーを注文した。これに対してタイトル保持者の渡辺明棋聖は3600円のうな重(竹)と赤だし。価格差が大きかったのだ。これについて「渡辺棋聖は相手の藤井七段が高いものを頼みやすいように高

価なものを頼んだのではないか」と話題になった。

名人戦第 1 局が終わった 11 日に渡辺三冠に真相を尋ねると、「確かにある程度のものを頼んだ方が相手は手広いという意味はあります」とその心を認めた。さらに続ける。「タイトル戦を将棋会館でやる時はそれなりのものを頼まないと格好がつかないでしょう。いつも頼んでいる弁当じゃないとするとうなぎか寿司しかない」。公式ブログや棋譜中継で紹介されることを意識した注文だった。

(2020 年 06 月 18 日　朝日新聞「《朝日新聞デジタル》【詳報】渡辺三冠のロマン、変調か「やったー、とは…」　第 78 期将棋名人戦七番勝負第 2 局 1 日目」より)

事例 2:

和田: やっぱり挑戦者としては先に入室しておいたほうがいいというのも…。

千葉幸生七段: あ、そういうのはちょっとあるでしょうね。やっぱタイトルホルダーよりなんか遅れて来るのはあまりいいものではないかもしれない…。そこらへん、糸谷さん、結構気ぃ使う方ですかね。そういうことも考えているかもしれません。

事例 3:

千葉: 盤と駒に関しては特に問題なく進んでたみたいですけれどもね。やっぱ室温はちょっと暑くなったりとかするとあれなので、渡辺さんの方はちょっと…結構気にされてる感じでしたね。

和田: そうでしたね。糸谷八段はまあ、渡辺棋王に合わせる感じでしたね。

千葉: そうですね、やっぱり挑戦者ですとね、なかなかこう…自分から主張するというところも…かもしれないですね。

和田: そうですね。

千葉: まあ、渡辺さんの方が先輩ですしね…。

事例 1 は『朝日新聞』の新聞記事から取った、「将棋飯(プロ棋士が対局する時注文する食事のメニュー)」にかかわる上下関係のマナーに関する事例である。この事例では、渡辺棋聖が、後輩である藤井聡太七段が高いものを頼みやすいように高価なもの

を頼んだことに認めた。渡辺棋聖の気遣いがあるというのは、後輩である藤井聡太七段が先輩より高いメニューを避ける傾向があるためだと考えられる。

事例 2 は第 46 期棋王戦五番勝負第 2 局で、聞き手の和田女流初段と解説の千葉七段が棋士の入室について話している事例である。2 人の会話の中から、挑戦者がタイトルの持ち主より早く入室した方がいいことが明らかである。この場合、タイトルの持ち主は実力がより高いため、上下関係の「上」の方になり、挑戦者は「下」の方になると考えられる。

事例 3 は千葉七段と和田女流初段が対局日の前日の VTR を見ているときの会話である。事例 3 のように、検分が行われる際においても上下関係のマナーがかかわってくる。つまり、対局室の温度調整などの主導権が主に先輩にあり、後輩はほとんど発言せずに先輩に合わせるのである。

以上の事例の他にも、AbemaTV の将棋チャンネルで見られる解説と聞き手の立ち位置もプロ棋界の上下関係のマナーにかかわったものである。解説と聞き手の立ち位置は棋士・女流棋士の実力によって決められる。解説を担当する男性の棋士は聞き手を担当する女流棋士より実力が高いため、視聴者に向かって右に立つまた、ダブル解説の場合も、段位がより高い棋士が右に立つ。

最後に、プロ棋界における、上座と下座にかかわるマナーの例を挙げてみたい。

事例 4:

誰にも好かれる礼儀正しい青年が一度だけ騒ぎを起こしたことがある。七冠王になった羽生善治さんがまだ四冠王のときだった▼対局のとき、序列が上の先輩をさしおいて、上座に座ってしまったのだ。何かの間違いだろうと周囲は思った。しかし、それを二度繰り返したから皆驚いた。最初の先輩が中原誠さんで、二度目が、今度の王将戦の相手の谷川浩司さんだった。いずれも十年に一人といわれる歴代の名人である。

(1996 年 02 月 15 日　朝日新聞　「七冠王になった将棋の羽生善治さん(天声人語)」より)

事例 4 は朝日新聞で取り上げられた羽生善治(棋士番号 175)が起こした上座と下座

にかかわる「騒ぎ」についての記述である。当時四冠(竜王・王座・棋王・棋聖)だった羽生善治は先輩の棋士である中原誠(棋士番号 92)と谷川浩司(棋士番号 131)と対局する際、上座に座った。中原誠と谷川浩司は 2 人ともタイトルの中で最も位置の高い「名人」というタイトルを取った経験があるため、実力としても高い棋士であり、羽生善治にとって先輩の棋士でもある。そのため、羽生善治が上座に座ったことに対して、周りの人は「何かの間違い」だと思い、「驚いた」のである。このように、将棋界において棋士たちは、互いの実力の高さと先輩後輩の関係を再確認し、上座と下座に座る側を決めなければならないことがわかる。

昼食の注文にせよ、上座と下座の決まりにせよ、将棋界におけるマナーから、プロ棋界という集団では成員が強い上下関係によって結ばれていることが明らかである。また、棋士の間の上下関係は実力で決めるものと、先輩・後輩で決めるものの両方が並列に存在している。

では、アマチュア界ではどうだろうか。事実として、将棋倶楽部や将棋教室のようなアマチュア界は、プロ棋士で構成されているプロ棋界と異なり、先輩・後輩のようなシステムは存在しない。さて、このようなアマチュア界においても上下関係は見られるのか、また、そのような将棋のマナーがかかわっているのか、次章で見てみたい。

4. アマチュア界における将棋のマナー

本稿では、将棋を職業ではなく、趣味として指している人々の世界をアマチュア界と称する。アマチュア界はプロ棋界とは異なり、日本将棋連盟によって統制されている集団ではない。また、アマチュア界では、昇段・昇級制度は個人の将棋で勝った記録というよりも、ある教室において、段位・級位が近い、他の参加者との対局で何勝何敗を獲得したかによって決まるものである。昇級・昇級すると、対局相手がさらに強い対局者になるため、段位と級位は参加者の実力を直接表している。

このような背景を持っている将棋のアマチュア界では、どのような上下関係のマナーが見られるか、明らかにするために、筆者は仙台市にある杜の熊さん将棋教室と錦町将棋倶楽部で参与観察を行った。以下ではそれらのフィールドについて記述し、アマチュア界におけるマナーの事例を挙げて分析する。

(1) 錦町将棋倶楽部の概要

錦町将棋倶楽部は宮城県仙台市青葉区錦町にあり、仙台に住んでいる SD さんによって設立された。60 代と思われる SD さん(男性)の他に、HS さん(男性)や CB さん(男性)なども錦町将棋倶楽部の経営に協力している。将棋倶楽部の開催日時は毎週土曜日の午後 12 時半から 5 時半までである。参加費や会費、また入会登録は不要であり、老若男女を問わず誰でも自由に将棋を指せる場所である。錦町将棋倶楽部の開設の目的は、将棋で遊びたいが遊ぶ場所がない人々に場所を提供することだという。そのため、将棋大会や、月に 1 回の親子教室などのイベントを開いている。倶楽部に来る人の中では 30 代以上の男性が最も多いが、20 代の男女や、中学生・高校生の男性、10 代以下の男女の子どもも時々来ている。錦町将棋倶楽部への参加は任意であり、よく来る人もいるが、筆者にとって初対面の人も毎回いる。

錦町将棋倶楽部では、コーヒーやお茶を飲みながら将棋を指したり、他の人の対局を隣で見たりする人がいる。対局する時間と相手が特に決まっていないため、全体のスケジュールがなく、来ている人たちは自分で対局する相手を探すことが多い。また、錦町将棋倶楽部に来る子どもは少ないが、午後 1 時から 2 時までの間に男女の子どもが数人、親に同行して、SD さんに将棋を習いに来る場合もある。子どもに同行した親は子どもが集中して SD さんの話を聞くように隣で一緒に学ぶ姿が見られる。

(2) 杜の熊さん将棋教室

杜の熊さん将棋教室は仙台市若林区荒町という、仙台市営地下鉄南北線の愛宕橋駅から徒歩 8 分のところにある。将棋教室の先生によると、杜の熊さん将棋教室は(2019 年時点)4 年前までは北四番丁にあり、2018 年 9 月に荒町に引っ越してきたという。将棋を学ぶ将棋教室として、子どもが来る「初心クラス」と、大人の初心者が来る「大人クラス[1]」、7 級以上の生徒たちの「通常教室」、誰でも歓迎される「一日道場」、有段者の「研究会」に分けられている。「初心クラス」と「大人のクラス」は「午前の部」に属し、午前 10 時から 11 時半までの 1 時間半で行われる。土曜日に「初心クラス」が開催され、日曜日に「大人クラス」が開催される場合が多いが、授業がない日があ

[1] 2020 年からは大人のクラスがなくなり、午前の部は全て初心者クラスになっている。先生によると、大人が 3 人のみであるため、また、彼自身の普及活動のスケジュールの都合のために大人クラスをなくしたという。それによって、大人たちは子どもクラス(初心者の場合)と通常教室の両方に来ることになった。

ったり、曜日が変わったりする場合もある。

また、「通常教室」と「一日道場」「研究会」は「午後の部」に属し、午後 1 時から 5 時半までの 4 時間半で行われる。「一日道場」と「研究会」は月に 1 回通常教室の代わりに午後に開催される。「初心クラス」と「大人クラス」「通常教室」とは異なり、「一日道場」では、先生は指導せずに、同じ場所の一角で「研究会」を行い、有段者と指導対局をする。「一日道場」の参加者はスタッフに、対局する相手のマッチングをしてもらい、対局に取り組む仕組みになっている。錦町将棋倶楽部とは異なり、杜の熊さん将棋教室への参加には料金がかかる。

杜の熊さん将棋教室では、子どもたちは指導者から将棋の戦法のみならず、「礼に始まり、礼に終わる」を言うことなどのマナーを身につけることもできる。また、自分の子どもを見守るために、教室が始まる時から終わる時まで教室にいる親も少なくない。

(3) アマチュア界で見られる将棋のマナー

さて、以上のような、アマチュアが集まる場所では、どのようなマナーが見られるのだろうか。以下では、上位者と下位者のマナーと、勝者と敗者のやり取りという観点からこの点について明らかにしていきたい。

①上位者と下位者のマナー

アマチュア界では、対局相手が決まった後、対局者は対面して将棋盤と駒の前に座る。その後、駒を駒箱から出して並べていく作業をする。その際、駒を駒箱から将棋盤の真ん中に出す人は上位者であるという決まりがある。上位者とは、級位または段位がより高い人のことである。初対面で相手の実力がわからない場合は、より年上の人が上位者となる。

先手と後手の王将を区別するために将棋の駒セットの中には「王将」と「玉将」がある。駒を出した後、上位者は先に王将を取って、将棋盤の自陣に並べる。その後、下位者は玉将を駒の中から探し出し、自陣に並べる。その間、上位者はすぐに他の駒を並べず、下位者が玉将を並べることを見守ってから次の駒を並べる。このプロセスは最後の駒まで重複する。

駒を並べた後、先に駒を動かす「先手」と、先手に続いて駒を動かす「後手」を決める必要がある。将棋教室では、段位・級位がより低い人が先手になるが、段位・級

位が同様な場合は振り駒をする。アマチュアの将棋大会などでは、年齢が上の人が振り駒をするのが普通である。

以下では、錦町将棋倶楽部と杜の熊さん将棋教室における上位者と下位者の対局中のマナーについて事例を挙げて分析する。

事例 5:

JN 君が将棋の勉強に飽きそうなとき、SD さんは筆者に JN 君と 4 枚落ち(飛車、角行、香車２枚を使わないこと)で対局するように言った。駒を並べようとしたとき、JN 君は SD さんに「どっちが弱い?」と聞いた。すると、SD さんは彼に「あんただよ」と冗談めいた口調で言い、隣にいる母親と一緒に JN 君の発言に対して笑った。JN 君はそれを聞いた後、「わかった。じゃ、僕が『玉』だね」と筆者に言って対局を始めた。対局が終わった後、筆者は「王将」と「玉将」のマナーをよく知っていてえらいと JN くんを褒めた。すると、彼は「お父さんが教えてくれたの。(「王」という字に)点がついていない方が強い人で、点がついている方が弱い人だって」と言った。(2020 年 11 月 7 日)

事例 5 は、実力を確認した錦町将棋倶楽部の JN 君の事例である。このように、実力または年齢の差から生じる上下関係を明確にしてから、王将と玉将の持ち主を決めることは将棋の対局において一般的なマナーである。

ところが、興味深いのは、王将と玉将の持ち主について決まりが既に存在しているにもかかわらず、対局者はその決まりから外れ、王将を使用するべき上位者が王将を下位者に譲るという光景がよく見られることである。王将を譲ることに関する事例を以下の事例 6 で示す。

事例 6:

筆者は HS さんと対局することになった。HS さんは筆者より強くアマチュア三段の実力があるし、筆者よりずっと年上であるため、将棋盤に向かって駒を並べる時、筆者は HS さんが王将を手にするのを待っていた。しかし、HS さんは王将を取らなかった。その代わりに、彼は玉将を手にし、駒を並べ始めた。それに

気づいた筆者は王将を使っても良いのか一瞬戸惑ったが、HS さんの自分に対する気遣いを申し訳ないと思いながらも、感謝の気持ちを込めて一礼をして王将を取って並べた。（2019 年 6 月 22 日）

事例 6 では、錦町将棋倶楽部で筆者が自分より年上で実力が高い HS さんと対局する際に王将を譲られたことが示された。このように、実力と年齢から王将の持ち主が決まるという一般的な常識から離れ、対局者はお互いに尊重する気持ちを表し、良い関係を保つために王将を譲る場面が多い。また、なによりも重要なのは、王将を譲る前提として、対局者は互いの実力と年齢を知っておかなければならない。

このように、将棋には、王将は上位者が使用し、玉将は下位者が使用するという決まりがあるが、上位者が下位者に対して王将を譲ることがよくある。他方で、上位者が振り駒をする権利を下位者に譲ることもアマチュア界でよく見られる。その目的は王将を譲るふるまいと同様に、相手との関係性を維持するためである。さらに、何よりも、このふるまいが成立するには対局者の間の上下関係という差が存在しなければならない。振り駒の権利を譲る事例を以下の事例 7 で見てみたい。

事例 7:

筆者(3 級)は SS 君の父親である 40 代男性の OD さん(3 級)と対局することになった。筆者は OD さんと同じく 3 級であるため、対局に臨むようにスタッフの AD さんに呼ばれたとき、「振り駒をして先手と後手を決めてください」と言われた。駒を並べて、振り駒をするとき、明らかに OD さんの方が年上なのに、OD さんは自ら振り駒をせずに筆者に振ってもらうことにした。相手が年上なので、筆者はその指示に逆らわなかった。自陣の歩兵を 5 枚取り、振り駒をした。(2020 年 9 月 5 日)

事例 7 は筆者が、級位がより高い OD さんと対局する時に OD さんに振り駒の権利を譲られた事例である。筆者はその権利を譲られた際に、「上の人からの命令」のように感じ、違和感を覚えた。しかし、それについて、将棋教室の先生は「電車の中で座席を譲るのと同じ感覚」というように筆者に説明した。このように、OD さんは筆者

に駒を振るように命令したのではなく、筆者との関係を保つために尊敬の気持ちを込めて振り駒の権利を譲ったことが明らかである。

②勝者と敗者のやりとり

次に、勝者と敗者のやり取りの中で見られるマナーついて見てゆく。

勝者と敗者のやり取りで見られるマナーは主に、①ガッツポーズをしない、②敗者に感想戦を始める権利を与える、③感想戦で自分の弱点を指摘するという 3 つである。これらのマナーを促すのは、対局結果によって生じる勝者と敗者の間の感情の差(勝った喜びと負けた悔しさ)が形成した対局者間の関係の不安定性である。この不安定性を元に戻すために、勝者は敗者に対してマナーを守る。以下では勝者が敗者に対して守るマナーに関する事例をいくつか挙げる。

事例 8:

SD さんが 60 代男性と手合いを決め、駒を並べている時、高校生の KT 君がその隣におり、その 2 人と世間話をした。話の内容は KT 君がある大会である子どもに負けて悔しかったことについてだった。また、相手がその場で「やった!」と言い、ガッツポーズをしたことについて KT 君は不満気に SD さんたちに文句を言った。聞いていた SD さんは鼻で「ふ」と苦笑いをしながら「それはそれは…」と言った。「まあ、あの子がずっと負けてたので…だけどひどくないですか…」と KT 君が続けて当時の状況を説明した。(2020 年 11 月 7 日)

事例 8 では錦町将棋倶楽部で筆者がフィールドワークを行っているときに聞き取れた KT 君がガッツポーズをされたという不満を SD さんに話した内容を示している。子どもに負けてガッツポーズをされた高校生の KT 君が怒りを感じたことがわかる。KT 君とその子どもの対局者の間の関係にひびが入ったことが明らかである。さらに、当事者ではない人として、SD さんもそれに対してネガティブな反応を示している。ガッツポーズをしないことは勝者が敗者に対して守るべきマナーであると言えよう。

次に、以下では勝者から感想戦を始めないというマナーに関する事例である。感想戦とは対局終了後に対局者が指した局面について検討する作業である。

事例 9:

小学生の TT 君と大学生の KB さんの対局を隣で観戦した。終盤で TT 君は KB さんの王将に連続王手を 10 手以上かけたが、詰みがなかった。それをチャンスとして、KB さんは反撃を始めた。持ち時間が削られた TT 君は秒読みに攻められ、最後の 15 秒で投了をした。対局が終わった TT 君と KB さんはしばらく無言のままだった。TT 君は手で顔を隠し、KB さんは静かに将棋盤を見つめていた。筆者が対局者はなぜ感想戦を始めなかったのか気になっていると、TT 君は沈黙を破り、感想戦を始めた。感想戦は双方の「ありがとうございました」という一言で終わった。駒を片付けた後、TT 君は母親の所へ行った。彼の目に涙があふれていた。(2020 年 3 月 7 日)

事例 9 は勝者である KB さんが、敗者の TT 君が感想戦を始めるのを待つという事例である。筆者は将棋教室で先生に相手と自分の棋力を上げるために感想戦を行う重要性があることを習った。感想戦は勝者から始めることも可能であり、敗者から始めることも可能である。しかし、事例 5 のように、敗者の感情が高ぶっている場合もある。敗者がまだ悔しい感情を抑えきれず、感想戦を始める心の準備がないにもかかわらず、勝者が強引に感想戦を進めてしまうと敗者との関係にひびが入る恐れがあると思われる。それで、事例 9 のように、敗者の悔しい感情が静まるまで、両対局者がしばらく将棋盤を見つめ、勝者が敗者に先に感想戦に進める権利を与えることが見て取れる。

最後に、勝者が感想戦で自分の弱点を責めるという事例を見てみたい。

事例 10:

筆者はスタッフの UN さんに負けた。UN さんにずっと勝っていた筆者は今回負けてとても悔しく恥ずかしい思いをし、どこから感想戦を始めるべきというよりまず気持ちを落ち着かせたかった。筆者が黙って何秒か経ったあと、UN さんは自ら感想戦を進めた。UN さんは筆者の悪かった手を指摘するよりも、彼女自身のよくなかったところについて話した。「やっぱりこの銀を上がる手はよくなかったと気付きました」、「終盤ではばたばたしてました。もっと早く詰ませられたの

に」などと自分を批判していた。感想戦がうまく行っていないところへ、隣で対局を見ていたスタッフの HS さんが感想戦に参加した。HS さんの指摘に対して筆者は納得し、とても勉強になった。悔しい気持ちも感想戦を通していつの間に消え去っていった。(2020 年 9 月 21 日)

事例 10 は将棋教室で筆者に勝った UN さんが負けた筆者に気を遣って自分の悪かった手を指摘する事例である。UN さんのこのような謙遜する姿勢は、勝者が敗者に対して見せるものであり、敗者の高ぶった感情を抑え、良い関係を保つために行われるものだと言えよう。事例 9 と事例 10 から見たマナーは一つの共通点がある。それは勝敗という結果から生じた感情の差(勝った喜びと負けた悔しさの差)をなくすという目的である。言い換えると、対局者の関係には何かの「差」が存在しているからこそマナーを守らなければならないのである。

以上のように、プロ棋界のみならず、アマチュア界においても、将棋のマナーを通して上下関係が重要視されていることを検証することができる。将棋倶楽部と将棋教室のようなアマチュア界において、先輩・後輩の上下関係は確認できないが、王将と玉将の持ち主と、振り駒をする人を決めるときに、実力と年齢による上下関係が重要になってくる。また、対局の終了によって勝者と敗者という上下関係ができるが、その際に勝者には喜びを表さずひかえ目な態度を保つというマナーが課せられる。

5. おわりに

以上の事例を踏まえ、将棋のマナーとはどのようなものなのか、またどのように守られているのかについて考えていく。特に、将棋における上下関係のマナーを、中根(1967)の主張したタテ社会と結びつけて検討してみたい。

将棋のマナーとは、将棋を指す人のみならず、周りの人(聞き手や解説など)も含め、将棋の対局にかかわる人々が守るべきだとされているものである。また、第 3 章と第 4 章で挙げた事例のように、プロかアマチュアかには関係なく、上下関係によって生じるものである。ここで言う上下関係とは、先輩・後輩の上下関係だけではない。一つの組織としてのプロ棋界では、先輩・後輩のシステムが強い。第 3 章でも見たよう

に、後輩棋士は先輩棋士に対して尊敬の気持ちを表すために様々なマナーを守っている。その一方で、先輩・後輩の上下関係が見られないアマチュア界では将棋のマナーは存在しないのかというと、決してそうではない。王将と玉将の使用者を決める時(事例 6)や、振り駒をする人を決めるとき(事例 7)など、誰が上なのか、誰が下なのか、年齢と実力で判断しなければならない。プロ棋界においても、先輩・後輩の序列関係の他にも実力が将棋のマナーの基本となる場合が多い。例えば、第 3 章でも言及した解説と聞き手の立ち位置のように、実力のより高い人は視聴者に向かって右に立つという決まりがある。

また、興味深いのは、誰が上なのか下なのかを決めるマナーは先輩・後輩のシステムと年齢、実力だけではなく、対局後に生まれた勝者と敗者の間の差も当てはまることである。例えば、事例 8 と事例 9、事例 10 がそれに当たる。上に立つ勝者は下に立つ敗者に対して守らなければならないマナーがある。すなわち、勝者は下位者に気を遣い、感想戦を始める権利を譲ったり、ガッツポーズを遠慮したりするのである。

では、将棋のマナーの基本となる上下関係はどのようなものなのだろうか。それについて、中根(1967)と米山(1976)の議論の中心となっていた「タテ社会」の理論を用い、将棋のマナーの基本となる上下関係の三次元的なタテ序列について考察する。将棋における上下関係は、中根(1967)の言う先輩・後輩のような一次元的なタテの序列関係でもなく、米山(1976)の言う、実力のタテ序列も含む二次元的なものでもない。将棋の場合、対局後による勝敗の結果の差による上下関係も入れて、三次元的なタテ序列である。また、この三次元的な上下関係の存在によって、将棋のマナーが形成されているのである。

もちろん、将棋のマナーには以上で主張した三次元的なタテ序列から外れたものも存在する。例えば、上位者が下位者に王将や振り駒をする権利などを譲ることもよく見られる。しかし、「譲る」という動作が行われる前に、対局者は自分と相手の間で誰が上位者なのか、誰が下位者なのか意識していることは否定できない。そのため、将棋のマナーは上の者(上位者、勝者)と下の者(下位者、敗者)という上下関係の差の存在によってはじめて存在するものであると考えられる。

日本社会で見られるマナーに加えて、将棋のような、勝敗を決する競技においては、勝敗という結果の差も考慮しなければならない。この勝敗の結果の差は感情の差を生

み出し、将棋のマナーが生まれる。すなわち、相手の前で喜びを表さない、負けた相手をさらに傷つけないといった気遣いが将棋のマナーを定着させているのである。

引用文献

アライコウ

2019 『将棋文化・歴史・専門用語がわかる! 将棋番組が 10 倍楽しくなる本』東京: ビジネス教育出版社。

ベネディクト、ルース

1972 『菊と刀—日本文化の型』長谷川松治訳、東京: 社会思想社。

加野芳正編

2014 『マナーと作法の社会学』東京: 東信堂。

公益財団法人日本将棋連盟

n.d. 「将棋の基礎知識—将棋界について—プロ棋界」<https://www.shogi.or.jp/knowledge/world/01.html>より、2019 年 6 月 21 日取得。

中根千枝

1967 『タテ社会の人間関係』東京: 講談社。

沼田健哉

1979 「日本社会における階層制」『桃山学院大学社会学論集』12(2): 173-183。

小笠原清忠

2007 『小笠原流礼法入門—美しい姿勢と立ち居振る舞い』東京: アジェット婦人画報社。

佐々木眞由美

2012 「現代青年のマナー観について」『北海学園大学大学院経営学研究科研究論集』10: 25-37。

米山俊直

1976 『日本人の仲間意識』東京: 講談社。

萌芽論文

終活を支える人々
–宮城県の終活カウンセラーを事例に

末谷　夏津樹

1. はじめに

今日では葬送のあり方が変容しており、「他者にどう葬られるのか」という視点から「自分自身がどう葬られるか」という視点に変わりつつある。その流れの中に「死のデザイン」と呼ばれる終活も位置付けられる。

終活という言葉が 2009 年に初めて使用されて以来(朝日新聞 2009: 174-176)、その定義は広くなりつつある。当初終活という言葉は墓や葬儀の知識を得ることや実際に準備をすることを指していたが、医療や介護身辺整理、遺言、相続の準備なども含まれるようになった(木村・安藤 2018)。終活を楽しむことや、終活を通して自らの人生を捉え直し、これからの生き生きとした生き方を整える、すなわちサクセスフル・エイジングやプロダクティブ・エイジングを目指す意図を併せもつようになった(木村 2019: 13)。

一方でこれまで死を直接語ることはタブーとされてきたが、なぜ死を前提にする終活が人々に受け入れられるようになったのだろうか。本稿では、終活に関する事業を展開する「一般社団法人終活カウンセラー協会[1]」が実施する「終活カウンセラー検定」で終活カウンセラー認定を受けた 3 人の活動を対象とした調査を通して、「終活」を支援する側と支援を受ける側の両方から終活の様相を描き、どのように終活が受け入れられているのか明らかにする。そして死を前提にする「終活」という行為がなぜ受け入れられるようになったのか考察する[2]。

---

[1]「今をよりよく生きる」をモットーに、終活の普及活動を行っている。終活カウンセラーを養成する制度も設けている(一般社団法人終活カウンセラー協会 2020)。

[2] 本稿における一次資料はフィールドワークによって収集したものである。筆者は 2020 年 11 月から 2021 年 11 月まで 3 人の終活カウンセラーの終活に関する活動(セミナー、講

2. 問題の背景

(1) 民族誌的背景

①葬送の変革から終活の広がりへ

葬送の変革は 1970 年代に始まる「葬送のパラダイムシフト」に端を発するという。これまで葬送を担っていた「地域」「家」「聖職者」のうち「家」が解体したことで、葬送が個人の家族の行事となった。この後「パラダイムシフト」の第二段階として「死のデザイン」と呼ばれるような終活が受容されるようになった(村上: 2015)。

高齢社会化が進む日本において、近年、高齢者のみの世帯と独居の高齢者世帯が増加の一途をたどっている。それに伴い、認知症や介護への対応や尊厳死など生命倫理に関する問題、高齢者のみの世帯の増加と孤立、老々介護の増加、葬儀や墓への意識と実態の変化、在宅医療や在宅介護を推進する国の方針などをはじめとする様々な課題が意識されてきた(内閣府 2019)。これらの要因から、高齢者が自らの老いや死、そして死後について何らかの形で考えておく、あるいは具体的に備える必要性が高まってきた(木村 2019: 5)。

このような状況に呼応する形で、終活への関心の高まりと、それに伴う終活に関するビジネスの広がりが見られる。終活は市場で様々に展開され(矢野経済研究所 2015)、その規模は 5 兆円にも上るとも言われる(ワールドビジネスサテライト 2015)。本稿で取り上げる一般社団法人終活カウンセラー協会をはじめとし、終活の資格認定制度を利用した終活ビジネスを展開する団体が複数存在する。また、経済産業省(経済産業省 2011, 2012)や横須賀市(横須賀市 2018)が終活に注目した施策を実施していることからも、行政においても終活が重要視されていることがわかる。

②終活カウンセラー協会

本稿において取り上げる終活カウンセラー協会は 2011 年に創設された一般社団法人である。協会代表は、自身の母の葬式を母の意図するままに行えたかどうか後悔が残り、そのような思いをする人を少しでも減らすことができればという考えから終活

演会等)に参加した。そこでは筆者はセミナー参加者の 1 人としてセミナーを聞きながら参与観察をした。加えてセミナーに参加していた他の参加者との会話から終活実践者の語りを収集した。またセミナーとは別日にインタビューも実施し、より詳細な情報を収集した。

カウンセラー協会を立ち上げた。講演や終活フェスタ、終活カウンセラー検定などを通じて終活の普及を図り、高齢者が安心安全に過ごせる社会を目指して活動しており、毎月勉強会や検定を開催している(一般社団法人終活カウンセラー協会 2020)。

本協会では、終活に関する悩み相談役として、悩みの所在を見極めて専門家につなぐことができる「終活カウンセラー」を育成することを目標として資格認定制度を設けている。認定資格には、カウンセラー2 級、カウンセラー1 級、認定終活講師がある。

一般社団法人終活カウンセラー協会の他にも、終活を支援する人を養成する団体がある。その中でも規模の大きい団体を選び、基本情報を以下の表 2-1 にまとめた。

表 2-1: 終活関連資格の比較

	終活カウンセラー	終活ガイド	終活アドバイザー	終活ライフケアプランナー
運営母体	一般社団法人終活カウンセラー協会	一般社団法人終活協議会	終活アドバイザー協会(NPO 法人　ら・し・さ)	一般財団法人日本能力開発推進協会(JADP)
時間	初級 講義+試験(6 時間) 上級 事前審査+講習 1 日+試験半日 上級インストラクター 講習 4 日間、試験 30 分	初級 10 分程度 中級 3 時間 上級 1 週間 (上級から受講可能)	4 ヶ月 添削: あり 3 回+修了課題(検定課題) 学習期間は 4 ヵ月、最長 8 ヵ月サポート	3 ヶ月 添削: あり 3 回+修了検定 学習期間は 3 ヶ月、最長 700 日の無料サポート
会費	月 400 円	年間 3,000 円(税別)	入会費 4,000 円 年会費 6,000 円	なし
費用	初級　9,970 円 ※テキスト・受験代	初級　無料(WEB 上)	通信	通信

費用	上級　45,000 円(税込) 事前審査費 3,000 円 上級インストラクター　250,000 円(税込)	中級　5,000 円(講座) 上級　50,000 円　(通信)	一括払い 35,000 円 分割払い 月々2,980 円×12 回 (12 ヵ月) 総計:35,760 円 (税込み・送料込)	通常価格 37,000 円 ※通常価格 37,000 円 / 分割払い例 1,930 円×24 回 ネットからの申し込みで 1 万円割引 一括払い 27,000 円 分割払い 月々1,410 円×24 回 別途受験料が 5,600 円

出所: 元気な終活(うえさき 2019)より筆者加工

(2) 理論的背景－儀礼

本稿では終活という行為を考察する際に「境界」の概念を用いる。それは「終活」が生から死への漸次的な移行の中で死を意識する一つの区切りとなるためである。

ファン・ヘネップ(1995)は「人がある範疇から別の範疇に移るとき、あるいは他の範疇に属している人々と同じ範疇に身を置こうと思えば、生まれた時から死ぬまで、形態はしばしば異なっていても、機能的には似通った種々の儀式をとり行わねばならないのである」と述べ、通過儀礼を「場所・状態・社会的地位・年齢のあらゆる変化にともなう儀礼」と規定した。そして通過儀礼はすべて「分離」「過渡」「再統合」の 3 段階によって特徴付けられるとした(ファン・ヘネップ 1995: 4)。

ファン・ヘネップの「通過儀礼」に関する概念を発展させたのが、ターナーとリーチである。ターナー(1976)は上記の「分離」と「再統合」の間にある「過渡」を「境界の」時期で、伝統や慣習や儀礼によって指定され配列された地位の間にあり曖昧さを持つとした。そしてそうした境界に存在する曖昧な状態を「リミナリティ」と呼んだ(ターナー 1976: 126-127)。リーチ(1981)は「全ての境界は、自然のままでは連続していて切れ目のないところに切れ目をわざと入れた人工的な分断であり、空間に対し

てばかりでなく時間に対してもこれが当てはまる」(リーチ 1981: 73)とした。

では終活はどうであろうか。本稿ではファン・ヘネップ、ターナー、リーチの研究を踏まえて、生から死への漸次的な移行の中で終活が時間の面でどのような区切りとして存在するのか検討しながら、現代日本における終活の意味を考察する。

3. フィールドワーク

(1) 3 人の終活カウンセラー

本稿ではフィールドワークやインタビューを通じて、終活カウンセラーの 3 人の女性、A さん、B さん、C さんの活動に注目した。A さんと B さんは講演会を通して「終活」を広めようとしている。C さんは両親と終活をしながら、「親と終活はじめました」(図 3-1)という漫画をブログに載せている。3 人の共通点は、誰かの終活をサポートする側として終活をしていることである。以下(表 2-1)に、対象者の基本的情報をまとめた。また支援を受けて終活をしている C さんの両親の活動も注目した。

表 3-1: 調査対象者の基本情報(筆者作成)

	年齢	終活資格	活動、資格
A さん	60 代	カウンセラー1 級	セミナー講師、メディア出演、
B さん	50 代	終活認定講師	セミナー講師、笑いヨガ、笑い文字
C さん	40 代	カウンセラー1 級	両親と終活、終活の漫画の連載(ブログ)

図 3-1: 「親と終活始めました。」のアイコン

出所: ぴろこ(2021)

(2) 終活カウンセラーの特徴

次にフィールドワークを通して明らかになった終活カウンセラーの特徴を述べる。

①いいイメージを与える工夫

A さんの終活セミナーではセミナーの前後にサックス奏者がバックグラウンドミュージックとして音色を奏でていた。B さんは終活を「笑活」と結びつけ、笑い文字(写真 3-1)を参加者に配っていた。両親と終活を行う C さんの場合、C さんの母親はものを大事にする傾向があり、大事なものだと思うとなかなか捨てる決心ができず、そこで C さんは「～さんが使うからもらっていい？」と工夫して母親を説得し、物を捨てることに成功した。終活カウンセラーは終活に良いイメージを与えるための工夫を施しているが、それは不安を煽るようなことをしないためである。不安要素を強調し、不安に付け入るいわゆる「不安商法」のような方法では、結果として高齢者の意識にはマイナスの影響を及ぼすことになる。そのため終活カウンセラーは終活に「いいイメージを与える工夫」をしていた。

写真 3-1：B さんが描いた笑い文字(B さん作成)

②きっかけを与えるための工夫

調査の中で実際にBさんはセミナーで「このセミナーに参加した時点で終活をしています」と参加者に話していた。Aさん、Bさんともに講演中、参加者に近づいて質問をしたり、○×クイズを行ったり、写真のような脳活と称した、体を動かす体操(写真3-2参照)を行ったりして終活に取り掛かっているという感覚を与えるように工夫していたと考えられる。木村(2019: 109)によると、終活講座などでは達成したことによる喜びが得られる内容、例えばちょっとしたことでも「取り掛かった」と実感を得られる内容が求められているという(木村 2019: 109)。本調査でも同様に、終活カウンセラーは参加者が自己効力感を得られるような工夫をしていたといえる。

写真3-2： 脳活をする様子(筆者撮影)

③専門家への案内人

終活カウンセラーはセミナーの中で様々な項目について説明するが、その内容は専門的ではない。一般社団法人終活カウンセラー協会は、終活カウンセラーとは終活に関する抽象的な「悩み」の中身がどの分野の悩みであるのか、またどの専門家が必要であるのか見極める「シニアのお困りごとの案内人」であると強調している(一般社団法人終活カウンセラー協会 2020)。終活講師は、悩みを持つ高齢者と専門家をつなぐ役割を持つ。実際に調査でも終活カウンセラーがセミナーに専門家を招くこともあっ

た。A さんが行ったセミナーでは葬儀社スタッフが「近年の葬儀事情」について講演をしていた。B さんが行ったセミナーでは司法書士が講演を行っていた。このような専門家をセミナーに招いて、その場で参加者を専門家へと繋げることもあった。

④経験の共有の場の提供

セミナーは仲介の場であることに加えて、講師と参加者の経験共有の場でもある。2020 年 11 月 14 日の座談会(6 名参加)では、以下の様な会話がなされた。参加者 M さんは講師 A さんに「掃除のプロ」と呼ばれていたことから、清掃業に携わっていると推測される。

A さん「どうしたら親に終活を勧められるかな? 」

M さん「テレビで紹介された時に、強調するかな。」

A さん「自分も書いていることを理由に、両親にも書いて欲しいとすすめる。」

M さん「安全に暮らすために、掃除をさせている。その際に『生前整理』という言葉は避けるようにしている。危ないからいらないものを捨てるということで掃除を促す。」

A さん「(話を戻すけど)どうしたら親に終活を勧められるか。文章を書くのが苦手なため、聞き取り自分で書くのもあり。」

M さん「両親の書いた内容を見たくないため、いつ開けて欲しいか表紙に書くように良心に促した。」

A さん「過去の経歴を書くことも重要だね。脳が刺激され、落ち着きを取り戻し、認知症が軽くなる可能性もある。」

また A さんが講演した岩沼市終活セミナーでは、質問コーナーが設けられ以下の 4 つの質問がなされた。1 つ目は「終活掃除というものを聞いたことがあるが、何か」という質問で、生前整理のことであると A さんは回答した。2 つ目は「入れ歯の処分についてで、捨てると何か縁起が悪いのではと思い、なかなか捨てられない」という相談であった。それに対して A さんは、普通に捨てていいという回答をした。3 つ目は「親への終活の勧め方」であった。質問者は生前整理や財産について苦労していると発言していた。それに対して A さんは「友達がね」と切り出し相談すること、自分

でエンディングノートを書いてみることを推奨していた。４つ目は「認知症でもできる終活」についてで、A さんは経歴を書くことが重要だと回答していた。過去の記憶についての話し相手となり、話を聞くことで認知症も進行を防げる。また水を飲むことも重要だと語った。「話しながらお茶を飲んでみては」と結んでいた。

B さんと C さんが講師を務めた自宅セミナーで、「保険」について学んでいる際、参加者 H さん I さんとの間で以下のような会話がなされた。

C さん「問題です。隣のうちの貰い火で自宅が延焼した場合、賠償されますか? 」

B さん「はーい。弁償されると思います。」

C さん「隣の貰い火では賠償されません。」

H さん「オプションをつければ大丈夫じゃないのかな。自分(の家)は自分(の保険)か。泉(区)のマンションで火災が起きた時に、煤がすごかったって聞いた。そういった煤の被害は賠償されるの? 」

C さん「火災保険の類焼特約では賠償されません。ちなみに全損では家財保険が失効されます。」

I さん「賃貸はどうなるの? 」

C さん「賠償されます。2 年更新の火災保険なので、入居日から 2 年経過した時に注意が必要です。契約更新の連絡は自分のもとに来ます。」

I さん「高齢者は注意だよね。年金だけで暮らしている人とかは保険とかにも入れないよね」

B さん「だから高齢者は賃貸しづらいよね。」

C さん「建物にかかっている保険と、家財にかかっている保険は別です。加えて、地震保険は年末調整の控除に入るので、届けが来ている人は入っている証拠です。」

H さん「泉のマンションの火災の時本当にすごかったから気をつけないと。」

以上のように終活セミナーでは、講師だけではなく、参加者の終活に関連する経験が座談会等を通じて共有される。実体験を皆で共有し、その時にどのような気持ちとなったのかを皆に話す。それに対して他の人が別の視点からの意見を提供する。これが

他の人の今後のためになる、という構図である。この個人の経験を共有することを有効的に利用した例として、イギリスの保健省主導で 2002 年に始まった「患者専門家プログラム(The Expert Patients Programme, EPP)」(道信 2020: 27-28)が挙げられる。「患者専門家」という名称には、「病気のことは、医療を提供する人よりも、医療を受ける人の方がよく知っている。患者は自分の病気の専門家である」という意味が込められている(Donaldson 2003)。EPP は自己管理に関する患者支援を行い、長い闘病生活を送っている人々の生活の質を改善することを目的に、患者が一般的な自己管理の技術を習得するための訓練である。EPP は 6 週間で自己管理の技術習得の研修を行う。その際にすでに訓練を受けた先輩の患者が指導者となり、毎週 1 回 2.5 時間の研修会を開催し、参加した患者同士で学び合う(Rogers et al. 2008)。

これまで患者個人の経験は素人の知識(lay knowledge)と言われ、医学の視点からは、それは間違った知識とみなされていた(道重 2020: 27)。しかし、慢性の関節炎を発症した患者の自己管理に EPP が有効であることが証明されたように(Greenhalgh 2009)、EPP は費用対効果が高く有益であることがわかった(Rogers et al. 2008)。

「医学的な根拠が確立されていない」「患者の社会・政治的背景を十分考慮していない」など課題はあるが、EPP は医療分野で有効性を示した。同様に専門性が必要とされず誰にとっても必要な終活では、個人が終活の専門家となって個人の経験を共有することが有効である。他の人にとって将来をイメージするための材料となり、それがもしもの時の備えにつながる。つまり EPP のような個人の経験を共有する場が設けられており、それは共有する側にとっては悩みの解決につながり、共有される側にとっては将来のイメージを立てるための参考になるのである。

(3) 親子二人三脚での終活

上述の通り、筆者の調査では終活を支える側である終活カウンセラーが「良いイメージを与える工夫」「きっかけを与える工夫」「専門家への案内」「経験の共有の場の提供」といった工夫を施すことで、1 人でも多くの人が終活を始め、円滑に進められるように努めていた。一方で、子ども等の支援を受けながら終活をする側の努力も重要である。

上野(2007)によると、これからの高齢者の当事者として、「ケアされる側」の経験や智恵を蓄積する使命がある。ところがその割に、ケアされる側からの発言を見聞きす

ることは少ない(上野 2007: 185)。介護は受ける方が身体的には弱者である。金を払えば経済的な強者に見えるかもしれないが、金とサービスのクオリティは連動しない。それなら自分がキモチよい介護を受けるためには、それなりの作法も技法もいると指摘する(上野 2007: 192-193)。介護と同じように終活においても、支援を受ける側の意識が必要である。

そこで以下では調査対象者であったCさんとその両親の終活に注目し、実際に終活を支える側と支援を受ける側のやりとりを明らかにする。

①C家の基本情報

Cさんの父親は75歳、母親は76歳で、Cさんの兄(50歳代)と一緒に暮らしている。Cさんは両親の自宅から車で10分程度離れたところに住んでいる。Cさんは週1回程度、母の接骨院の通院送迎のために両親宅に通っている。

②親子での終活の特徴

ア)「家族のため」だけではなく「自分のために」

Cさん親子の語りからは、終活を家族のためだけでなく、自分のために進める姿がうかがえる。インタビューの中でCさんの母親が終活を始めた際の気持ちについて以下のように語っていた。

> 母「話を聞いた時には、これも必要なんだねあれも必要なんだねって、大事なことなんだって思いましたね。例えば76歳にもなってるから、何か起きたらばと思うと子ども達がかわいそうだから、元気なうちに勉強したことを実行しなきゃならないなって思いました。」

インタビューではCさんの母親は「終活は勉強」としきりに口にしていた。このことから終活は家族のためという目的だけでなく、終活自体にやりがいを感じて自らの充足感につなげていることが読み取れる。つまりCさんの母親にとって終活とは、他者に迷惑をかけないという意識(「家族のため」)と、自らの力でできることをしたいという自尊心(「自己のため」)から成っていた。

イ)終活が進む／止まる

上述したように、終活を始めるには契機が必要で、また始めたとしても順調に進む

とは限らない。インタビューの中でCさんは終活が進んだ理由について以下のように語っていた。

> Cさん「本人達の興味とか必要性がないと進まないかなって。終活が進んだのは、私が(終活カウンセラー)上級をとる時に、エンディングノートを書く必要があったっていうのもあって、書いて欲しいなっていうのが伝わったところだと思います。」

Cさんの場合、Cさん自身の終活カウンセラー試験が契機となって両親との終活が進み始めた。では他にどのような契機があれば終活を始めるようになるのだろうか。

木村(2019)によると、身近な人の死を経験する等の死の経験の影響がエンディングノート作成、すなわち終活を加速させる要因となる(木村 2019: 57)。筆者の調査では「死の経験の影響」以外にも「仕事上の必要性」や「終活セミナー」が終活を加速させる要因となることがわかった。調査の中で、終活カウンセラーの資格を持つ税理士、司法書士、保険屋等の専門職に就いている人が仕事上の必要性から終活を積極的に学ぶようになって終活を始めるケースがみられた。また「終活セミナー」を契機として終活の必要性を感じて終活を始めるケースもあった。

終活が進むケースがある一方で、終活がストップしてしまうこともある。その要因となるのが、終活をする当事者の判断能力低下、重篤な病等で余命宣告をされることある。セミナーでは以下のような語りがあった。

> 終活のデメリットは認知症や重篤な病気になるとできないこと。余命宣告されれば。自身の見積もりなんかできない。

上記はセミナーでのAさんの発言であるが、実際調査の中でも同様の意見が見られた。Cさんの場合は、母親の認知症の症状が出始めたことで、終活がなかなか進まなくなったという。また認知症ということを母親に自覚させたくないという思いと、認知症を公表したくないという思いから、自身が書いている漫画の内容を変えるようになったと述べた。ただ「これまで通りやれることはなるべく自分でやってもらい、問題が

生じたらサポートする形を取るつもりだ」とCさんは語っていた。C家の場合、母親の認知症の兆候により終活が進みづらくなったが、それでも母親に「できる限り自分でやってもらう」ことを重視しているという。

ウ)「死のデザイン」

以下はCさん、Cさんの両親とのインタビューでエンディングノートの使用方法について質問した時の会話である。

> 父「前に書いたきりでこれから先のことを考えると、エンディングノートを直したいなと思うね。立派なものを残したいわけじゃないのだけど、どうしても思い出して気になることがあるんです。書くことによって自分の一生を色々と思い起こしたり、一生を振り返って、今まで生きてきてきたところを振り返って、いいなと思ったんですよ。そのことによって希望も出てくるしね。過去を振り返って未来をこう考えられるっていうのがいいね。」

Cさん親子との会話で注目したいのは、エンディングノートを通じて過去を整理し、それにより未来の希望が生まれてくるというCさんの父親の語りである。この事例のように終活実践者が終活として未来をイメージしてデザインしていく場面が筆者の調査では多く見られた。

Cさんの父親は終活を通して自分の死後に自分の思い通りの葬儀が行われたり、墓が建ったりするイメージを浮かべていた。死後だけでなく、近い将来の生活のイメージも浮かべていた。

以上のように、終活、特にエンディングノートというツールを通して過去の編纂と未来の人生設計をすることで、今の生活でどう行動していくのか決めていくことがある。この意味で終活は現在の生活の指針となるという点が特徴的である。

4. 終活とは

終活は死の「予測不可能性」に対する手段の1つとして利用されている。自分の死は突然訪れるかもしれないこと、そしてその死後のことを想定して、葬儀の生前契約

をしたり、墓を決めたり、散骨方法を決定したり、といった終活を行って具体的なビジョンの中に自らの死を落とし込むことで、終活を行う人々は死の「予測不可能性」を飼い慣らしているのである。

その上で、就活には儀礼の概念が適用できると考える。「全ての境界は、自然のままでは連続していて切れ目のないところに切れ目をわざと入れた人工的な分断であり、空間に対してばかりでなく時間に対してもこれが当てはまる」(リーチ 1981: 73)。このリーチの考えを援用して終活を儀礼的に捉えてみると、木村(2019)の指摘同様に筆者の調査の中でも直接的に死が語られることはなかったが、人々は終活を行うことで死を想定する、つまり間接的に死に触れることで日常から離れる非日常的な行為をしていると言える。当人の病気や死でもって終活(非日常)は終わりを迎える(図 4-1 参照)。

ただし、儀礼は本来他者の死を想定しており、他者の死による悲しみを乗り越えるために行われていた。つまりこれまでの儀礼は、ジャンケレビッチの言う二人称の死を克服するためのものであったが(ジャンケレビッチ 1978: 24-36)、終活は一人称の死を克服するためのものであるということができる。ここでの二人称とは故人の家族にとっての死であり、一人称とは自分の死である。

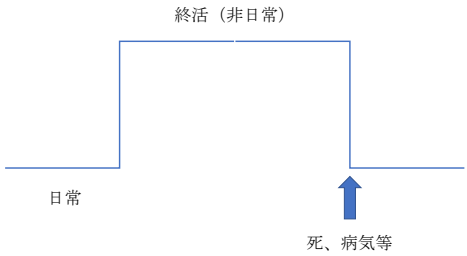


図 4-1: 終活を儀礼として捉えた概念図

福島(1995)によれば、儀礼とは歴史的前例や慣習といった言葉では十全に捉えられない特質を持っており、災害・病気・事故といった生存そのものに関係する不確実性を秩序に変えようとする「生存感覚」を背後に持つものである(福島 1995)。それを踏まえるなら、終活は一人称の死の予測不可能性(不確実性)を飼い慣らす(秩序に変えようとする)能動的行為ということができる。これにより故人となる当人にとって、一人

称の死への恐怖を和らげることができる。ただこの終活は終活カウンセラーのような支援者が身近にいることが重要で、そういった支援者と、終活を実践する当事者が一体となって織りなされる行為ともいうことができる。

5. おわりに

最後に、死を前提にする「終活」という行為がなぜ受け入れられるようになったのか考察することで、終活という行為がどのようなものなのか述べたい。自らの死を想定してその死に対処するという終活が受容されるようになったのは、上述したように「他者に葬られる」ことが当たり前でなくなったことが理由としてある。そのため「終活」と名付けて人々は「先祖のため」「家族のため」といった目的に加えて、「自分のため」といった新たな「現世志向的な」考えから「死に支度」をするようになったと考えられる。そして、この先も終活がますます受容されるようになると、終活カウンセラーのような支援者がいなくとも終活ができるほど、終活をするのが当たり前になる時代となるのではないかという予測を述べて本稿の結びとする。

引用文献

Donaldson, L.

2003　"Expert patients usher in a new era of opportunity for the NHS," *British Journal*, 326: 1279-1280.

福島真人

1995　「儀礼から芸能へ―あるいは見られる身体の構築」 福島真人編 『身体の構築学―社会的学習過程としての身体技法』pp. 66-99、東京: ひつじ書房。

Greenhalgh, T .

2009　"Patient and public involvement in chronic illness: Beyond the expert patient," *British Media Journal*, 338: 629-631.

一般社団法人終活カウンセラー協会

2020　「協会概要」

<https://www.shukatsu-csl.jp/summary>より、2020 年 12 月 24 日取得。

ジャンケレビッチ、ウラジミール
1978 『死』中沢紀雄訳、東京: みすず書房。
経済産業省
2011 「安心と信頼のある『ライフエンディング・ステージ』の創出に向けて 報告書」。
2012 「安心と信頼のある『ライフエンディング・ステージ』の創出に向けた普及啓発に関する研究会 報告書」。
木村由香
2019 「高齢者の終活への取り組みとサクセスフル・エイジング」『横浜国立大学大学院環境情報学府 2019 年度博士課程後期学位論文』。
木村由香・安藤孝敏
2018 「マス・メディアにおける終活のとらえ方とその変遷―テキストマイニングによる新聞記事の内容分析」『技術研究マネジメント』17: 1-19。
リーチ、エドマンド
1981 『文化とコミュニケーション』青木保・宮坂敬造訳、東京: 紀伊國屋書店。
道信良子
2020 『ヘルス・エスノグラフィー医療人類学の質的研究アプローチ』東京: 真興社。
村上興匡
2015「葬送を振り返る」全仏 604 号-606 号。
内閣府
2019 「令和元年版高齢者白書」<https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/01pdf_index.html>より、2021 年 2 月 1 日取得。
ぴろこ
2021 「40 代の終活カウンセラーが『親と終活始めました』」<https://oyatoshukatsu.com>より、2021 年 12 月 2 日取得。

Rogers, A., et al.
2008 “The United Kingdom Expert Patients Programme: Results and Implications from a National Evaluation,” *The Medical Journal of Australia*, 189(10): S21-24.

週刊朝日
2009 「(現代終活事情:19)葬儀、お墓のホンネ座談会　死ぬための準備でなく人生を楽しむために」2009 年 12 月 25 日号: 174-176。

ターナー、ヴィクター
1976 『儀礼の過程』冨倉光雄訳、東京: 新思索社。

上野千鶴子
2007 『おひとりさまの老後』東京: 法研。

うえさきえみ
2019 「元気な終活」<https://uesakiemi.com/2020/09/16/終活資格の人気大手 4 資格を徹底比較【終活アド/>より、2020 年 12 月 24 日取得。

ファン・ヘネップ、アルノルト
2012 『通過儀礼』綾部恒雄、綾部裕子訳 東京: 岩波書店。

ワールドビジネスサテライト
2015 「市場規模 5 億円『終活』フェア」<https://txbiz.tv-tokyo.co.jp/wbs/vod/post_102463/>より、2021 年 1 月 27 日取得。

矢野経済研究所
2015 「葬祭ビジネス市場に関する調査結果 2015」。

横須賀市
2018 「終活情報登録伝達事業—通称「わたしの終活登録」開始について」<https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/3014/syuukatusien/syuukatutouroku.html>より、2022 年 3 月 22 日取得。

東北人類学論壇 Tohoku Anthropological Exchange 21: 84-105(2022)

萌芽論文

骨董市の売買における不確実性
—仙台古民具骨董青空市を事例として

杉山　沙也香

1. はじめに

世界中にある市場は、日常的に必需品を買う場として、現地ならではの雰囲気を味わえる観光地として、また定期的に人々が顔を見合わせ、会話をするコミュニケーションの場として、様々な顔を見せる。中でも、骨董品の置かれる市場と聞くと、一見堅苦しいイメージを持つかもしれない。しかし筆者の調査した宮城県仙台市の骨董市では、高級な骨董品以外にも、思わず手に取って見たくなるような古いおもちゃや、現在では使われていないような品物が置かれる。市場に集う客からは「タイムスリップしたみたい!」「懐かしい～」という声も上がるように、好奇心や冒険心の擽られる空間だ。

本研究では骨董市を事例として、仕入れの様子や売り手と買い手のやり取りに着目し、調査を行った。対象としたフィールドは宮城県仙台市で開かれる仙台古民具骨董青空市である。ここでは経済人類学の分野で研究されてきた市場における不確実性に関する議論を基に、骨董市における不確実の所在とその対処方法について記述する。骨董品は規格化された商品と比べてその質や情報に関して不確実な部分が多い。その不確実性が売買の仕方にどのように影響しているのか、市場の不確実性を目の前にして売り手と買い手はどのような行動をとるのかということを検討した。

2. 理論的背景

人類学において、市場は新古典派経済学的[1]な抽象化された市場(しじょう)論ではな

[1] 経済学における新古典派主義では、各自の利益関心に基づき、自己の利益を最大化する

く、人々が売買を行う場としての市場(いちば)として研究され、人々の間の具体的な「やりとり(transaction)」が明らかにされてきた(関本 2001)。

先行研究では、売り手と買い手の探索行動や信頼関係の構築、価格の交渉や決定、売り手同士の助け合い、商売戦術などに焦点が当てられてきた(Geertz 1978; 田村 2009; 小川 2011; 大坪 2013)。特定の市場において集約的に研究されたそれらの事例は一般化され、新古典派主義のモデルや、近代工業社会での売買[2]と区別することで議論されてきた(関本 2001)。

特に市場における商品の質と情報に関する不確実性はやり取りを語る上での前提とされ、ギアツによるバザール経済論はその代表的なものである。そこでは規格化されていない商品が置かれることで市場に不確実性が生じ、売り手と買い手の間には情報の不均衡が生まれるということが指摘されている。その対処方法としては顧客関係を築く(ギアツ 2002; ベスター 2007)、もしくはあえてそれを回避するといった様々な行動が報告されている(田村 2009; 大坪 2017)。

これまで議論されてきたように、売り手に比べて買い手は情報を得にくいために情報の非対称性が生じ、不利益を被るリスクが高い存在として記述されてきた。しかし売り手が情報強者として優位に立つという前提はすべての売買において言える訳ではない。例えば田村(2009)と大坪(2017)の述べたように、客は複数の売り手と緩やかに関係を持つことで取引相手を吟味し、自由かつ主体的に取引を行おうとすることも可能だ。加えて、大坪(2017)の述べたように、客が来なければ、もしくは信用されなければ売り手は取引をする事すらもできないため、不確実性をどのように対処するかということは売り手にとっても重大な問題である。そのため、本稿ではそれぞれの個人がリスクをどのように捉え対処する傾向があるのかといった点にも着目し、骨董品の売買における売り手と買い手のやり取りを考察する。

ために合理的に行動する「合理的経済人」をモデルとする。経済的な行為は社会や文化とは切り離され、取引主体の考えや行動は考慮されることはない。人間を経済合理的な存在としてみなすことで市場のメカニズムの分析やモデル化は単純化されてきた(市野沢 2003)。

[2] 近代工業社会での売買は「定価販売、商人と消費者の明確な区別、商品の規格化と製造者名・販売者名のブランド化、大量の広告、商品の種類・質・価格についての大量で誰もがアクセスできる情報などの存在によって特徴づけられる」(関本 2001)。

3. 仙台古民具骨董青空市

(1) フィールドの概要

仙台古民具骨董青空市は、宮城県仙台市にある仙台東照宮の境内で開催される骨董市だ。毎月第 4 日曜日の朝 7 時頃から 15 時頃にかけて開催され、東北の各地から集まった業者 15～20 店舗が参加する。主催者によると、この骨董市は東北最古のもので、昭和 59(1984)年に始まったという。仙台東照宮の社務所の職員によると、この骨董市は全国でも 5、6 番目の歴史があり、現在の主催者の父親が仙台東照宮に話を持ちかけたことを契機に開催が決まったという。

店主は皆、古物商許可証という中古品を売買するための許可証を持った骨董商である。参加するには主催者の許可が必要で、既に骨董市に参加している同業者からの紹介で始めたという人も多い。出店する店は毎回ほぼ同じであるが、月によっては休む店もあり、数か月に一度は新規出店も見られる。客の年齢層は全体的に高いが、若い年齢層の客も見かける。男女の偏りは特に見られない。客はゆったりとした調子で見て回って興味のある物を探し、「せっかくだからお参り行こうか」と言い、多くの客が仙台東照宮へ参拝に行く。

(2) 一日の流れ

店主らは朝 6 時ごろにやって来て、決められた場所に机や商品の入った箱を運ぶ。開催場所は屋外のため、日除け・雨除けのためにテントが用いられる事もある。「おはようございます」と互いに挨拶を交わし、それぞれテントや机、椅子などを組み立て、商品を並べるなど準備をする。準備が整ったかどうかに関わらず客が来れば売買が始まり、朝早くから来る常連客は、店主らが準備をしているそばで商品を確認する。中には飛びつくように商品をあさり、目星を付けた物を取られないようにと脇によけて置いている客もいる。8 時近くになると徐々に人が増え、9 時、10 時台に一番人が集まる。12 時を過ぎると客足は落ち着き、店主らはそれぞれのタイミングで昼食休憩をとる。終了時間は明確には決まっておらず、店主は「まあ今日はこんなもんか」などと言いながら各々片づけを始める。早い場合は 12 時過ぎに店じまいを始める所もある。14 時にはほとんどの店が片付けを始め、15 時頃には完全に撤退する。

(3) 商品

扱うもののジャンルは限定されておらず、日本の古民具など生活全般に関わる様々なものが置かれる。小さいものであれば写真や絵葉書、湯呑や茶碗、本などがあり、昔の玩具や容器、着物も多数ある。比較的大きなものとしては、たんすや椅子などの家具、壺やかご、額に入った絵などがある。時に、こけしや赤べこ、ナマハゲの人形など、東北地方の物もあり、季節によって例えば年末であれば干支の置物、夏には古いかき氷機なども置かれる。商品のほとんどは日本のものであるが、西洋のアンティークを扱う店も 1 軒ある。

状態としてはある程度整ったものが多いが、中には傷が付いていて、使い古されたようなものがある。店主の山田さん[3]は、綺麗にしすぎると味がなくなってしまうため「そこそこ綺麗にしてある」と言った。値段に関しては比較的安価なものが多く、1000 円以下で買える商品も頻繁に目にする。高価なものでは 1 冊 80 万円の本を見かけたことがある。

商品のほとんどはカバーの無い状態で置かれる。並べ方は、机に並べる、敷物の上に並べるなど店によって違う。種類ごとまとめていることもあれば、均一のものをまとめて置いたり、小物をまとめて箱に入れていたりする。値段は書かれているものと書かれていないものがある。値段が表示されている例としては、商品に値札シールが貼られているもの、「300 円均一」などと紙に書いて貼り出しているものがある。着物を扱う店では布の端切れをまとめ買いすることができ、「布詰め放題　1 袋　1000 円」と書かれた紙が貼られていた。

4. 仕入れの様子と不確実性の所在

(1) 仕入れの方法

骨董市に置かれる商品の仕入れ方法は、客からの買い取り、店主による購入、業者間で開かれる競り市場での購入など多岐に渡る。毎回特定の仕入れ先から決まったものを仕入れるというような仕入れの仕方とは違い、何を、どのくらいの量で、いくら

[3] 本稿でとりあげる人物はプライバシーを考慮し、仮名を用いる。店主の山田さんは夫婦で店を運営しているため、山田さんの妻に関しては山田さん(妻)と表記する。

で仕入れるといった事は決まっていない。生産した個人や企業から直接に卸されることはなく、一度購入して使用していた、もしくは保管していた個人から仕入れることがほとんどである。

買い取りに出向く先は、個人宅や廃業した店などであるという。依頼人は、コレクターだけではなく、親族を亡くして遺品の整理をしている人、終活をしている人、家やたたんだ店の整理をしている人が多いという。取引に関する店主と筆者の会話の中で以下のようなやりとりがあった。

(山菜取りに使うようなかごは骨董市でよく売られているものだが、筆者はかごの一部分が色鮮やかな紐で編まれているものを発見し、店主に尋ねた。)
筆者「これってもとからカラフルなものですか?」
店主「いや、それたぶん補修して使ってたんじゃないかな。秋田のおばあさんが山菜とりに使っていて、『もう歩かないから持って行って良いよ』って。『山歩きしないから』って」

このように、不要になったものを引き取り、販売しているのだ。また他の店においても個人宅から引き取ったものが売られていた。例えば、店主の川本さんの店において、外国の切手が小さなケースで入れられ、カードのようになったものが売られていた。これらは個人の家から出た物だというが、実際に使用できた切手なのかも分からないという。

川本さん「コレクションで集めていたのか、こういう感じで(ケースに入れられて)もう売っていたのか分からないけれども、うちはこうやってまとめて買うから」
筆者「すごい量ですね」
川本さん「そうなんだよ。これあと何箱かあるから」
筆者「え、これも個人のお宅からですか」
川本さん「そう」
川本さん「その人が何で買ったかは分からないよ。コレクションかなーっていう」

通常、このような買い取りは連絡が来るまで待つ必要があるが、骨董市で出店をしていると声をかけられることがあるという。店主の山田さんによると、客から「あそこのうちのおばあちゃんもいらないって言ってた」というような情報を得ることもあり、買い取りの間口を広げることができるため「助かる」という。

さらに店主らが仕入れ先として頻繁に利用するものとしては業者間の市場が挙げられる。業者間の市場とは、骨董品などの中古品を専門として扱う業者が集い、持ち寄ったものを競りにかけて売買を行う市場のことである。全国どの地域にもあるもので、毎週各地で開催されている。業者間の市場は骨董品の取引に加え、流行や相場などを知る情報収集の場としても利用されている。

(2) 商品の情報

仕入れるものの情報に関して、店主は個人情報に配慮しながらも、できる範囲で情報を得ている。例えばある店主は「1 個ずつ、ああこれ、あそこから持ってきたやつだ」というように覚えており、それぞれの買い取った値段も記憶しているという。筆者が「お客さんから買い取るときは、どこで手に入れたものなのか、どこにあったものなのかということは聞くのですか?」と問うと、「詳しくは聞かないけど、昔からうちにあるものなのですか、どこから持ってきたものなのですか、そういうのは一応聞いたりはするよね」「失礼のない程度のあれもあるし」と説明していた。

業者間市場への出品に関しても、参加者は相場や売れるものの情報をつかむことはできるが、個々の品物に関する詳細やその来歴が詳細に明らかにされることはない。特に業者間市場の競りでは一つの商品にかける時間は数秒から数分ほどしかなく、商品について詳細に説明、吟味されることはないため、断片的な情報しか集まらないと言える。そのため、参加者が小売りを行う際には各々の判断で説明が付与される。

(3) 業者間で共有された「相場」と値段の不確実性

仕入れ先やその情報に関する不確実性が高い一方で、業者間市場の競りの際、参加者は「昔こういうの売れたんだけどねー」「○○円で売ろう」などと発言する。業者間市場では商品がどのくらいの値段で売れるのか、他の参加者がどのような物を仕入れて売ろうとしているのか、ということについて参加者全員が知ることが可能となっているのだ。このようにして共有された値段は「相場」として店主が値段を付ける際の大まかな基準となっている。骨董市は不確実性の大きい市場ではあるが、業者間で情報

の共有がなされることで、少なくとも価格の面ではある程度の安定性があるという見方もできる。しかし、後述するように、結局は値引きの交渉次第では変わりうるという点で価格に関しても不確実性がある。客は顔見知りになったり、購入したいという意思を見せたりすることで安く購入ができることがあるというように、予測できないあいまいさが存在するのだ。

(4) 並べられる商品

骨董市に出店されるものは、店主がその時々の天候や人手、常連客の好みを考えた上で決める。例えば、夏の日差しの強い日には、「瀬戸物は熱くて触れないからあまりもって来なかった」という店主がいた。また店主らは探りを入れながら状況を見極めるが、それは外れることもあり、山田さんは「未だに何を持っていけば良いかわからない」と言った。さらに、中には珍しいものが手に入ったため「とりあえず持って来た」という店主もいて、気分によって持ってくるものを変えることもあるのだと分かる。

商品を売るために特に重要視されるのが、客の傾向を知ることだ。店主の木下さんは常に自分でアンテナを立て、「あーちょっとこれ売れなくなったな、と思ったらもう仕入れるのをやめたり」「あーこれ、なんだ売れるんだ、と思えばまた仕入れましょうとなる」と説明した。店主の川本さんも客の様子を見ながら判断すると言い、以下のように話す。

筆者「大量に仕入れたものを持ってくる時の選ぶ基準は?」
川本さん「まだ 2 回目だから分からないんだよね。とりあえずランダムに持ってきて、客層つかむしかないかな。場所によって違うもんね」
筆者「仙台はどんなものが人気ですか?」
川本さん「2 回目だから何とも言えないんだけれども、貴金属は動くね(売れる)。あと絵は動くね、まあこれはどこでも動くけれども。あとやっぱ前掛け」(と言いながら自身が着用している前掛けを示した)

川本さんは何が売れたのかを把握して、次に持ってくるものを決めている。この日、川本さんは売れると発言していた貴金属や絵、前掛けを始め、人形、着物、レコード、

ガラス、かご、写真、絵葉書、アクセサリー、鉄砲の形のおもちゃ、小さな箪笥、ケースに入った切手など様々なジャンルのものを置いていた。また、この次の月には絵画を大量に店先に置いていた。

このように大まかに客の好みをつかむことはできるが、長年、骨董市に出品する店主にとっても何を売るかを判断するのは難しい。20 年前から骨董市に参加している店主の前橋さんは「その時その時の売れそうなものを出している」と言い、続けて筆者と以下のように会話をした。

筆者「売れるものとは?」
前橋さん「先月はお茶の茶碗が売れた、だから今月はまた足して持ってきた」
「でもなかなか…(売れない)。毎月同じってわけにはいかないですよね」
筆者「何が売れるのかを見極めるのは難しいですよね」「季節にもよりますしね」
前橋さん「なかなか難しい。品ぞろえを集めるのも難しい」

このように、前の月に売れていたとしても、再び同じものが売れるとは限らないのだ。店主は狙いをつけて品物を持ってくるが、当たり外れが激しいということが分かる。長年骨董市に参加している前橋さんが「なかなか難しい」と述べているように、売れるものを持ってくることは困難を伴う。骨董市は客にとって商品の不確実性が高い市場であるが、店主にとっても客が何を購入するかという事を予測することは一筋縄ではいかないのだ。

5. 売買の様子

(1) 商品の品定めと情報のやり取り

商品に関しての不確実性が高い中で、客は自由に商品を手に取って見比べ、品質や値段、使い道について自由に意見を交わす。骨董市の商品は一点ものが多いため、品定めの際には商品それぞれの特性に注目する必要があり、傷や汚れの具合も自ら確認する必要がある。品定めをする際、多くの客は目を凝らしてじっと商品を見つめ、手に取って商品の裏を見ては、近づけて見たり、触って感触や素材を確かめたりする。

ふたや引き出しがあれは開ける、風鈴やおもちゃなど音が鳴るものであれば鳴らしてみるといったように、様々な方法で品定めをする。以下は、ある女性客が商品を確認する様子である。

中年の女性客は、工具が置いてある店の前でしゃがみ、一つ一つ手に取って遠目で見たり、近くでじっと眺めたりして、何かを考えている様子でくまなく確認している。(2019 年 5 月 26 日のフィールドワークより)

この客は工具が複数入れられた箱から気になったものを引き出して、時間をかけて確認していた。店先には「商品に触れないで」という注意書きもなく、直接手にとれるため、客は容易に商品を確認することができる。

情報が不足していると考えた場合には、客は店主に情報を求める。店主は品質や素材、値段、生産場所、使用法などに関してできるだけ答えようとする。使い方のアドバイスをしたり、実際に商品を動かして見せたりすることもある。商品の扱い方を知らない客は熱心に情報を聞き出そうとする傾向にあり、店主は丁寧にそれに応えることが多い。そして商品の情報と共に「珍しい柄だよ」「思った時に買ったほうがいい」「買ってくださいよ～」などと購入を催促するような発言することもある。店主の山田さんは、商品について尋ねる客に対して、以下のように手入れの仕方を説明していた。

(女性客は漆塗のお椀を前にして立ち、店主の山田さんに話かけた)
女性客「これは本物の漆?」
山田さん「もちろん」「5 つありますよ」
女性客「実用で使える?」
山田さん「はい、使った後はきちんと洗って乾かして手入れおく必要はあります」
(それを聞いた女性客はうなずきながら納得した様子で商品を見ていた)

骨董市のほとんどの商品には取扱説明書がついていないため、知識がない客にとって店主から得た情報は購入後に使用する際の参考になる。しかし中には店主ですら情

報が分からないものも存在する。そのような場合、以下のように客が店主の情報を補うこともある。

(中高年の男性客が店に立ち寄り、店主に話しかけた)
客「先月、フレンチカップあったでしょ」
店主「ああ、ここにあるよ」(色鮮なティーカップを箱からとりだす)
客「それね、イタリアだって」
店主「ああそういわれれば…」(カップを見つめながら納得している様子を見せる)
客「フェイスブックで見てもらったの。専門の人に。イタリアだって」
店主「へー」
客「イタリアの新しいものだって」
店主「へぇ。イタリアの業者がフランスに持っていったんじゃない?」

ここで店主は、ティーカップをフレンチカップ(フランス産のカップ)として販売していて、その間違いを指摘されていたと考えられる。しかし店主は客に指摘されたことに関し、焦る様子や詫びる様子はなく、新たな知識を得て納得している様子だった。またその際に「自身が販売しているものをきちんと把握していない」という理由で店主が咎められることはない。このように店主と客はお互いに情報を補い合って売買をすることから、必ずしも売り手が優位になってやり取りが行われるわけではないということが分かる。

店主によると、このような状況はよくあることだという。山田さんは、「客は欲しいものに関してはしっかりと研究している」「お客さんの方が詳しい。分かっている人は本当に多い」と発言した。しかし、そのような詳しさは自分で判断する必要があり、客の情報が信用できるかどうかを判断するために、自分たちも知識をつけるように努力しているという。実際「見る目がないとやっていけない」「勉強しなければついていけない」と語る店主も多く、知識や経験を積んで目利き力を高めることの重要性が分かる。加えて、情報を客と共有するにあたり山田さんの妻は「ただ、骨董市に来る人はあらかた最初から骨董が好きな人が多いから、そこらへんは阿吽(の呼吸)というか、分かった上で」と話した。このように骨董市では知識を持った店主と客が互いに共感、

理解しあいながら売買を進めていくという姿勢が見て取れる。

(2) 様々な使用法

骨董市では商品について多くの知識を持つ客がいると同時に、様々な目的で商品を購入する客がいる。意図しない用途で用いられる可能性があることを店主も把握していて、その上で様々な商品を用意している。例えば、骨董市で売られていたガラス製の大きな水色の浮き球は本来、漁で使われるものである。これを販売していた店主によると、現在はより軽いプラスチックのものがあるためにガラス製のものは漁で使われなくなり、居酒屋の店主などが飾りとして買っていくという。また、ある店には、赤茶色の土器の破片が木の箱に入れられていた。木の箱には「土器…○○」と発見された住所が書いてあった。以下は筆者が店主にその商品の買い取りの経緯を聞いた際の発言である。

> これは個人宅でね。多分、いま家を建てるのに、調査しないと駄目になったでしょ。(中略)自宅かどうかは分からないけれども、個人宅で買い取った中に(土器が)あったから、一応、個人情報としてそこまでは聞かない。どうやって出てきたんですかとかは聞かない。趣味で集めたのか何なのかは分からないけれども、一応そのお宅で買い取りの中にあったやつ。

店主は、土器を持っていた客が家を建てた際に自宅の敷地から出てきたものなのではないかと予測していて、プライバシーに配慮をして詳細は聞き出さなかったという。また、この店主は買い取りの経緯に関して以下のように筆者と会話を交わした。

> 筆者「分からないものもそのまま持ってきている?」
> 店主「うん、ほしい人は、本当に土器だけがほしい人と、こういう産地があってほしい人っているから、それはもうお客さんにお任せしている」
> 筆者「それぞれの求めているものがあるんですね」
> 店主「ここのお客さんに任せるしかないよな。『土器探しています』という感じであれば安いと思うし」

そのような情報がよくわからないものを骨董市で売る際には、店主が分からないもの

は「分からないです」と正直に伝え、客の判断に任せているという。

(3) 値段の決定

骨董市の売買において、値引き交渉は骨董市の慣習として根付いており、客から値引きを提案する事もあれば店主から提案することもある。交渉の際には、客は店に複数回通うことで値引きを得やすくなる傾向があり、また悩む素振りを見せるなど、購入しそうな様子を見せると店主は値引きを提案してくることがある。

以下は、客から頼まれたものではなく店主の好意によって値引きがされていた例である。ここでは、筆者が店主の川本さんと話していた時に、50-60 代で高身長の欧米人とみられる男性が片言の日本語で話しかけてきた。

男性客「すみません」「タンポポの絵、いくらですか？」
川本さん「2000 円」
男性客「上の中国の(絵は)?」
川本さん「3000 円。2 つで 4000 円でもいいよ」
(男性客は悩んでいる様子を見せた)
川本さん「先月も買ってもらっているから、ディスカウントするから」
男性客「ははは」(と笑った)
川本さん「ふたつ持っていく?」
男性客「もう 1 回考える」
川本さん「うん」

その後、2 人は絵の方に近づいて行き、絵について話し始めた。川本さんの「両方で 4000 円」「35(3500 円)が限界なの?」という声が聞こえてきたことから、男性客が 3500 円で販売してほしいという提案をしてきたと考えられる。結局、取引価格は 3500 円で決定された。さらに、川本さんは「ほしいのあげるよ」といって貴金属品をプレゼントしていた。川本さん「これもいいよ。2 つ持って行って」とさらにおまけをし、男性客は「ありがとう」と言って立ち去った。筆者が「さっきおまけしたものは何ですか？」と川本さんに問うと、以下のように答えた。

川本さん「本物の貴金属だけども、先月ここら辺(貴金属などの小物)を大量に買っていってくれたから。一応やっぱりお客さんの顔は覚えておいて、そういう感じにやっておけば次につながるじゃん。俺も段ボール一箱で買っているから、あげたりとかサービスできる。あっちの方(絵画)は値引きできないけれども、こっち(段ボールに入れられた小物)だったら(値引きできる)。中にはオパールとか3000円くらいするけれどもうちは500円でやっていて…」

筆者「結構安い…」

川本さん「先月も結構売ったし、今日も何人か買ってくれたから。当たりはずれがあるから。それで選ばせる。そうすると来月も来るから。」「何が入っているか分からない楽しみさで来てもらえれば…」

このように店主は複数の商品に対して値引きを提案することもある。また客が悩んでいる様子を見せた際には、以前にも購入してくれていたということを理由に、値引きを提案した。次回の訪問の期待も込めて値引きやサービスを行っているのだ。筆者も顔見知りなった店主から値引きのサービスをされた経験があることから、複数回店に通うことで値引きを得やすくなるということが分かる。また、絵画などは値引きできないが、段ボールで丸ごと仕入れたものは値引きができるといったように、店主はどれをどのくらい値引きが可能かということを考えながら交渉をしている。

値引き交渉は頻繁に用いられるが、骨董市の商品は多くのものに値札シールが付けられているなど、店主によっておおよその値段があらかじめ付けられている。その値段は相場価格や仕入れの価格を基に決められており、それを基準として店主は値段の調整を行っている。例えば木下さんは「このくらいの時代のもので、この形で、この図柄であったらこのくらいだろうというのは長年の経験でわかる」と相場価格は瞬時に判断できると述べ「魚市場で魚の脂の乗り具合を見て、これはいくらだと一瞬で判断するのと同じだ」と説明した。例として、木下さんは自身の店に売られていた器を例に取り、「もしこれが、今19000円と付けているが、歪んでいたら15000円になる、もし傷があったら3000円になってしまう」と述べた。さらに、この器には竜のような動物が描かれているが、ここにウサギが描かれていた場合、倍の値段がするという。ウサギの柄は人気があり、それだけで値段が上がるというのだ。このような値段の差

に関し、骨董好きの客は多くの情報を持っているといい、以下のように説明した。

> 分かっているものに関しては、時代も、値段も今の値段もお客さんは知っている。今の相場が 5000 円のものに 8000 円付けていたら、その人は買わない。欲しくても買わない。ところが 3000 円であればすぐに売れる。だからお客さんの方が知っているんですよ、今は。

このように、商品は年代、形、図柄、状態などによって値段が変化し、詳しい客はそれを把握している。また店主の山田さんによれば、商品の雰囲気、出所、手作りのものかどうかによっても値段は変わり、さらに希少性[4]によっても値段は変動するという。木下さんは「値段に関してはシビアな世界だ」「この世界は値段が高い・安いというのは非常にピリピリしている」と言い、自身の知らない世界のものに関しては検討がつかないため手を出さない、とも述べた。このように骨董市の商品は、相場という需要と供給の調整から合理的な判断によって導き出された値を基準としている一方で、相対での交渉や店主の気分、個人的な都合によって値段は上下するなど、あいまいさも大いに含んでいる。

(4) 客の事例

筆者は骨董市での参与観察に加えて、店に通う客へのインタビュー調査も行った。客の 1 人である大木さんははがきや古銭、レコードやカメラなどを収集していて、実際に使用する以外にも、昔を知るための資料として楽しんでいる。特に古銭においては様々な年代の硬貨を集めることによって、その表面に記された表記やデザインなど時代による違いを知り、はがきにおいては謎解きのような感覚で写真の風景や文字の解読をして楽しんでいるという。

例えば、大木さんがコレクションしている軍事郵便のはがきの下部には「一一四五」という数字が書かれている。この数字は符号のようなもので、これによって宛先の人物の所属や、チーム、部隊を知ることができるという。大木さんははがきの購入後、インターネットに対応表が公開されているのを偶然発見し、調べてみたところ、「一一」

[4] 例えば、骨董市では現在は流通していないデザインのキャラメルの箱が 1 枚 1000 円で売られていたり、過去のカルピスのポスターが描かれた 10 種類のポストカードは、10 枚で 1 万円の値が付けられていたりしていた。

がサイパン、「四五」が部隊の数字だという事が分かったという。売買において「何なのか分からない」ということは通常はリスクだとみなされるが、謎解きのようにて楽しんでいる様子から分かるように、客にとっては不確実性も楽しみの一つとなりうる。つまり客は不確実な骨董市の状況や商品について必ずしも「リスク」とは考えていないのだ。

また大木さんは、過去に購入した中古のカメラのシャッターが購入後してしばらくして使えなくなってしまったことがあるという。修理に出すと何万円もかかるため、そこはあきらめて、そのカメラについていたレンズが使用できる別のカメラを購入したという。この経験から、購入の際には、使えるものなのかどうか確認のためにお店の人に聞くと言い、以下のように述べた。

> カメラだったら、「このカメラってちゃんと使えます？」とか聞いて、「あー、この前だれだれが使っていたよ、この前使ってみて大丈夫だったよ」というのがあれば、それは安心して買えますし、「ちょっと分かんねーな、まあ勉強だと思って買ってみて」とかって、1000 円くらいで安く売ってくれることもあって。それでちゃんと使えたら万歳みたいな感じなんで。それなりに危ない橋はわたらないようにしています。

このように、店主から使えるものだという情報が得ることができれば「安心だ」としつつ、確証が得られなくとも、半信半疑で購入してみることもあるようだ。

他方で大木さんは骨董市での買い物の際に、間違った情報を得てしまったこともあるという。ある時、骨董市で幕末の頃の鉄砲の弾が売り出されていて、大木さんは店の人に「ゲベール銃の弾[5]だ」と言われて買ったが、疑問に思い調べた所、その情報が間違っているのが分かったという。大木さんは「誰か知っているかな」と思いながら Twitter に投稿してみたところ、反応した人が「プリチェット弾」だと教えてくれたという。販売していた店主は間違った情報を大木さんに与えていたということになるが、大木さんは「まあ、専門の方ではないと思うんですけど」と寛容な姿勢を取り、間違っていたことを非難する様子は見られなかった。

---

5 ゲベール銃の弾とプリチェット弾は形が異なり、ゲベール銃の弾は丸い形だという。

以上の大木さんの売買の経験を例にとると、客は自らの目利き力と店主から得られる情報を頼りにして判断しながら、時に「試しに買ってみる」という「賭け」を繰り返しているということが分かる。情報に関しては店主を信頼しながらも、それのみに依存せず、自ら SNS やインターネットなど活用して調べる。それによって購入した商品の本来の情報が明らかになることもあるのだ。さらに店主らが「お客さんの方が詳しい」と言っていたように、客は自ら購入して試したり、調べたりする過程を通じて時に「店主より詳しい客」になっていく。

(5) 顧客関係

気楽な雰囲気で売買が行われる骨董市では、天気の話を始めとした雑談や冗談を交えた会話が非常に気軽に行われる。何度も骨董市に行くことで顔見知りになり、値引きやおまけをつけてもらえる可能性と情報を多く手に入れられる可能性が高くなる。しかし、店主と客が毎回特定の店から購入するといったような固定的な顧客関係を築いているとは言い難い。それは、品ぞろえは毎回同じではないため、必ず購入するという事は難しいからだ。例えば、アンティーク品を扱う店を訪れた女性客は、一通り商品を見ると「ごめんなさい今日は買わないです」と言って軽く頭を下げ、去って行った。「今日は」と言っていたことから、過去にもこの店を訪れ、商品を購入したことがある客だと考えられる。しかし気に入ったものが無ければ、買わないで立ち去るのだ。

顧客関係の緩やかさを示す事例は他にもある。筆者はある店で刀剣の鍔が複数個売られているのを見つけた。店主が鍔の箱の蓋を閉め、片づけを始めた頃、筆者は以下のように質問をした。

筆者「何か売れたりしたんですか」

店主「持ってきてくれって懇願されたから、先月 2 か月にわたって…売れるのかなこんなもの、と思ってたら…その言った人が来ねぇ!」

筆者「えーそんなぁ…その人のために持ってきたような(ものなのに)…」

店主「懇願されたから持ってきたけど、1 つも売れねえよ」

写真: 骨董市で売られる鍔(2021 年 7 月 25 日筆者撮影)

店主は本当に売れるのか半信半疑であったが、客に頼まれたため持ってきたという。しかし、結果としてその日はそれを頼んでいた当人は訪れなかった。上の写真を見て分かるように、店主は十数枚の鍔を持ってきていたが、その他の客に売れることもなく、嘆いていた。このように、客が来ないことも頻繁にあることだといい、山田さん(妻)も「そういう(「持ってきて」と言う)お客さんって来ないんだよ」「不思議と来ない」と述べていた。実際、骨董市に毎月来る人は大勢いるが、そういう人はあまり買わず、「今日は 2000 円」などと買う金額を決めている人も多いという。実際、前節で紹介した大木さんも、購入金額を大まかに決めて買い物をしていると述べていた。山田さん(妻)によれば、むしろ、通りすがりの人の方が思い切りよく買っていく場合があるというが、そのような人は、その後も骨董市に来るとは限らない。このように店主と顔見知りになっていても、客は自分の欲しいと思ったものを欲しいときに購入するのであり、必ずしも毎回購入していくとは限らない。店主はそのような気まぐれな客の行動に振り回されることもある。山田さん(妻)は「あそこの骨董市は、半分お話ししに行っているようなもんだね。おじいちゃんおばあちゃんの話相手」と述べ、山田さんもそれに賛同して「大体どこもそうだよね。絶対今日は売ってやる、目標に行くまで頑張るとか、そういう人はいない。ゆるいから」と述べた。

6. 考察

以上の売買の様子をもとに、改めて骨董市における不確実性について考察を行う。

骨董市では特定の商品を安定して仕入れるといったことはなく、いつどこで何を仕入れられるか分からないという点から不確実性が発生している。また、仕入れられた骨董品はその材質などの特性、機能性、どこでどのように生産され、扱われてきたかという情報についても不明確なことが多い。さらに値段についても値引き次第では変動しうるといった点で不確実性が存在する。量販店などで売られる工業製品は機能や品質が標準化され、定価によって値段が定められ、生産地などの流通経路も明らかになっているものが多い。これらの特徴と比較すると骨董市では相対的に不確実性が高いと言える。

骨董市での上記のような不確実性は、店主と客の双方にリスクをもたらす。店主にとっては、品ぞろえが安定しないため、何をどのくらい仕入れて、誰にどのくらいで売れるかといったことを計画しづらい。情報が曖昧な商品もあるため、商品をきちんと見る目がなければ、不良品や偽物を売ってしまう可能性もある。また値引き交渉が可能なため、一度定めた値段で全てのものが売れるとは限らず、利益が少なくなるリスクがある。客にとっては、どこに何が置かれるかは分からず、特定のものを探し出すことは難しい。何らかの商品を見つけたとしても、その品質や情報は曖昧なため、不良品や偽物を購入してしまうリスクがある。このように不確実性が様々な点で見られる骨董市においては、店主と客はどちらも不利益を被る可能性があり、先行研究で指摘されてきた「情報を多く持つ売り手が優位」というような差は見られない。

骨董市における不確実性に対処するためには、まず自らの目利き力が重要だ。店主らは仕入れと販売の際には、見る目がないとやっていけない、勉強しなければついていけないと語っていた。長年経験を積んだ店主が、商品を見れば大体の値段の予想がつくと述べていたことからも､商品を自らの手で売買していく経験の重要性が分かる。一方の客は、骨董市に置かれる商品を自らが手に取り、品定めをすることができる。インターネットにおける売買では実物を見ることができず、写真の映り方によっては見た目が変わることがある。しかし、骨董市ではその場で実物を見ることができ、少なくともその見た目のデザインや柄、材質、重さなどについては判断することができ

る。また店主と同様、それまでの買い物の経験と自ら調べるという行為を通じて目利き力を高めていく。

店主と客の双方による情報共有によっても不確実性は緩和されることがある。売買の場面で見られたように、不足する情報に対しては店主がその使用法や作られた年代、場所などの情報を提供することがある。店主は分からないものは正直に「分からない」と言うこともあり、客はそれを受け入れる。そして同時に店主の知らない情報を客から提示することがあり、相互の情報共有が行われている事が分かる。これによって売り手と買い手の間の情報量の格差も少なくなる。

加えて、骨董市においては固定的な関係というよりは、緩やかに結ばれた顧客関係が見られた。これは、不確実性に対処するために顧客関係を結ぶことの重要性を論じた先行研究(ギアツ 2002; ベスター 2007)とは異なる点である。店主は特定の客から頼まれたものを持ってくるとともに、売買の際には次回の購入を期待して値引きをする。このようにしてある程度客の傾向を予測するとともに、店へのリピーターを増やす。客は店主と顔見知りになることで値段の交渉を行いやすくなり、店主にほしいものをリクエストすることができる。しかし、必ず特定の店で購入するといった固定的な関係ではない。店主は必ずしも品ぞろえを揃えることはできず、客は必ずしも市に来て購入するということも期待できない。ここではお互いの気まぐれさを許容しあい、「今日は良いものないですよ」「今日は買わないです、ごめんなさい」と言っても関係が悪化する事はない。これは先行研究の一例として挙げた田村(2009)が、不確実性が大きい中でも客が自由にかつ主体的に商品を選ぶために固定的な顧客関係を回避する傾向があると述べていたことと類似している。つまり、ここでいう緩やかな顧客関係とは、店主が何かいいものを持ってくるかもしれない、値引きをしてくれるかもしれない、もしくは客が再び訪れて買ってくれるかもしれないということをお互いに期待しながら、期待通りにいかない可能性があることを了承している流動的な関係である。そのため、売り手は様々なジャンルの商品を持って来る一方で客は複数の店を見て回る。

骨董市に集う人々は市場における不確実性を楽しんでいる様子も見られた。店主や客は「これはなんだろうね」と発言しながら様々な用途を考え、骨董品を実用品としてだけでなく、資料として、観賞用として楽しんでいた。ここでは商品の不確実性を

そのままにして、あえて制限しない事で自由な使い道を連想させるのだ。また「分からないものでも売ってみる」という店主の姿勢は、商品の幅を広げ、買い手に多くの選択肢を与える。このように、ある程度のあいまいさや不確実性を許容し、その「よくわからない」部分を楽しみながら売買をしている。これはまさに「賭け」の感覚に近いのではないか。檜垣(2008)はリスクの偶然性そのものが、文化的な「遊び」として分類されることがあるというということから、予測不可能性は「一種の偶然性の戯れ」として、ポジティブに捉えられてきた側面もあると指摘し、以下のように述べる。

> 世の中の無数の「遊び」論が指摘しているように、「遊び」とはそれ自身、因果関係や理由関係に予測不能な隙間が生じ、そうした隙間のなかで、非決定的なものに身を委ねる行為である。偶然であることを積極的に認め、そこで自己責任を意図的に放郷しながら、快楽の情動を享受することである。それは、まさに賭けに対し、ポジティヴな意味を見いだすことであるだろう。(檜垣 2008: 17-18)

骨董市において「予測不可能な隙間」とは、店主が何を持ってくるかわからない、店主も何を仕入れることができるかわからないということ、それをいくらで売り、買うのかは交渉次第であること、さらに商品は予想通りに使えるものなのか、本物なのかは分からないという不確実性である。しかしそのような予測不可能性と不確実性を前にして「試しに売ってみる」、「試しに買ってみる」ことで売買を楽しみ、そこで予想していなかったものや人、知識との出会いが生まれる。不確実性の高い中においてあえてそれを受け入れ、「賭け」に投じる人々のポジティブな側面が見えてくるのだ。この側面こそ、先行研究で述べられてきた、リスク回避のために試行錯誤をする人々の様子とは異なる点であると考える。

骨董市の売買は他の賭け事と同じく、必ずしも「勝てる」とは限らない。骨董市の買い物に関して「賭けに負ける」ということが「楽しさ」として捉えられているとは必ずしも言い切れないが、購入に際して客の大木さんが「ちゃんと使えたら万歳みたいな感じなんで」と発言していたように、ある程度その不確実性を受け入れていると考えられる。また失敗をして経験を積む、勉強をするという店主や客の様子も見られたことから「賭けに負けた」経験も生かして売買をする姿勢も見られる。特に骨董市

で売買されるものは生鮮食品のように健康に影響を及ぼすような心配はない。また仙台の骨董市に限って言えば、商品の価格は比較的安価なものが多く、不良品を買うなどの失敗をしても影響が少ないと考えられる。そのため、多少のリスクをとっても「試しに買ってみる」という行動は取りやすいのではないか。

7. 結論

本研究は、仙台市の古民具骨董青空市の売買の様子を分析し、そこでの不確実性と対処方法を明らかにした。規格化された商品が並ぶスーパーや百貨店などと異なり、骨董市には仕入れ方法、商品の情報、そして値段の決定に関して不確実性が見られた。店主や客は、自由に手に取って見ることができるという対面の市場の特性と、目利き力を生かして商品の質を判断し、また情報共有や顧客関係を通じて売買をうまく進めようとしている。

このような状況を踏まえ、これまでの議論されてきた情報の非対称性や顧客関係に関する研究と照らし合わせると、必ずしも売り手は情報強者ではなく、時に目利きの客から情報を得ることがあり、それによって情報の非対称性が緩和されるということが分かる。店主と客の関係は固定的なものではなく、期待をしながらも互いの気まぐれさを許容し合うといった緩やかな関係であり、不確実性があるということを正直さと寛容さを持って認め、許し、楽しむ姿が見られた。このようにリスクがある中でそれに対処しつつ、ポジティブに不確実性を楽しむという骨董市ならでは様子は、市場の研究の中での売り手と買い手の新たな一面であると言えよう。

引用文献

ベスター、テオドル

2007　『築地』和波雅子・福岡伸一訳、東京: 木楽舎。

Geertz, Clifford

1978　“The Bazaar Economy: Information and Search in Peasant Marketing”

The American Economic Review, 68(2): 123-244.

ギアツ、クリフォード

2002　『解釈人類学と反＝反相対主義』小泉潤二編訳、東京: みすず書房。

檜垣立哉

2008　『賭博/偶然の哲学』東京: 河出書房新社。

大坪玲子

2017　『嗜好品カートとイエメン社会』東京: 法制大学出版局。

小川さやか

2011　『都市を生きぬくための狡知—タンザニアの零細商人マチンガの民族誌』京都: 世界思想社。

市野沢潤平

2003　『ゴーゴーバーの経営人類学ーバンコク中心部におけるセックスツーリズムに関する微視的研究』東京: めこん。

関本照夫

2001　「市場と商業についてのノート—比較史研究会を振り返って」<https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/~5jimu/new/011221-2-j.html#mark2>より、2021 年 9 月 26 日取得。

田村うらら

2009　「トルコの定期市における売り手-買い手関係ー顧客関係の固定化をめぐって」『文化人類学』74(1): 48 -70。

東北人類学論壇 Tohoku Anthropological Exchange 21: 106-127(2022)

萌芽論文

「推し」の人類学的研究
―「オタク」のインタビュー調査から

柳瀬　文乃

1. はじめに

近年、ニュース番組や書籍などでも「推し」という言葉を耳にする機会は多く、たくさんの人にとってそれは身近なものになってきている。しかし、「推し」とは何かと聞かれると言葉に詰まる人も多いのではないだろうか。実際に「推し」を推すオタクである筆者自身もこの問いにはすんなり答えることが出来ない。「推し」については「対象に対する好意的な感情をもつ」という共通点はあるものの、「好き」と「推し」は異なる存在である(綾奈 2020: 58-59)というも指摘もあり、一言で表せない複雑な存在である。

本稿では東(2001)と岡田(1966)の定義を参照しながら、オタクを「オタク系文化に耽溺し、オタク系文化の知識を深める飽くなき向上心と自己顕示欲を持つ人びと」と定義する。その上でオタク同士のグッズ交換である「お取り引き」に焦点を当て、4 人の「推し」を推すオタクにインタビュー調査を行った。彼女たちが「お取り引き」をどのように行い、それによって収集したグッズをどのように扱うかという語りを事例として、「推し」とは何かを人類学的に明らかにする。

2. 問題の背景

本稿では「お取り引き」＝「交換」について検討するにあたり、まず、理論的背景となる「交換」と「マナ」について説明する。また、今まで語られてきた「推し」を巡る言説を資料とし、オタクが消費するモノについて検討する。

(1) 理論的背景

①交換

トロブリアンド諸島のクラ交易に関する研究を行ったマリノフスキ(2010)は、ソウラヴァと呼ばれる首飾りとムワリと呼ばれる腕輪が島々の間で交換され(マリノフスキ 2010: 122)、その中で共同関係が構築されていくことを指摘した。マリノフスキはトロブリアンド諸島の交換の事例から、人間同士の関係の構築に注目した。

このようなモノの交換により人間同士の関係構築を明らかにする研究は、その後も様々な形で続いていく。例えばモースは、贈り物には贈り物を与える義務、受ける義務、お返しの義務という 3 つの義務があると述べた(モース 2008: 48)。モースの研究では、事例として互いに価値のあるものを贈り合う人々の様子が記述されている。サーリンズ(1984)は、モースのこの議論を発展させ、①社会関係の近い親族同士などで行われる「一般化された相互性」、②友人関係での契約や婚姻互換のことを指す「均衡のとれた相互性」、③社会関係の遠い者同士で行われる「否定的互酬性」の 3 つの観点から交換を分析した。

今まで交換による人間関係の構築をめぐる研究は、地縁や親族間での交換を通して発生する社会関係の強化に注目してきた。大坪(2017)の論考は、元々関係のなかった買い手を開拓しつつ、その関係の維持に執着するのではなく、つかず離れずの距離を保ちながら再び新たな買い手を探すという、社会関係が再生産されづらい状況における交換を描いた点で特徴的である。大坪(2017: 267-272)はイエメン社会における嗜好品のカートの買い手(商人、購入者)と売り手(生産者、商人)の関係性に注目した。大坪(2017)が明らかにしたのは、交換により数多くある選択肢として買い手と売り手の顧客関係を作り、それが発展するなら歓迎し、発展しなかったとしても問題としないゆるやかな紐帯の存在だ。

交換を介した人間関係の構築・維持を意識的/無意識的に構築しているか、または構築された人間関係への期待の高低は様々だが、こうした研究はいずれも、交換の結果、発生する関係性に注目している。しかし、本論で扱うオタク同士の「推し」グッズの交換は、新しい人間関係の構築を目的としていない。本稿ではそのことに着目して、「お取り引き」という交換の特性を明らかにする。

②マナ

モースは、「呪術が 1 つの社会現象である」(モース 1973: 185)、すなわち一定の概念への共通理解を持った集団の中で呪術は存在する、という視座から呪術の分析を行った。モースはマナを「妖術使いの力、ある事物の呪術的資質、呪術的事物、呪術的存在、呪力を持つ、まじないをかけられる、呪術的に作用する、といったような言葉でもって示している雑多な観念を包摂」(モース 1973: 169)し、実在するものとして扱っている。このような多義的なマナについてモースは、①資質、②実体、③活動の 3 つの不安定な観念で構成されていると述べる(モース 1973: 169-170)。モースは「事物に追加された物」(モース 1973: 172)としてのマナに注目し、それが様々な形で現れることを指摘した。

以上を踏まえて、本稿ではオタクグッズを「お取り引き」によって交換する人びとに焦点を当て、「推しに対する気持ち」がマナのような力をもって彼女たちを「推し」に向かわせるのか否かを、彼女たちの行動を基に検討していく。

(2) 民族誌的背景

①「推し」

ここでは芸術総合雑誌『ユリイカ』の 2020 年 9 月号の記事と第 164 回芥川賞を受賞した宇佐見りんの『推し、燃ゆ』を参照しながら、「推し」の多義性について明らかにする。「推し」は「対象を好ましく思う」という漠然とした共通点を持ちながら、細かい定義は人によって大きく異なる。声優でありオタクを自認する悠木は、「推し」を「それのことを考えると幸せになり、踏ん張る力を貰える」(悠木 2020: 51)存在であると述べる。中には相反するような定義も述べられている。橋迫(2020: 85)は「推し」を他者とのコミュニケーションの中で現れる存在と述べるのに対し、岡田(2020: 100)は自分との孤独な関係の中で没頭する対象と述べる。『推し、燃ゆ』(宇佐見 2020)の中で「推し」を推す主人公のあかりは、「推し」を自分の存在理由であり生活であり核である、と説明する。

このように、全く視点が異なる十人十色の定義があることが「推し」を巡る言説の一番の特徴だ。「推し」は多義的であることを「許された」存在であるといえる。

②オタクの消費

本稿では、オタクを「オタク系文化に耽溺し、オタク系文化の知識を深める飽くな

き向上心と自己顕示欲を持つ人びと」と定義する。オタクは「オタク系文化」、すなわち「コミック、アニメ、ゲーム、パーソナル・コンピュータ、SF、特撮、フィギュアそのほか、たがいに深く結びついた一群のサブカルチャー」(東 2001: 8)に耽溺する。では、これらの消費の背景には何があるのだろうか。大塚(1989)の「物語消費」とそれを展開させた東(2001, 2007)の「データベース消費」からこれまでの議論を概説する。

大塚(1989)はオタクが何を消費するかについて、「小さな物語」と「大きな物語」という 2 つの概念を用いて「ビックリマンチョコレート」という食品玩具を分析することで明らかにした。「ビックリマンチョコレート」に付属する〈ビックリマンシール〉は、原作が存在せず、裏側に「悪魔界のうわさ」と題された短い情報が書かれたシールである。この情報を集めると、キャラクター同士の関係性という漠然とした「小さな物語」が積み上がり神話的叙事詩を思わせる「大きな物語」が出現するという(大塚 1989: 12-13)。この「大きな物語」は世界観と表現できる。こうした「大きな物語」を参照して作られるのが同人誌である。原作となる「大きな物語」に従って、ファンが「小さな物語」である同人誌を生産し、それを他のファンたちが消費する。大塚(1989: 24)は、こうした消費形態の最終段階では、商品の送り手が消費システムから排除され、商品を作ることと消費が一体化してしまう可能性を指摘した。

これに対して東(2001)は「データベース消費」を提唱した。東(2001: 58)によれば 1990 年代にはオタクの中に「キャラ萌え」と呼ばれる新しい消費行動が誕生し、アニメやコミックという個々の作品を消費していたオタクたちがキャラクター自体に魅力を感じるようになった。この魅力が萌え要素である。次第に同じ萌え要素を持った別のキャラクターが作られるようになり、オタクたちはそうした様々なキャラクターと萌え要素の間を行き来しながら、キャラクターを消費する。「特定のキャラクターに『萌える』という消費行動には、盲目的な没入とともに、その対象を萌え要素に分解し、データベースのなかで相対化してしまうような奇妙に冷静な側面」(東 2001: 76)があると指摘した。結果、このデータベース＝萌え要素のなかでキャラクターが再生産されて消費されるようになり、オタクたちの消費の対象が作品からキャラクターへと変化した結果、「キャラクターの自律化」(東 2007: 38)が発生する。こうしてキャラクターが作品とは別に消費されるようになった。

このように東の議論は、「萌え要素」というキャラクターのパーツに焦点を宛てている。しかし、本稿が注目する事例では、オタクたちはキャラクターの人格というパーツとして分解し得ないものに価値を見いだしている。無数の「萌え要素」がキャラクターの人格によって統合され、一つのキャラクターとして構築されている。ゆえにこうしたキャラクターを「一個人」とみなすようなオタクたちのやり取りに注目するのが本稿の独自性である。

3．オタクへのインタビュー

ここでは筆者が 2020 年 11 月～12 月、2021 年 8 月と 11 月に行ったインタビュー調査について記述する。インタビュー対象者は「オタクである・オタクであった」と自認する R さん、I さん、Y さん、M さんの 4 人の女性である。彼女たちはそれぞれに様々なジャンルを推しており、それは 2 次元の作品から 3 次元、2.5 次元俳優[1]まで多岐に渡っている。なお、本稿では対象者のプライバシーに配慮し、彼女たちの氏名はアルファベットで表記する。語りの中に登場する彼女たちの「推し」の名前は語りのまま表記する。

インタビューは筆者から質問を投げかけ、それに対して具体的なエピソードやインフォーマント自身の考えを語ってもらう会話形式で実施した。仙台市内で直接会うことが出来た Y さんと M さんには対面で実施し、遠方に住んでいる R さんと I さんには Zoom[2]や LINE[3]を用いて行った。また、適宜 LINE を通したテキストメッセージでインタビューの補足調査を行った。インタビューの記述の中の括弧は特に断りがない場合、筆者がつけた注や補足である。

(1) 「推し」を楽しむためのグッズ

まず、なぜ彼女たちが「推し」のグッズを購入するのか、そして購入したオタクグッズをどのように扱うのかについて記述する。グッズは缶バッジやカードの他にも服

---

1 「2 次元の漫画・アニメ・ゲームを原作とする 3 次元の舞台コンテンツの総称」(一般社団法人日本 2.5 次元ミュージカル協会 n.d.)のこと。

2 Zoomビデオコミュニケーションズが運営するアプリケーション。オンラインでビデオ・音声通話、コンテンツ共有、およびチャットが行える(Zoom 2020)。

3 LINE とは、2011 年 6 月にサービスが開始されたコミュニケーションアプリ。1:1 やグループでの会話を行うことが出来る(LINE 株式会社 2020)。

飾関連の物など多岐に渡る。彼女たちがグッズを購入し、それを使用することで「推し」への「愛」を表現し「推し」を楽しむ様子を明らかにしていく。

①「推し」のグッズを買う

グッズを購入する理由について、I さんは以下のように語る。

> その作品に対してお金をかけているっていう事実がほしい。ほしいっていうか事実があるからオタクをやっていけるなっていうふうに自分は思ってるんですよ。(中略)やっぱりその何か「運営」に対して還元できるものっていったら、自分たちが何かを買って、その「運営」に直接にお金を出してあげる、出してあげるっていうのが一番手っ取り早いじゃないですけど、それかなって思って。(中略)自分はちゃんと「運営」さんに対して感謝の意味をこめてお金を払って、なおかつちゃんとオタクが出来てるなというふうに感じるので。(中略)「公式」がこれからも続いていく、このコンテンツがずっと続いていけますように、みたいな。

I さんはグッズを購入する理由を「運営」にお金を出すためであると説明する。「運営」とは、アニメやゲーム等のコンテンツを提供する側のことを指す言葉であり、「公式」も同様である。I さんはコンテンツを消費しつつもグッズを購入することによって「運営」にお金を支払おうとする。そのことによって「オタクをする」権利を得られると考えるのである。彼女が支払うお金には「感謝の意味」がこめられており、自分がお金を支払うことがコンテンツをさらに盛り上げ、次の展開に繋げられる行為であると考えているのである。

R さんも I さんと同様に「推し」のためにグッズを購入したいと考える。同じ絵柄、同じ種類のグッズを何十個も購入することは、グッズを「積む」と表現される。R さんは、普段はグッズを積まないが、彼女の「推し」である 2.5 次元俳優の翼くん[4]が一人で行うイベントの際はグッズを「積みたい」と感じるという。

> 翼くんの単独イベントだったら、積めば積んだだけ、そもそも彼だけに入るわけ

[4] R さんの推しのひとりである SunGnome 所属の男性タレント(SunGnome 2020)。主に 2.5 次元の舞台やミュージカルで活躍している(SunGnome 2020)。

じゃない!?収益が。だから周りの同担に『自分はこんだけ積んでますけど？』みたいなことがあるから、そういう現場はあるかも。

「同担」とは、同じ「推し」を推すオタクのことである。R さんは自分と周りのオタクを差別化し、自分が翼くんをどれだけ「推し」ているか見せつけたいと考え、その指標としてグッズを使用する。また、グッズを積むことでオタクの中でも際立つ存在となり、翼くんに見てほしいという気持ちもあるという。彼女はグッズを購入したお金がそのまま翼くんの収益になることが最も重要なグッズを購入する動機であると考えている。彼女はこのことを「翼くんのために(グッズを)積んでる」と表現し、オタクとして翼くんの活動を支えるための行為だと考える。自分のためにグッズ購入するのではなく、自分がグッズを購入することで「推し」に貢献しようと考えているのであり、グッズを購入することで翼くんにお金が行くことを重要視する。では、彼女は「推し」に収益が行くことでどうなってほしいと考えているのだろうか。

「推し」がいいもの食べたり、好きなところ行ったり、好きな物買ったり、遊んだりしている姿が見たい、というのが大きいです！「推し」にはのびのびと育って欲しいという謎の母性があるかもしれません…

彼女は収益が「推し」に行くことで「推し」に幸せな生活をしてほしいと考えており、この気持ちを「母性」であると表現する。彼女は母親が子供を育てるような気持ちで翼くんのグッズを購入し、自分が翼くんのために支払ったお金をもとに「のびのびと育ってほしい」と感じるのである。

Y さんもグッズを「積む」ことがあった。彼女はグッズをたくさん購入することで「嶺二[5](Y さんの「推し」)の一番になりたかった」という。彼女は周囲の嶺二を推す他のオタクと自分自身を比較して自分が一番嶺二を推していたいと考えていた。周囲のオタクよりもたくさんのグッズを持ち、自分が嶺二を推していることを周囲にアピールすることで推しへの愛の量を周囲の「同担」と競争しようとしていたのである。

5 「うたの☆プリンスさまっ♪」に登場する寿嶺二(ことぶきれいじ)のこと。

しかし、時に彼女たちは中古ショップやメルカリ[6]でグッズを購入する場合もある。M さんも同様に「公式」のためにグッズを購入したいと考えているが、中古ショップでグッズを購入する場合もあるという。欲しかったグッズがどうしても手に入らない、あるいはトレーディンググッズで「推し」を引けなかった場合には、中古ショップを利用する。中古ショップで購入する場合、彼女が支払ったお金は「公式」には届かないため、グッズを購入する理由として語る「公式のため」とは乖離がある。中古ショップで購入する場合に M さんは「私の欲望だけ」のために購入する。M さんは「好きなモノがあったら集めてしまう癖」があると語り、欲しいモノがあれば集めるために購入してしまうという。M さんのように、「公式のため」と考えつつも自分のために中古ショップで格安品を購入しグッズを収集する場合もある。しかし中古ショップで購入する場合であっても、ショップにわざわざ足を運び目当ての「推し」のグッズがあるかどうか、たくさんのグッズの中から探す必要がある。M さんは店頭に足を運びグッズを探す手間よりも、「推し」を購入して手に入れることを重視している。彼女にとって「推し」のグッズはそこまでしてでも手に入れたいものなのである。

R さんもメルカリでグッズを購入した経験がある。彼女は仕事が忙しく、なかなか「推し」活をする時間がとれていないが、2021 年 10 月ごろに仕事が一時落ち着き、家で DVD 鑑賞をするなどの時間がとれたという。その時に彼女は様々な種類の DVD を鑑賞するためにメルカリで DVD を購入した。

> 多分ね、3 万(円)分くらい買った、円盤。(中略)メルカリで。めっちゃ嫌だったけどメルカリで買ったな。(中略)(正規の販売元から新品で買うと)1 枚が高くて手が出なかったので。

「円盤」とは DVD やブルーレイ、CD などのことを指す。ここでは翼くんの出演舞台の DVD のことを指す。彼女は「嫌だ」という気持ちを抱えながらも、数を購入することを優先して正規の販売元ではないメルカリからグッズを購入した。このように、

---

6 メルカリとは「かんたんに売り買いができて、あんしん・あんぜんなお取引ができるフリマアプリ」(株式会社メルカリ:2020)を指す。要らなくなった物などがアプリ上で出品され、それが欲しい人は提示された価格を支払う、フリーマーケットのような形式で中古品のやり取りが行われている。

彼女たちはグッズを購入する理由を「推し」のためとしながらも、実際には自分の欲を満たすためにグッズを購入するという側面もある。

②「推し」のグッズを楽しむ

ここでは彼女たちが購入したグッズをどのように使用するのかについて記述する。グッズは持ち歩くなど、各個人の思い思いに使用されるが、その前に彼女たちによって大切に保管される。彼女たちはその際に1つずつグッズを梱包したりファイリングしたりして傷がつかないように保護した上でグッズを保管する。これは「推し」のグッズも「推し」以外のグッズも変わらない。しかし、「推し」以外のグッズは後程「お取り引き」などを通して手放すために綺麗な状態で保管しようとされる。このことについては次節で述べる。時にはグッズは部屋の中に飾られたり、眺められたりする場合もある。R さんは「片付けしようかなとか、ちょっと頑張らなきゃ行けない時」に不定期でグッズを眺め、「推し」から活力を得る。M さんは季節ごとにディスプレイするグッズを替えて部屋に「推し」のグッズを飾っている。その際にグッズを専用の額縁やボックスに入れ、埃が被らない状態にした上で飾るという。逆にY さんの場合、グッズは手に入れることが重要であり、購入した後は飾ったり眺めたりすることはない。このように、「推し」のグッズの楽しみ方は人それぞれで異なっており、統一性がないのである。

反対に「推し」以外のグッズは最終的に「お取り引き」を通して他のオタクへと譲ったり、中古ショップなどで売ったりされる。R さんは「推し」以外のグッズを「いらないもの」と表現し、時にはごみとして捨ててしまうという。「推し」のグッズが大切に手元に置かれることに対して、「推し」以外のグッズは彼女たちにとって不要なものであり扱いも大きく異なることが指摘できる。

彼女たちは保管したグッズを「現場」と呼ばれるイベントの時に持ち歩く。R さんは缶バッジなどのグッズを表にはつけず、かばんの中など、彼女自身にしか見えないような場所に入れて持ち運ぶ。一方でシュシュなどのヘアアクセサリーやリボンのような、元々身につける事を前提としたグッズは他のオタクからも見えるような部分につけて自分を着飾るためにも使用する。

現場(実際に足を運ぶ形のイベントや舞台のこと)によって違うんだけど、舞台だ

と「私は翼くんのオタクで一番かわいい」。でも 2 次元だと、「今日は○○くんのキャラクターに寄ってる」みたいな感じで。現場によって違う。

舞台関連のイベントでは同じ「推し」を推す他のオタクと比べて自分が一番かわいいオタクであるとアピールするために「推し」のグッズを身につける。その一方で 2 次元のイベントでは、「推し」のキャラクターに近づくために「推し」のグッズを身につける。彼女はこの違いについて「推し」に直接認識してもらえる可能性の有無の違いだと語る。翼くんは直接認識される可能性がある生身の人間であるのに対し、2 次元のキャラクターではその可能性はない。だからこそ R さんはグッズを身につけ「推しに寄る」ことで、少しでも「推し」に近づこうとするのである。

しかし、彼女は「推し」に直接認識されることはない 2 次元の「現場」でも洋服などの身なりに気を使い「かわいく」着飾って現場に行くという。なぜなら自分以外の他のオタクに「推し」キャラクターのオタクである自分自身が「ダサい」と思われたくないからだ。R さんはグッズを持ち歩く理由を「推し」に関連付けて説明しているが、そこには「周囲のオタクが自分自身のことをどう見るか」という視点もある。

I さんはグッズを持ち歩くときには自分以外のオタクに見られることが前提となっている。

1 個の缶バッジとか 1 個のアクスタ[7]とかをつけてくだけで同じオタクの人から誰々推しですか？とかって声かけられて、このグッズ持ってるんですけどどうですか？とか声かけられることもあったりするので、そういうのでどんどん交換とか、例えばオタクとしての輪のつながりを増やしてくっていう 1 個のそのきっかけでもあるかなっていうふうに思ってるので。

彼女はグッズを持つことによって、自分が誰を推しているのかを他のオタクに表明し、グッズを交換する際にどのキャラクターを求めているのかを分かりやすく示している。そうすることによって、周囲のオタクとグッズを交換したり時には友人関係に発展したりするなど、オタクとしての交友関係を広げるきっかけとなる。しかし、彼

[7] キャラクターなどが描かれたアクリルスタンドの略。

女はグッズ全てを他者が見えるところにつけるわけではない。

> 道中あんまりガチャガチャつけてくのはあんまり、ってやっぱり私も思うので、別に好きにオタクすればいいじゃんとか思う人もいると思うんですけど、やっぱり引け目を感じるところもやっぱりあるので。

彼女はグッズを他者に見せることを前提としている一方で、たくさんグッズをつけて歩くことに「引け目」を感じている。他者にグッズを見せ、「推し」を推したいと考えている一方で、「オタクである自分」を見られたくない、という矛盾した気持ちを抱えながらグッズを持ち歩く。

Y さんは同じ絵柄の缶バッジをたくさん購入し、「痛バ」にして持ち歩いていた。「痛バ」とは、キャラクターの描かれた缶バッジを、他者から見えるような場所にしきつめて付けたバッグのことである。彼女は「痛バ」を持って電車に乗る際は「もちろん」隠して歩き、オタクではない「普通の人」にはかばんを見られないようにしていた。その一方で同じジャンルを「推す」オタクには自分が誰を推しているか知ってほしかったという。

> (グッズを持ち歩くことは)恥ずかしかった。やっぱりこういうことしてる人って普通じゃないっていうのもオタクしながらわかってるから、恥ずかしかった。(中略)オタクのなかでは「あ〜嶺二好きなんだな」って思われたいけど、一般人には普通の人に思われたかった。

Y さんは他のオタクには自分が嶺二を推すオタクであることをアピールしたい一方で、そのような事をする人は「普通じゃない」と語る。オタクでない人には「普通の人」だと思われたいという。このように彼女たちは「推し」を推すオタクであることを周りのオタクにアピールしたい一方で、オタクは「普通」ではないと感じている。だからこそグッズを隠して持ち歩くことで彼女たちが考える「普通の人」になろうとしているのである。

(2) 「お取り引き」

ここでは彼女たちの「推し」への愛が表出する事例である「お取り引き」について詳述する。「お取り引き」では購入したトレーディンググッズで引いた「推し」以外のキャラクターを、様々な工夫をしながら他のオタクと交換することで「推し」を手に入れる。

①「お取り引き」を行う

最初に「お取り引き」によって交換されるトレーディンググッズの現状と、「お取り引き」の具体的な方法について記述する。「お取り引き」のやり方は山口(2020)と筆者が実際に行った「お取り引き」の経験に依拠している。R さんによると、様々な種類のグッズがトレーディンググッズとして販売されている。缶バッジが代表的だが、そのほかにもコンテンツごとに若干の差異があり、ラバーバンドやコースターもトレーディンググッズとして販売される。M さんは KPOP アイドルと 2 次元作品に「推し」がいるが、KPOP では CD にランダムでアイドルの顔写真が印刷されたカードが封入されていることがある。2 次元作品では、シチュエーションドラマが収録された CD がランダムとして販売されている。

「お取り引き」は主にツイッター上で行われ、「お取り引き」に関するやりとりなどはツイッターの機能を使用して行われるのが普通である。「お取り引き」を行う際は最初に「募集ツイート」を出し、並行して自分の希望する条件にあった募集を探すことである。「募集ツイート」に関して山口(2020)はある程度の共通性が見られることを指摘している。「募集ツイート」は多くの人の目に触れることで「お取り引き」相手が見つかりやすくなる。加えて、グッズに傷がついているか否かは「お取り引き」でのトラブルを避けるためにも重要であり、もし傷がある場合は「募集ツイート」に記載する。小さな傷であってもグッズに傷がついていることは嫌だと考える人も多くいる。だからこそ、「推し」以外のグッズを保管する場合であっても、「推し」と同様にグッズを綺麗に保たなければいけない。

次に「募集ツイート」に記載された条件にあった人を見つけ、「お声かけ」をする。「お声かけ」では見ず知らずの人に声をかけるため、最も重要なのは相手に不快感を与えない言葉遣いである。敬語や誤字脱字などの間違いがないようにお声かけ前には細心の注意を払い、自身の信頼性を高める必要がある。ここで条件がお互いに合い、

「お取り引き」が成立すればDM[8]で発送日やグッズの梱包方法、発送方法や住所や氏名などの個人情報の提示と確認を行う。その後、OPP袋や気泡緩衝材などでグッズを梱包し保護した上でグッズを「お取り引き」相手に発送する。場合によっては、待ち合わせをして手渡しでの交換になる場合もある。グッズが到着したら開封して中身を確認し、相手に連絡をする。グッズに不良などがあった場合もこの時点で相手に伝える。特に問題がなく、双方にグッズが到着したことが確認出来たら感謝を述べあって「お取り引き」は終了となる。

このように「お取り引き」は様々な過程を経て完遂されるものである。見ず知らずの相手とやり取りをし、個人情報の開示をする必要があるため信頼できる相手かどうか、相手のツイッターアカウントの限られた情報から見極める必要がある。では、彼女たちはどのようにしてそれを見極めるのだろうか。Rさんは以下のように述べた。

> 私は人に対するリプ(リプライの略)を見る。どういう話し方してるのかとか、どういう態度なのかとか。ツイートの内容じゃなくて私はリプの内容を見てる。(中略)そういう話し方しちゃうんだ、みたいな。友達との会話の仕方で大体わかる。

Rさんは取引相手が信頼のおける人物かどうかを判断するためにツイートのリプライ部分を確認するという。会話の仕方や友人との話し方を確認し、相手の人柄を推測しようとしている。

IさんもRさん同様に限られた情報の中から信頼性を判断しようとする。

> ツイッターのその人の垢[9]見て bio[10]とかプロフィールは見て大丈夫そうかな、っていうのと、過去ツイ(過去のツイート)があるんだったら過去ツイ遡って取引トラブルがないかとかを確認して(中略)なんか心配だなって人は「取引」はしないようにしてます、応じないみたいな。

---

8 ツイッターの機能であるダイレクトメッセージのこと。この機能を使用すると、非公開で自分と自分をフォローしている相手の会話を行うことが出来る(Twitter, Inc. 2020)。

9 「垢」とはアカウントの略語である。

10 「biography(経歴)」のことで、ツイッターアカウントの160文字で記載できる自己紹介の項目のことを指す。

I さんはツイッターアカウントの「bio」と呼ばれる自己紹介の項目やプロフィール欄、「過去ツイ」などを最初に見て「大丈夫そう」かどうかを判断するという。彼女はその部分を見て経験則から「なんか心配だな」という人とは「お取り引き」をしないようにしている。

このように、彼女たちは「お取り引き」成立前に相手のツイッターアカウント内の様々な情報から相手が「信頼に足る相手かどうか」を見極めるための工夫を行っている。「お取り引き」を行って「推し」のグッズを手に入れるためにはこのような工夫が必要不可欠なのである。

②「お取り引き」を終えて

「お取り引き」は前項で述べたように複雑な過程を経て行われる。R さんは「お取り引き」は嫌でもうやりたくない、楽しくない行為であると語る。ツイッターで条件のあう「お取り引き」相手を探す際に、なかなか良い相手が見つからず「しんどさ」を感じると語る。

Y さんも同様に「お取り引き」に疲れを感じることもあるという。

> 何回も(ツイッターを)見ながら(「お取り引き」を)やるわけじゃん。あれは最初は楽しかったけど段々疲れてきてげっそり笑(中略)トレーディングと「取引」がやっぱりセットになってるから、なかなか(交換)出来なかったりすると。ずっとツイッターに張り付いてやってたから。

Y さんは大量に買ったグッズを全て「推し」の絵柄にして集めたいと考えており、そのための「お取り引き」相手を探すことが大変だったと語る。「トレーディング(グッズを購入すること)と『取引』がやっぱりセットになってる」と語り、ツイッターを見て条件が合う人、合いそうな人を見るとすぐにツイートの内容などを確認し、「お取り引き」ができるかどうかを確認していた。その行動も最初は「推し」のグッズを手に入れられるというワクワク感や期待感のある行為だったが、時間が経ってもなかなか「お取り引き」相手が見つからないと、それは Y さんにとって「げっそり」する行為に変わっていくのである。

M さんは「お取り引き」をやらなくてもいいならやりたくはない、と語る。

> 基本的には面倒くさいじゃないですか、お取り引き自体が完遂するまで何か月かかかったりとか、早くて一週間とか。気も使うし、(中略)(「お取り引き」をしなくても)済むならしたくはない。

このように M さんは「お取り引き」を「基本的には面倒くさい」行為であると捉えている。彼女は特に相手との DM が面倒くさいと感じる。DM では間違った情報を相手に伝えてしまうことによって、「お取り引き」相手に「この人と『お取り引き』をして大丈夫なのか」という不信感を与えてしまう可能性があり、やり取りの中で間違った情報を相手に伝えないように細心の注意を払う必要がある。彼女はそのような気を使い、時間もかかる DM に「面倒くささ」を感じている。

このように彼女たちは「お取り引き」を行うことを選択して行っているにも関わらず、「お取り引き」は「面倒くさい」「げっそり」「嫌だ」と感じている。「お取り引き」は強制されるものではなく、自発的に行う行為である。それにもかかわらず、彼女たちは「お取り引き」に対してマイナスの感情を抱きながら行っている。

このような「推し」を手に入れるために不可欠な行為である一方で、「面倒くささ」もある「お取り引き」を経て相手との関係性は変わるのだろうか。R さんは「お取り引き」相手について、自分の趣味を共有して交流することはないと語る。「お取り引き」相手は同じ作品や人を「推し」ているオタクであるが、そこに「オタク仲間」であるといった仲間意識は生まれないのである。更に、R さんは「お取り引き」は「ビジネス」であるとも語っており、「お取り引き」で出会った人と趣味の場にいてほしい人は異なることがわかる。

また、I さんは以下のように語る。

> 大体その日 1 回限りが多いので、仲良くなるってことはめったにないですかね。現地でたまたまちょっとしゃべってみて、会話が弾んで仲良くなって繋がりませんか、みたいなことはたまにありますけど、大体その 1 回の「取引」限定が多いですかね。

「お取り引き」相手とは、1 回限りの関係で「お取り引き」終了後に仲良くなることは滅多にない。イベント会場などで「お取り引き」をした相手とは会話が弾んで、友人関係に発展することはあるがそれも頻繁にあることではないという。

Y さんも R さん、I さん同様、「お取り引き」が終わったら取引相手とは一切関わらず、「個人的なやり取りはほぼない」という。ただ彼女は「元『お取り引き』相手」の取引募集ツイートをリツイート[11]し、ツイートを拡散することに協力していたという。取引募集ツイートはより多くの人の目に触れた方が自分と条件のあう「お取り引き」相手を探すことのできる確率が上がる。そのため、リツイートによってフォロワーのフォロワーに見てもらうことが必要なのである。彼女は「お取り引き」相手とは「一切関わらない」と語りつつ、取引募集ツイートのリツイートのような「相互協力」の関係を築いているといえる。

M さんも 2 次元作品の「お取り引き」では、「お取り引き」相手と友人関係に発展することはほとんどないと語る。しかし、一度「お取り引き」したことがある人は、見ず知らずの相手よりも信頼性があがると語る。

> 次とかに「お取り引き」できたら、知ってる人、知らない人よりかは知ってる人の方が良いし、例えば予約の時点で「取引」決めたいなってなったときに、フォロワーさんの中から決まったら安心。

彼女は一度「お取り引き」をした相手と再度「お取り引き」を行うことを望んでいる。特にグッズが販売される前に予約をし、ボックス単位でグッズを購入する場合は一度「お取り引き」を行ったことがある相手と交換をしたいという。予約を行ってグッズを購入する場合、グッズの販売日が数か月後、時には半年後などになる場合があり、「お取り引き」期間が長期にわたるというデメリットもある。その際に重要なのは「相手が最後まで責任をもって『お取り引き』を行ってくれるかどうか」である。M さんはその際に一度「お取り引き」をしたことがある人の方が、安心して最後まで「お取り引き」をしてもらえるのではないか、と考えるという。

---

[11] リツイートとは、「ツイートを再びツイートすること」(Twitter, Inc. 2021)。自分のアカウントでの投稿以外にも他のアカウントの投稿をリツイートすることも出来る。

このように、「お取り引き」相手と友人関係に発展することは多くの場合でない。しかし、一度「お取り引き」を行うことで信頼性が上がったり、リツイートによって「お取り引き」の手助けをしたりということが見受けられた。

4. 考察

以上の事例を踏まえて以下の 2 点から考察を行う。

(1) 「お取り引き」という交換の特性

本論文ではオタク同士のグッズ交換である「お取り引き」に関するインタビュー調査を行った。結果として彼女たちは「お取り引き」においてある程度決まったやり方の形式の中で、相手から信頼を得、相手を信頼するために様々な工夫を行い、「お取り引き」を成功させていることがわかった。

オタクグッズの交換である「お取り引き」は、彼女たちにとって同価値のグッズ同士を交換しているのではない。彼女たちが価値を見いだすグッズは「推し」のグッズであり、「推し」以外のグッズに価値は置かれていない。「お取り引き」相手が見つからなかった「推し」以外のグッズは、彼女たちにとっては不必要なものであった。それに対して「推し」のグッズは価値がある。「推し」のグッズは「推し」以外のそれと区別して保管され、飾ったり持ち歩いたりされる。彼女たちにとって「推し」のグッズは使用するだけではなく、手に入れ、所持することが重要だ。それは「推し」以外のグッズと最も異なる点であり、「推し」のグッズは手放されることがない。

つまり、「お取り引き」とは等価のグッズを交換する行為ではなく、自分にとって最大級の価値がある「推し」と価値がない「推し」以外を交換する行為である。「お取り引き」では、マリノフスキが指摘したクラ交換の重要な原理である「贈物を受けた人は、公正に同等の価値のあるものを返すことを期待される」(マリノフスキ 2010: 143)ことはなく、異なる価値同士のものを交換しあう。「お取り引き」を行うオタク同士で共通して理解されるグッズの「価値」はなく、扱い方も人によって大きく異なる。つまり、「お取り引き」という交換においてグッズ自体がオタク全体で共通した「重要な地位のしるし」(マリノフスキ 2010: 132)になることはないのである。

また「お取り引き」終了後は、交換相手と社会関係が生じることはほとんどない。彼女たちは様々な工夫を行いながら「お取り引き」を完遂するが、関係性は即物的で

あり、一度の「お取り引き」が終わったらリセットされてしまう。「お取り引き」という工夫や配慮が必要な複雑な交換の中で、彼女たちは他者との繋がりを作らないのである。

さらに彼女たちは「お取り引き」を「面倒くさい」といった否定的な言葉を用いて表現する。彼女たちにとって「お取り引き」は「推し」を手に入れるための必要不可欠な行為である一方で、「面倒くさく大変な行為」であるという共通の認識がある。そのように「大変」な「お取り引き」を行ってまで「推し」のグッズを集め、それを使用することで他のオタクと自分自身を差異化する。つまり、十全に「推し」を推すオタクであることをアピールする。グッズ自体にオタク全体で認識される共通の価値はないが、それを「お取り引き」を通していかに収集し、手に入れたかということを他のオタクに示すことがオタクとしての地位のしるしとなるのである。

(2) 消費から考える「推し」

彼女たちは「推し」を推すためにグッズを使用し、消費する。その消費の仕方は以下の 3 つに区分できる。

1 つ目は自分が十全に「推し」を推しているオタクであると他のオタクから承認されたいという承認欲求を満たすための消費だ。グッズを持ち歩くことは自分自身が「推し」を推していることを実感するためでもあり、他のオタクからそのように認識されるためでもある。2 つ目は他者との関わりの中で行われる消費だ。グッズを持つことは、「同担」のオタクに対しては「自分の方がより優れている」という、「同担」ではないオタクには「自分が誰を推すのか」を示す道具として使用される。3 つ目は楽しむための消費である。グッズの楽しみ方は人によって異なり、それぞれが最も楽しむことができる使い方をすることで「推し」を推す。「推し」は第 2 章で述べたように多義的であり、「推し」を推す態度も人によって異なることが可能なのである。

では、「推し」には共通の「何か」はないのだろうか。彼女たちの「推し」方は様々だが、彼女たちの中には「推し」を形作る意識されていない共通認識がある。この共通認識を形作るのが「事物に追加された物」(モース 1973: 172)としてのマナである。彼女たちは時間やお金を割きながら「推し」を推すための努力を行っている。それはグッズを持ち歩いたり SNS で写真を見せたりといった行為によって他のオタクからも認められ、認識される。この努力の原動力となるのが、オタクたちを「推し」に向

かわせる意識されていない共通認識、つまりマナである。彼女たちはトレーディンググッズを購入し数多くいるキャラクターの中から「推し」を引き当てることを「運命」という言葉で表現していた。「推し」を引き当てることは彼女たちにとっては自分自身の力で行うことができず、呪術的な力の作用によって発生することなのである。このことからも「推し」にはマナが宿っており、「推し」が彼女たちのもとに来ることの要因となっていると指摘できる。

ここまで記述してきた 3 つの消費は、全て自分の欲求を満たすための消費であると言い換えられる。1 つ目は自分をオタクとして認めてほしいという、2 つ目は自分の「推し」が誰であるのか示したいという、3 つ目は「推し」と収集したグッズを介して関り、「推し活」を楽しみたいという欲求である。彼女たちはグッズを購入する際には「公式のため」「『推し』のため」と語る。しかし、実際には「公式のため」にならないような場所でグッズを収集する場合もある。つまり、彼女たちがグッズを購入する目的は、「『推し』のグッズが欲しいという自分自身の欲求を満たすため」という側面が大きくある。事実、彼女たちが「公式のため」にグッズを購入したとしても、そこで得られた収益が本当に「推し」のために使用されているのか知る術はない。彼女たちが語る「公式のため」「『推し』のため」という言葉は独りよがりなものである。

このように、彼女たちの「推し」を推すための消費行動は自分の欲求に極めて忠実だ。自分が他者から認められ、自分が何者であるかを他者に顕示し、自分が楽しさを感じるためにグッズを使用する、自己満足的な行動なのである。しかしそのような欲求を全面に出して「推し」を推すのは、オタク以外の人には「普通の人」と思われたい彼女たちにとっては恥ずかしいことである。そのような「恥ずかしさ」を隠すために「公式のため」「『推し』のため」という言葉で自分の行動をカモフラージュする。「『推し』のため」にと語ることで、自分の行動を正当化し、「恥ずかしさ」を隠す。そこには、オタクたちのなかでの「推し」だからそのような欲求に忠実な行動をとるのだという共通認識があり、「推し」に対する努力を衝き動かすオタクに共通したマナがある。

このように、「推し」の消費は、「推し」のためという言葉を使って「恥ずかしさ」を隠しながら行われる。モースは様々な地域の民族誌的資料を収集し、ポトラッチのような自分の気前のよさを見せつける消費の形が世界中にあることを論じている(モ

ース 2010: 63-69)。しかし、本稿で論じた「推し」の消費は、この消費とは大きく異なる新しい消費の形である。筆者はこの新たな消費の形を「『推し』消費」と名付ける。

また、彼女たちがもつ欲求には「恥ずかしさ」があり、それを隠すために「推し」のためにグッズを買い、推すための努力をするのだという一種の枷を自分自身に課す。彼女たちを推すための努力に向かわせるこの枷がマナであり、それはオタク全体を衝き動かすものとして彼女たちに作用する。「お取り引き」のような面倒で大変な行為も実際は自分たちの「グッズを収集したい」という欲望のために行われている。困難のある「お取り引き」に彼女たちを向かわせるものが、彼女たちに課された枷であり、マナである。

引用文献

綾奈ゆにこ

2020　「推し依存症」『ユリイカ』52(11): 58-60。

東浩紀

2001　『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会』東京: 講談社。

2007　『ゲーム的リアリズムの誕生—動物化するポストモダン 2』東京: 講談社。

橋迫瑞穂

2020　「「推し」を語るとは何かーあるいはマキさんの輝く日常」『ユリイカ』52(11): 82-87。

一般社団法人 日本 2.5 次元ミュージカル協会

n.d.　『一般社団法人 日本 2.5 次元ミュージカル協会パンフレット』＜https://www.j25musical.jp/download/＞より、2021 年 2 月 5 日取得。

株式会社メルカリ

2020　「メルカリ初心者ガイド」＜https://www.mercari.com/jp/guide/beginner/＞より、2020 年 12 月 23 日取得。

マリノフスキ、ブロニスワフ

2010　『西太平洋の遠洋航海者　メラネシアのニュー・ギニア諸島における、住民たちの事業と冒険の報告』増田義郎訳、東京: 講談社。

モース、マルセル

1973　「呪術の一般理論の素描」、有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳、『社会学と人類学Ⅰ』、pp.47-217、東京: 弘文堂。

2008　『贈与論』有地亨訳、東京: 勁草書房。

岡田育

2020　「呼ばれた名前で」『ユリイカ 9 月 号』52(11): 96-101。

岡田斗司夫

1996　『オタク学入門ー東大「オタク文化論ゼミ」公認テキスト』東京: 新潮社。

大坪玲子

2017　『嗜好品カートとイエメン社会』東京: 法政大学出版局。

大塚英志

1989　『物語消費論—「ビックリマン」の神話学』東京: 新曜社。

サーリンズ、マーシャル

1984　『石器時代の経済学』山内昶訳、東京: 法政大学出版局。

SunGnome

2020　「吉澤翼(よしざわつばさ)男性タレント」＜http://sungnome.net/talentmensdata/talent-yoshizawatsubasa/＞より、2020 年 12 月 23 日取得。

Twitter, Inc.

2020　「ダイレクトメッセージについて」＜https://help.twitter.com/ja/using-twitter/direct-messages＞より、2020 年 12 月 23 日取得。

2021　「リツイートについてのよくある質問」＜https://help.twitter.com/ja/using-twitter/retweet-faqs＞より、2021 年 12 月 3 日。

宇佐見りん

2020　『推し、燃ゆ』東京: 河出書房新社。

LINE 株式会社

2020　「LINE/LINE プラットフォーム」

＜https://linecorp.com/ja/services/line＞より、2020 年 12 月 23 日取得。

山口晶子

2020　「オタク女子のグッズ交換に関する考察－Twitter での「お取り引き」に着目して」『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』10: 203-218。

悠木碧

2020　「推しと俺」『ユリイカ』52(11): 50-54。

Zoom Video Communications, Inc.

2020　"About Zoom", <https://www.google.com/url?q=https://zoom.us/about&sa=D&ust=1608712240355000&usg=AOvVaw1HUdORcTJPRjB75v95e5by>より、2020 年 12 月 23 日取得。

『東北人類学論壇 Tohoku Anthropological Exchange』規程

1　目　　的：『東北人類学論壇 Tohoku Anthropological Exchange』（以下、本誌）は、現代世界の諸社会・諸文化に関する広い意味での人類学的研究を掲載する専門誌として、人類学と関連諸分野における学術的交流に貢献することを目指します。本誌は、集約的なフィールドワークに基づく実証研究に高い価値を見出し、新鮮な調査報告の発信に努めます。

2　発行形態：本誌は、定期刊行の学術誌として大学図書館等に配付するとともに、オンライン版を東北大学文化人類学研究室のホームページ上に公開します。

3　使用言語：本誌の使用言語は、基本的に日本語または英語とします。

4　論文審査：投稿論文は、活字あるいはＨＰ上で未発表のものとします。論文は編集委員会において厳正に審査されます。「採用」「条件付き採用」「不採用」の結論は、編集委員を通して執筆者に連絡されます。採否および論文のカテゴリー分類についての決定は編集委員会が行ないます。編集委員会での審査内容は公開しません。

5　投稿資格：本誌に投稿できる者は、東北大学大学院文学研究科人間科学専攻（文化人類学専攻分野）に所属する教員および大学院生、修了生に限ります。ただし、編集委員会が適当と認めた場合は、これ以外の者の投稿を受け付けることもあります。

6　発行母体：本誌の発行母体は、東北大学大学院文学研究科文化人類学研究室「東北人類学論壇編集委員会」です。事務局は同研究室に置きます。

投 稿 規 定

1　投稿者は、「東北人類学論壇編集委員会」宛に、原稿（横書き）を１部送付してください。原稿は返却いたしません。

2　原稿の枚数（400 字１枚計算）は、本文と画像を含めて、50 枚以内を目安とします。

3　ワープロソフトに依存する特殊文字や外字は使用しないでください。本文中の「註」の記号は、半角数字を使用してください。

4　画像は著者が作成してください。オンライン版にはカラー画像が掲載できますが、冊子版には白黒画像のみしか掲載できません。雑誌用の画像は送っていただいたものをそのまま白黒コピーして印刷します。

執筆者紹介

陳　珏勳	台湾大学人類学博士
李　欣晨	東北大学　大学院文学研究科　広域文化学専攻 文化人類学専攻分野　博士後期課程
ガン　ウェンスオ	東北大学　大学院文学研究科　広域文化学専攻 文化人類学専攻分野　博士前期課程 令和 3 年度修了生
末谷　夏津樹	東北大学　文学部　人文社会学科 文化人類学専修　令和 3 年度卒業生
杉山　沙也香	東北大学　文学部　人文社会学科 文化人類学専修　令和 3 年度卒業生
柳瀬　文乃	東北大学　文学部　人文社会学科 文化人類学専修　令和 3 年度卒業生

東北人類学論壇　第 21 号

2022 年 3 月 31 日発行

編 集 兼　東北大学大学院文学研究科
発 行 者　文化人類学研究室
編 集 長　沼崎一郎
発 行 所　東北大学大学院　文学研究科　文化人類学研究室
〒980-8576　宮城県仙台市青葉区川内 27-1
電子メール　tohoku-anthropo@sal.tohoku.ac.jp
ホームページ　http://www.sal.tohoku.ac.jp/anthropology

ISSN 1348-4184 · Volume. 21 · Mar, 2022

Tohoku Anthropological Exchange

Cultural Anthropology Program

Graduate School of Arts & Letters, Tohoku University

Articles

Tan Kakhun · 1

Japanese Shrine Festival in Taiwan under Japanese Rule Seen through the Movement of the People and Mikoshi: The Case of the Taiwan Shrine Festival

Li Xinchen · 28

I am a "Dongfang Factory Guy": Life Stories of Three Generations of Policy-Guided Migrants in China

Exploratory Articles

Gan Wen Shuoh · 48

The Competition of Etiquette and Manners: An Anthropological Study of Japanese Chess

Kazuki Suetani · 67

Supporting end-of-life planning: A Case Study of Shukatsu(終活) Counselors in Miyagi

Sayaka Sugiyama · 84

Uncertainty in Buying and Selling at Antique Market: A Case Study of an Outdoor Antique Market in Sendai

Ayano Yanase · 106

What is "Oshi（推し）"?: An Anthropological Study of "Otaku" in Japan